断片　二〇一七

u_

（彷徨ってはいなかった…）

彷徨ってはいなかった、とも言い切れない。火が遠かったから。火の近くなら彷徨い出ようも何処もない、遠ざかるなら彷徨うのは火に違いないし。遠くにさえ火がなければ、彷徨うばかりか彷徨いようもないかで。遠い儘に、火が何をして来るか知れないでは、常に彷徨っているようにも、火へ傾く儘にも身構えて置くしかない。などと考えていたでないにしろ、喉が渇けば、たっぷり水を含んだ色取り取りの色の塊は好きに手に取れて、その色の味を流し込む喉越しを頼りに、先へ先へと迷うのも構わないとばかりに迷わない。取って返したいなら、何時でもそう出来る。ただそれさえも、彷徨っている内かも知れないないと、心付きながらに。で、色の塊の、その色が、何時の間にか熟れた一つの色になっているなら、足は踏み出されている筈が中中先へ進まないようで、それでも何かが動いているそちらへ目を遣ると、遠い火の色を淡く映す静かな風の吹き去って行く姿を追うしかなく、その姿を見失わないなら、足の止まって却って流れるように、そちらへとぐんぐん向かっていないかな。右の踵が針

を刺したように痛み出す。火が飛び込んだんだ、そう思えば間違いなくそれは小さな火で、足を冷やす水を探すべきとは分かりながら、態とそれを放って置いたらどうなるか、それを知りたいばかりに、踵を内から火で炙るに任せ、ズキズキと。そうして岸に打ち寄せられた朽ち木さながらに動かずに、そこに横たわって、それでもその影だけは、目の前を行き過ぎるように波打って、影のそうなら、横たわる儘に流れて行くに違いない。と、迷いようもなく、そちらを向くと、影の届かない向こうに、右足だけを白く赤く染めた身が、焦るようにその先の風を追っている。風など追ってはいけないのだよ、だって却って火は勢いを増して、取り返しの付かない事になるからね、と影なら諫めて呉れるんじゃないのかな、などと甘い見通しも分かりながらに、ただ時を費やせば、頭ばかりが捥げんばかりに俯いて、何も見えない足元を見詰めるようにしていると、思った通りだな、体はくるりと引っ繰り返って、逆さに裸ですっかり風に晒され、どうにも出来ない。頭ばかり闇に突き刺さって何も見えなくても、風に撫で回される肌身の冷たさは、恐ろしい程にくっきりと逆さの頭に錐揉みのように落ちて来て、それで頭はすっかり凍ったようでも、それを見放すように身ばかりは何故か暖められ、震えながらも眠り込むしかなかった。で目を覚まして何一つ変わっていないなら、何の為に眠ったんだろう、と逆さの身をすんなり元に戻すと、待っていたかに右の踵がまた痛み出し、その耐え難さに、

足は来た所を迷わずぐんぐんと戻って行けて。そうして行き止まれば、そこが塒なのは明らかで、なのに頼れる筈の誰も帰りを待っていては呉れなくて、火が近いの遠いの知った事じゃなく、そこからまた、何処へ行く当てもなく彷徨い出るしかない。で直ぐにそこは昂ぶるように枝を思いの儘に伸ばす高い木木が其処彼処と繋ってるのは何だろう。木なんて見た事ない。なら、木なんて知らない筈。それでやっと、それまでずっと草原ばかりを歩き回っていたと分かった、それも酷く見通しの悪い。ただ、それで水を含む色の塊は幾らでも見付かったんだな。それが、高い木の続くせいで見通しは良くなって、でも木の間を透けるように通り過ぎる度に、今までと変わらない水を溜めた色の塊を、喉に流し込めてはいるらしい。いや、どうやら色が見えていない。なので色の味もしない。それで、飲んでいるのが果たして水かも怪しくなって、なら飲むのは已めるべきかとも迷いながら、飲み続ける先に何が有るか、それを知りたいばかりに飲み続け。右の踵は少しも痛みが退いて呉れずに焼けるようで、その熱さこそ、色取り取りの色なのでは。ああそれで、飲める塊は、水かどうかも知れなくなるまでに色を失ったんだな、と分かれば飲み続けるまでもなく、するともうそれらは何処にもなくて、それで行き成り木の幹に体をぶつけてしまうのを繰り返して、どうにも出来ずに、剥き出しの肌は、みるみる傷付いて滲んだ血に染まって行く。血は平たく固まっては、またその上に滲んで被さって、

そうなればもう、鑢のような硬い木の幹も跳ね返せる。そうして殆ど血の塊か、血の鎧でも纏ったかの姿になっても、右足だけは白い肌の赤い儘で、やはり踵だけがズキズキと痛み続け、その痛みと比べられるせいか、血に覆われている身は何処も、甘く柔らかくぬるぬると優しく包まれているようで、これで踵の痛みさえ退けば、血塗れの儘に他に何の望みもないな、とも思えないのは、どうやら血を流し過ぎたせいで、喉がカラカラに渇いているから。喉を潤して呉れそうなものの見当たらないなら、見上げる木に登るしかない。そこに水を含む実が生っているか、でなければ、そこから遠くを眺め回して小川か湧き水を見付けるか。そんな事？　そんな事か。そんな事で何になる。そんな事じゃないんだよ、間違いなく。で、喉を渇くに任せれば、ぐりぐり内へ転げるような喉笛の辺りがひゅひゅっと鳴って、呼びたくもない風を呼んでしまえば、丸く脹れる布のような水色を、水色ならば水なんだ、それを腰から下にずっとそうして来たかに纏っていて、そこに遠過ぎて色を失って、替わりに燻んだ灰色を渋渋映す火が冷たく走る。そう見えた、その見えた儘が、遠過ぎる火から更に遠ざかって逃げる向こうに身が傾けば、それに付け入るように尖った小さな風が斜めに来て、水は水色を恥じるかにふわりと捲れ、腰から下が火に剥き出されるしかない。遠過ぎるなんて何でもない、火は火ならば火なんだ。しかも水に絡むんだから間違わない。　でもう風は嘘のように萎えて、火に見棄

てられたのを恨むかに、足元を囲んで輪を描いて、その影が、草の匂う濡れた土でなく、もっと硬いものを探しているようなら、音が輪の儘に聞こえて来て、その音より硬いものなんて有りそうにない。だって、その音が石で。石って音で出来てた事は知ってたな。そう思い出されると、石に齧り付きたくて堪らない。ガリガリ囓って砕いて唾に混ぜて飲み込めるなら、石はとても柔らかい。そうとも思い出されたら、石の並べられるのなんて、待ってられない。囓ってしまえば、それが石なんだ、音のする。なる事を思わずにいられないのは何故、も何も、誰がそんな事を思うんだろう。私じゃないよね間違いなく。いや、私じゃないのなんて、どうだって構わない。石を囓るなんて、火の仕業に決まってる。それも遠い火なんかじゃない。遠い火なんて火じゃない。火の色と熱を出す光りでしかない、きっと。光りが何かは知らないけど、そんなの知らなくて済むんで。それより石へ零れ落ちて行く火だよ、何かの間違いかに股の間からドロドロダラダラと何処へともなく。だって、何処で鳴ってるか知れない音ならんだもの石は。で火は何処へ行ってしまったんだろう、も何も、音さえすればば、そこで火は石に齧り付いていて。そうしてもう、火は石になってしまったんじゃないかな。だって私は、そうだよここで私だよ、その私は、なくした火を血眼で探していないかな。でもどう遣って？って思えば、それは石になって、でしかない。いや違う、私は冷たい石によって、火と隔てられてしまっている。

でもそれで良いんだ、だってそれならもう、火を探さなくて済むから、済まなくたって、どうせどうにも出来ないから。で私は終わり。すると黙ってないのが火で、つまり火が火を探すって事しかない。何それ？だってどう遣って。分かる筈もなさそうなら、もう火なんかの事じゃないんだよ。何が何を探してるかって。火の後を追って股の間から流れ出て、水に落ちて流れて行ってしまったもの。いや違う。そうして水に落ちるものを全て流して失って、水の流れを追うしかないもの。水より速く、翼を生やしてすっ飛んで、でもそうして水を先回りしたって、何も見付からない。だってそんな水なんて何処にもないじゃないか。翼を生やせば、飛んで行けるのは乾いた所ばかりで、自ら翼を捥ぎ取って水へ落ちるのを思い描けはしても、そんなのって全く火だよね。その火の姿を羨んで、火を真似て、錐揉みのようにクルクル回るんだ、そうして火を熾した積もりになれば、また右の踵がズキズキと焼けるようで、やっと何を探していたか分かったような。つまりその右の踵をズキズキ痛めるものを、右の踵が探していたんだ。その痛みにしか、その痛みの失ったものは知れはしない。ならその痛みを、石のように重い翼を背負いながら、裸の冷たい身から解き放たなければ、でもどう遣って。火が飛び込んだんなら火で、だけど、全く火だって言ったって、それって、ただ思い描かれているだけって、もう分かってしまってるからね。ならもう、その痛みは、他の何とも取り替えの利かない、ず

っとその痛みの儘で、その探すものを探し続けるしかないって事？　ならもう、何処を彷徨うもなく見付かってるんじゃないか、その痛みの中に。見付かった儘、痛い足を引き摺って彷徨うもなく彷徨ってれば、それは何処へも失われはしない。そんなもの。でもその儘じゃきっと体が保たない、でもどうにもならないなら、何を待とうが、待ってもいなかったのに来てしまうのは、木を知らない草原に一つだけ点されていた小さな炎のもう見当たらないけど、それをどうしましょうって知らせで、いや知らせであるかも怪しい、ならその炎の見当たらないのを、風一つ戦がない静けさのように目の当たりにしてしまって、草原より更に手前に遡れば、くるりとそこは遠い向こうで、その見晴らせる果てまでも、茫茫と暗い闇の欠片のような火が、そこかしこと絶え間なく降り懸かる。そんなものなら火じゃないだろ、どうして炎の姿をして見せて呉れないんだ、と言ってみるとしよう。言ってみるだけでは足らないなら、その降り懸かるものを一つ一つ振り払って、穂を刈り集めるかにそれらを零れ溢れるまでに脇へ抱え込めば、それに引き摺られる影のように、火の色ばかりが何処までも拡がって付き纏って、その間ずっと失われた炎を力の限り探し回っていたに違いない、激しく息を切らした身は、その耐え難さに自ら身を二つに切り裂いたか、それとも火の色ならば、息をする肉を追ってはそれを二つに切り分けるのは常の事なのか、その分かれた儘に二つの身は絡み合って、それで、それより

はない程に真っ直ぐな炎を象るかの心持ちに酔い痺れれば、ぐりぐりと盛り上がる石を踏み付け踏み叩くのは、ズキズキと熱く痛む右足で、その足に籠もる力の儘に飛び上がるように遠くを見通せて見えて来るのは、一つ限りの炎の、殺されて水に沈んで取り戻せない姿でなくて何。いや、何？などと問うてはいけなかった、でももう取り返しは付かない、それは直ぐに水ごと失われて、痛む右足を引き摺る、惨めに一つばかりであるしかない裸の身を、遠過ぎて見えない火の色に晒して、なのでそれは肌色ではなく燻んだ灰色で、灰色ならば灰なんだ、それならそれより失われようはないな火がどれ程熱く側まで来ても、などと、ぼんやりうっとりしていれば、手に取れるものは何でも黙って食べられる、その甘みの舌を突き抜けるばかりの水の味でも、それが水かどうか知りようもなく。これでもう死ぬのも叶わないんだ炎を追って、などと、ふと頭を掠めても、戯れるかに石から湧いて見せているだけの、止まった風の音の輪に踏み込んだ右足が抜けないなら、灰であるだけの身に何の足らないものがあろう。と我に返れば、崩れない身が灰である筈もなく、失った何かなら、見た事もない炎の姿などでなく、股の間からドロドロダラダラと零れ落ちて、何処へとも石を焦がして流れて行ってしまった火に違いなく。でも誰が？　股の間からドロドロ零れる火なんて、その身にしてみれば、失うも何もない、ただそれだけの事。要らないんだよ、要らなかった火なんだよそれ。ならそれって、失

うとかじゃないよね。なら誰が何を失ったの？　いやその前に誰の股から火が零れ落ちたのかな。でもそんな誰なんて、探しているものからしたら、何でもない。やっぱりずっと彷徨ってるんだよ、何を探しているかを探して、痛みなんかより前から。いや違う。もうなくしてしまえば、何へ何処を彷徨うもない。なら、彷徨ってるんだよって言いたいんだよ、何かかにかに託けて。でもその、言いたいだけってのでも彷徨ってるんじゃないの、足ででではなくて。ただ見た事もない炎の揺れる様にでも、ふらつく身を準えて。でも、ならきっと、炎を見た事もないのも違うよね、見た事もない事にしなければ彷徨いようがなくて、そう決め付けているだけで。でも炎が何時消えたかは知りようがなかったし、それが僅かにでも水の底にでも灰を残したかどうかも、知れない儘で。そうして静かに濃い影は消しようはなくても、止まった風より止まったかに身を消すようにしていれば、その静けさへとドロドロと火は必ず、望まれる儘に何時か戻って来るしかなくて、（二〇一七年一月十九日）

（あいつにもどうとも…）

あいつにもどうともならないんだけど、あいつは真上しか見ない。あいつで

なければ、その真上は明る過ぎる、って事になってる。あいつと同じ形をしていなければ、真上を見続けるなんて出来そうにない。いや、真上を見続けるだけならば、そんなの幾らでもあるけど、そこを動けないのばかりで。あいつだけが、真上しか見ない儘に、見えなくなるまで、昇って行ける、って事になってる。なってる事なんだから、そうなってるって、分かってしまえばそれっきり。そんな事より俺は、いや、そんな事だから俺は、あいつの他の何でも構わない、殺して血を見たいんだよ。その血が何に塗りたくられるか、血を塗りたくられたくて何がそれを待っていたか、知りたいんだ。それで、何故俺が血を見たいに決まってるかも分かるんじゃないか。で俺は殺せるものは何でも殺したんじゃなかったっけ。それとも、ただそんな何を殺したって話しばかり繰り返し聞かされて、その積もりになってるだけかな。でも殺したかどうかなんて、どうだって構わない。目に入るものなら何でもずっと殺して来たって、そう思えるかどうか。でその、どうかって、さっぱりはっきりしない。はっきりしない、ってのは、はっきりしてなきゃいけないって事だよな。で、そっちを見れば、そっちに向こうの見えるのは、はっきりしてる。その向こうの事だって、きっと知らない事はない。でも、行けない。そっちに行かなければ、何を殺したとさえ思えない。これもはっきりしてる。で、どう遣ってそっちへ行くか、なら今分かった。俺にそっちへ行かせないようにしてるものを殺せば済むんで、そ

れがお前なんだよ、何とか言えよ。「何を言わせたいんだい、言わせたい事位さ、あんたが考えなよ。」どう遣ったら、お前は俺に殺されるかだな。「そうだな先ず、血について、思い巡らせる限りを全て頭に並べるんだな、並べたかな、でも並べた端から、それらは一つになってしまうよね。あんたの嫌いな、真上の明る過ぎる眺めが被さってしまって。あいつなら思う様、幾らでも益益明るい中へ昇って行けるのに。そんなあいつの姿なんかちらついたら、きっとあんたは真っ暗がりを凝っと見詰めでもしなけりゃ遣ってられない。でも真っ暗がりなんて、疾っくに塞がってる。女を一人押し込める為のものなんだ全く、真っ暗がりって。ならば替わりにその真っ暗がりの上に浮かんでる、真上は見ても動けないものを取り集めて並べるしかないね。それは泥でも良いけど、真っ暗がりと混じりたくて崩れてしまう。水でも良いけど、真っ暗がりに触れればもう、その冷たさと交わってる。草でも良いけど、風に靡いてしまう。なら花だねぇ。花だよ。花を摘めるだけ摘んで、それであんたの目にはっきり浮かぶ血という血に敷き詰めて、それで、明る過ぎる真上からも塞がれた真っ暗がりからも、あんたは解き放たれて、その花花のどっさり重い塊のような形に、あんたの殺したい奴の姿をぐりぐりと掴み取れるって。どう思う？」殺したいのが女じゃない、って事だけは分かったかな。押し込められてどうにもならないなら、後後どうするかは兎も角、孰れはそこから生かして取り出さなきゃ、様にならら

ないし。抑も何故押し込めなけりゃならなかったかだよ、それを知りたくて女も真っ暗がりで凝っと細い竹の筒を吸って、その黙る水に馴染んで行く己の姿を、瞼の裏に探って、「知らんよ。女の話しなんてしたっけ、したなら、うっかりしてただけで。あんたの欲しいのは血なんだよ、それは知ってたよね、どう？　足元に幾らでも掻き取れる泥を握り固めるように、血を重く手に纏い付くまで掬って掬って捏ね回して、それを明る過ぎる中の眩しいあいつの姿に塗りたくりたいだろ。そんなの出来る筈ないって諦めれば、あいつのせいで眩しく見えてしまうものなら何にでも塗りたくりたいだろ血を。他に出来る事もなさそうだって見切って、落ち着かない腰もそわそわと浮かせながらに。殺したいって、そんな事なんだよ。」ん、そうかな、そんな在り来たりな事かな、で？「でも、出来ないんだね、出来ないに決まってるんで、そんな事をしたくなるんだけど、でも、その替わりに何が出来るかって、もう分かってるんだろ、なので言わない。」何を言っても言わなくても同じ、俺はお前をもう何時でも殺せる、お前とこうして声を重ねたからには、明るい空の下で包み隠さず。声を重ねた通りに、暇さえ有れば研いでいる俺の握っている刃を、お前の柔らかい肉に思う様深く刺して。「で、血は。血だろ、要るのは。殺すなんて後回し、何時でも殺れるし。でもあんたは、ただ血を目に浮かべてるだけで、血の匂いすら嗅げてない。そんな無様な様を忘れる為に掻き集められた花でしかなかっ

たのさ。でもそんな花なら、その色形が血の匂いみたいなもので。」殺せば後から付いて来るよね、血は。「そうか、じゃそのどっさり花の塊に、あんたの刃を刺してみろよ。」もうズブズブそうしているさ、でもお前は知らん顔、ならお前は、俺の殺したい奴じゃないんだ。違うか？「違うか違わないかなんて、知れてる。」誰だ？お前。「まぁあんたのたった一人の話し相手じゃないよ、それは知ってたよね。」知ってた事にして置こう、ならお前なんて要らないな、だろ？でもお前が要らないって事は、何を殺すのも要らないのかな。要るのは、俺には女じゃないのか、真っ暗がりに押し込めたのも俺に違いない、だって他に居ないもんな。でそれを、そこから取り出すのに血がなくてはならなんだ、真っ暗がりを切り裂く血が。いやそれだけじゃ足らない。真っ暗がりが相応しい穢れ果てた女の目に、たっぷり清らかな温かい血を擦り付けて、その穢れを落とさなければ。女の穢れた儘の目が、この空を見上げたらどうなるか、そんなの有ってはならない事だけど。きっと、ずっと遥か真上ばかりは、さぞ明る過ぎる儘だろう、それはどうともならないが、その明るさへはもう、俺の目は届かなくなってしまう、見える限りの空は穢れて曇って。で直に明るさなんて忘れられれば、何の形も水と同じに黙り込む。そうならないように、女を押し込めるしかなかった。「で、あんた、お前は要らないなんて言って、その癖ずっと誰に話し掛けているかは分かってるよね。で、あんたの欲しい血を何処か

ら持って来るか、それを誰に尋ねるしかないかだよ。決まってるよね。」女の腹を裂いて、その血を塗りたくれるならそれで済むが、女は殺せない。でも、真っ暗がりから引き摺り出せたにしても、何故女を殺せそうにもないんだろう、ひょっとしてお前じゃないのか、その女って？「それで鎌掛けてる積もり？真っ暗がりに押し込められた女なんて、もう口も耳も使い物にならないって、それは知ってたよね。」知ってた。でもそれって、お前が俺に教えたんじゃなかったっけ。にしても、なら女じゃないんだ、話しは。「やっと一つ、はっきりしたね。でその勢いで見回して、真っ先に見付かるのは何、丸丸太ってたっぷり血を身に溜め込んだ、なので遥か真上の明るさのその暖かさまで溜め込んだ、なので血は、真上の空と真っ直ぐ繋がってるって嫌でも教えて呉れる、その、何て言ったっけ、ほら。」あぁ分かってる、その名を言えないのはな、ならそうだな、女の背を裂いて骨ごとバリバリ裏返して、肉をぐるりと剥き出したものにでもして置こうか。「あれ？女じゃないって話しだろ、どうしても女を忘れられないんだね。」そうじゃない、裏返してしまえばもう、それは女とも女じゃないとさえも言えない、血を噴くばかりの何だか分からないもの。「ふん、この世に何だか分からないものなんて無いんだよ、それは有るなら必ず何かで。」じゃ、たっぷり血を溜め込んだ肉の塊だ、でどう？いや、きっとまるでそんなものじゃない。じゃないから、そう言うしかない、ならまだそれは、

何だか分からないもので、この世に有ろうと無かろうと。なんて事を言っててもどうともならないなら、さっさと殺しちまおう、って嫌でもそう思わせてしまう。でもそう思わされてしまう程、それは益益明るく、遥か真上から差す陽を独り受けて、目には狂ったように静かに涙を湛えて、その溢れ出さないのは、空の落ちて来ないのとも釣り合っているかで。それは、あいつのように、翼を生やして生まれて来られなかったのを悔いるばかりの。でも、そんなように考えてしまうのは俺だけかな。俺の目にしか、そいつを殺せると見えなければ。でその俺の目に映る、見えなくなるまで昇って行ったあいつなんだが、何を取り返そうとしたか、だ。俺があいつを殺したくて殺せない訳もきっとその中に有りそうで。握る刃を長長と高い光りに翳して、瞼の重くなるに任せて眠り込みたいな俺の頭の中を、それがぐりぐり回って、刃の回る様と重なって更に輝けば、その輝く光りをあいつがどれ程溜め込んでいたか知れるらしい。あいつの生やしてる翼は他とは違うんだ、きっと光り輝くものなら何でも、その翼に抱え込めて、それで益益翼は真上ばかり向いてしまう。で明る過ぎる真上を向くあいつの目には、きっと真上は然して明るくもなさそうな。いやひょっとしてあいつは、昇れば昇る程、その高みの明る過ぎるに違いない筈が、恰も真っ暗がりだなってしか見えなくなって。なんてのは俺の僻みにしても、きっとあいつには明るいも暗いもなくて、有ったにしても余所事で、だから昇って行け

たに違いない。そんなあいつを見上げるしかない俺だけに、明る過ぎる真上がなくてはならないのかもな。で、手にも腕にも重い血がぬるぬると纏い付いて来るぞ、どう遣ったのかは知れないが、俺は刃を何かの肉に突き刺した。俺だけの明るさが真上から降りて来て、俺に手を下させたんだな。で血を何に塗りたくるかだけど、そんなの血が独りでに溢れ出て、そこかしこへ塗りたくられて行くしかない。そんな事に手を貸したがる好き者共なら数知れず湧いて出て来そうだけど、そんなの一一確かめて居られない。なら血の事じゃなかったんだ。切り裂かれた真っ暗がりから白く丸い小さな女を、玉を掬うように取り出して、でもまだ陽に当てるのは早いかな、とは言え、陽の差して来るのは何ともならない。それより女を土に触れさせては、体はきっと溶けてしまうだろう、土に染み込んだ陽の光りの明るさと暖かさのせいで。なら陽を撥ね返せる平たく磨かれた冷たい石を探さなければ。しかしぷるぷる震える女を抱えて、何処へ探しに行けようか。「そんな女なんて捨てちまって構わないんだよ、真っ暗がりに押し込めなきゃいけなかった時に押し込めて置けたんだから、それでもう女の事なんて済んでるんだよ、後は、溶けて流れようが凝り固まって身を晒そうが、好きにさせるさ。それより花じゃないかな、花はどうなった？まだあんたの目にその咲く姿は映っているかな、いないだろ。もう花は終わってしまったね。ならやっぱり血なんだよ。」ふん、花を終わらせたのは血なんじゃな

いか。それとも血を終わらせたのが花で、それで花も終わるんだ、どっちでも構わんが。「そうかね、あんたがそう言うんなら、花も血も、終わらせたのは、あんたなんだよ、他に居ない、何処でも見回してみなよ。花はすっかり散って実も落ちて、血は塗りたくられるだけ塗りたくられて、高い陽さえも戸惑うばかり、何処へ差して良いか分からず、空に浮かんだ儘かな。雲に懸かってやっと見て取れようか。で、土はすっかり冷えて、風も濁るばかりで。誰がそれをどうにか出来るかって、出来ないなりに、そこを彷徨き歩いて、そんな己の姿を嘲笑いながら、その笑い声の届く限りの光りと影に嘲笑われながら、その寂しい眺めに色を添えるのは、あんたの他に居ないじゃないか、花も血も終わらせたからには。」な事なら、何とも詰まらん役回りだな。でもそんなの、どうって事ないって思ってしまえば知った事じゃない。何処を彷徨こうが、ただそれだけで、その眺めにどうとも溶けてゆらゆら消えるだけ。それより真上を見上げれば、そこが明る過ぎるとかどうかなんてどうでも良くて、消えるまで昇って行ったあいつが、真っ逆様に降りて来るんじゃないか。真っ暗がりを凝っと見詰めたいに違いない尖るだけ尖った目をして、遥か空の上が明る過ぎるのを、汚い掠れた濁声で呪い呪い。でもあいつは降りても降りても真っ暗がりへは行き着けないんだ、女には成れないもんな。ああ面白い、俺の足下はすっかり冷えた土なのに、そこへも辿り着けないんだ、でも翼は拡げた儘、明る過ぎる空

への呪いを吐き掛けられる、逆様の先へ先へと叫びながら降り続けて。それって何処だろう、明るいだけの空よりも、きっとずっと訳が分からなくて。あれこれ出たり入ったりして色色と楽しめそうだ。「そら、そうして浮き浮きと嬉しそうなあんたの姿が、ただ一つの色なのさ、花の色と血の色とを独り受け継いだ。」ならそうして置くさ。で今、俺が欲しいのは、女かも知れん。俺が何をしたら良いか、明る過ぎる空なんかよりはっきりと、そのブルブル震えるのを怒りを込めて抑え込んだ、ぐさりと真っ暗がりな目で、刺し貫くように指し示すばかりな。「やっと私を向いて呉れたね、あんた。私の姿なら、あんたの弄る儘に、あんたの直ぐ側さ。息の匂いを嗅ぎたいなら、吐き掛けても遣ろう。先ずは私の女の体をしっかり確かめな。」出任せなお前の言い草なら黙って聞いて置いて遣るが。しかしどうやらその女の体ならもう、飽きる程味わったならしい。それより俺が欲しいのは、その女の目の向く先だ。そっちに俺の殺さなくちゃならない奴が居る。やっぱり俺は、ただ殺すしか出来ない俺でなきゃいけない。俺の目に殺せる奴の姿が映れば、必ずそっちへもうすっ飛んで行く。俺は他にない。そうに違いないと思わせて呉れるなら、お前が女で構わない。「それだよ、あんたがあんたなのは。で私がずっと何を見てるかって。あんたが手を下して流れた血とバラバラにされた肉はもうすっかり、この寂しい眺めの隅隅にまで塗りたくられて碌に陽も差さないなら、時がぐるりと一巡りする

のを待つしかないよね。でも切り裂かれた痕のその儘の、歪に反り返る粗皮だけは、吊されて濁った風に晒されて独り明るくもない真上を見上げて、ぐるぐる回ってもそこを動けない。あんたが面白がってるあいつの欲しいのは、きっとその皮で、でもどう遣っても、訳の分からない向こうへしか翼を傾げられない。どう思う？」なら、あいつはあいつの儘にさせて置こう。俺がその皮を被って、刃を振り翳してぐるぐる回って踊り続ければ、俺は殺すだけの俺で居られそうで、それで何が殺されるかなんて知った事か。そうだ、それだよ。俺はただ殺せば俺で、殺されるのが何かなんて、まるで知らなくて済む、いやきっと知るなんて要らない事で。あいつの明る過ぎる空を呪う叫びも、のべつ聞こえて来るけど、何を呪っているかも知れないだろうさ言ってる事が言葉にならない出鱈目だし。なのであのでかいだけの汚い声を何処へでも撒き散らせるんだな。で、俺とあいつは、どっちも、その何故そうしてるか知れないでいる事で、知らずに繋がってしまうのかも。でも、そうと知れるそんなあいつなら、殺すしかない。あいつが俺に叫び声を届けるしかないように。でもどう遣って？
「そう思えたなら、あんたはもう何処かに居る儘のあんたじゃない。何処へでもすっ飛んで行く儘のあんたじゃないか！　そんなあんたの姿があんたには見えないか。」粗皮を纏って、ぐるぐる回っては居るけどな。すっかりもう様になっちまったぞ。でその俺が何処でもすっ飛んで行く儘だとして、それであい

つが殺せるなら、後は、それであいつがどうなるかも何も知らなくて済むって事か。いやそんな事じゃない。あいつの事なんて、初めから知った事じゃないだろ。ならあいつは何を呪っているか、俺はそれを嫌でも知らなくちゃならないのかも。だってもう何がって、他に何もないじゃないか。言ってる事が言葉でもなさそうなら、あいつの真っ暗がりを凝っと見詰めようにも見詰められないで、明るい向こうへ逸れてしまう、尖るだけ尖ったあの、恐らく死ぬまで滲めったらしい目は、俺に何を知らせようとしてるのかな。「ふぅん、そんな事？例えば何て。」それはだな、何故お前は女を殺さないんだって。そうだ、何故俺は女を殺せないんだろう。「まぁ私がたった一人の話し相手だからだろうね、それは知ってたよね。」知るか。殺せもしない女が、何で俺の相手になるんだよ。女の事なんかじゃない、お前は黙れ。あいつの目は、何故俺があいつを殺しに来ないのか、それを憤ってるか恨めしく思ってるか、そんな事だ。あぁこんなの決まり切ってるのに、何故やっと今分かるんだろう。「どっちを向いても、向こうが空のように明るいからだよ。で、その空の明るさがまやかしだって、見透かせてしまうからだよ。然もその見透かせたのもまやかしだって見透かせてしまうんだから質が悪いよね。あいつなんて、真上へ昇って行くその身が丸丸そんな事だから堪らなかろう、ってのも、まやかしなんでそう見えるだけで。とは言え、そう見えるしかないあいつへすっ飛んで行くあんたは、ずぶ

りとあいつの胸に刺さって、まやかしの身になってはずっと望んでいたに違いない、明るい向こうへ逸れる儘にあいつは身罷って、噴く血を霧のように撒き散らせば、その陰陰に、真っ暗がりに似せた暗がりを描き出せて、甘い汁に惹かれるように、あいつと同じ姿形のまだ真上を向くのを躊躇う幼げな奴らが集って、あいつの屍を、真っ暗がりを入れる器のように扱って、その声声の喧しさったら。アハハ嬉しくって笑いが込み上げる。で、あいつの屍なんて吹っ飛んで、ならあんただよ、あんたが突き刺さって行ったのは。で、そのあんたに刺し貫かれたあんたの屍はもう、初めっからずっとあんたの脇に設えられてあった、陽を撥ね返せる平たく磨かれた冷たい石の上に寝かされて。その為の声の喧しさだったんだなって、それだけは、屍のあんたにも分かって喜んで貰えそうかな。なんて事は望んでなかっただろうけど、それで却ってあんたのその喜びは、あんただけの石の冷たさに、血の匂いのしない、なので枯れもしない花でも添えるように、（二〇一七年二月二十五日）

（声はね、届く…）

声はね、届く所までは届けなくちゃいけないよね。それでやっと、聞き届け

られるんだ。でもその何処まで届くかは、雲も霧も吹き払われて、あの高い空の下を漫ろ並び歩いて山へと、皆で心を賑わせて。そんな、その待ち望まれる時にしか聞こえない、その賑わいの音を、出来るだけ微かに、柔らかな小さな卵を耳に白く秘めるように聞き取って、日を数えて行くんだけど、そうして数え尽くされてだけ、届く限りへ届けと張り上げられる声の、その届く先を仰ぎ見られるにしても、でも色色さ。つまり色にも粗いとか細かいが有って、それで時の音は、どのようにもその色に染まって、大きいとか小さいとか、高いとか低いとか、でもまあ、速いかゆっくりかだよね、その身に染み通るのは。速い音に身を震わせれば、粗い色が粗く組み合わさって、めきめき時を数えられる。めきめき。聞いた事有る？そんな音。身と時とが震え合う。ないとしたら替わりに聞こえるのはどんな音かなって耳を澄ませれば聞こえる筈が、でも聞こえないんじゃ時を数えてないって事かもよ。数えないでは時は来ないんだよ、知ってた？　時は流れるって嘘だから。良いよね嘘って静かで。どんな色も綺麗に見えて来る、って程でもないけど、綺麗な色ばかりを選り集めたくはなるかな。だって他に、耳の底の静けさを埋められるものなんてないもの。柔らかな小さな卵は何処へ行ったかって？その卵が静かに色色の綺麗な色を巻き取って行くんだよ見えるでしょ。見える見える、ああ楽しい、何が嘘かなんてすっかり忘れられて。でもそれなら、その卵が嘘の始まりだよね。卵のように聞き取

れるのは何って、遠い外からの音よりないでしょ。それが何で色を巻き取ってるのかな。何も見える筈ない。ひょっとして、色の音を聞き取って、その聞き取れた音を卵の白い上っ面に滑らせて、見えない位細い音を巻き付けているのかな。そんな事だから、嘘の時の流れにでも乗るように、その音を重ね重ねして、見た事もない色を着けたり消したりして遊んで居られる。な事より、どうして嘘って始まってしまったら、それ切りずっと嘘なのか、なんて事考えたってもう遅い、下手に考えたら、何処へ転げ落ちるやら。嘘の外だったりしたら、嘘へ戻る道筋すら立たないだろうな真っ暗で。いや嘘の外なんて何処にも有りそうにない。とは言え、その転げた先に、何が有るか何を出来るかは知れはしない。それとも知れてるのかな、嫌でも時を数えさせられる所、きっと何の色も見えはしない、少なくとも綺麗には。汚い色なんて色じゃない、って考えを捨てなければ遣って行けない、そんな所で、あの遠い賑わしさの届くにしても、がさがさ時を数えるだけで息を切らして、音なんてどれも吹き散らかされて、耳へ入っても来られない。数える程に時は重く肩に伸し掛かって、どんなにゆっくりなり音の色も望もうにも、身に染みてなんて来ない。でもまあ、嘘なんてすっかり忘れてしまえば、何の憂いもないって事に出来ようかね、少しも出来てないって分かりながらも。で憂いはこっそり深まって行くにしても、それは嘘の静けさと混じり合えば中中に、うっとりとさえして居られる、色とさえ遊

んでられるなら。で、そんな事をどうにも手放したくなくて、それでどうにもそこにそうして、傍目にはムキになって立て籠もってるようにさえ見えるのかなって、そう危うく分かってしまうようでも、それも嘘の静けさに混ぜ込んでと。さて、とは言ってもだよ、何の為に籠もってるの？ずっと籠もっていたい為じゃないよね。届く限りへ届けと張り上げられる声の、その届く先の仰ぎ見られる所、その時限りの、ああ何と色取り取りの綺麗な色が織り合わさって、それで艶を増す声がまた合わさって自ずと流れるように色は様様に作られて、そう誰でも知ってる。そこへ行きたいから、そうして今は凝っと動かずに、色と遊んでるって訳だね。そうか、なら暫くはそうしてようか。で、張り上げられる声の織り合わさる所だけど、それはほんの一時で、にしても、ま、そうして聞き届けられた訳だけど、何が。声に届けられるものなんて知れてる、その届く限りの所からすれば。だって声の届く限りの所より先には声はなくて、なら何でそこまでは声が響き渡るかって言ったら、汚れてるからだよ、知ってたよね、声って、この世の汚れで出来てるんだ全く。だからその届く限りへ届けなくちゃいけないって考えが、さも正しいかに罷り通るんだ。汚れる儘で何が悪いんだ、きっと色だってどんなに綺麗でも、ひょっとして綺麗なら綺麗な程、元は汚れているから綺麗なのかも知れない、それで遊べもするんじゃない、って、そのこっちの考えは中中罷り通りはしないけど、こっそり何処かで信じ込

まれてたりとか、どう。でだよ、声で届けられたこの世の汚れは、そこで行き止まりで、その先は声がなくて引き取って貰えないなら、投げ棄てられるしかないって何処へ、かなら川だね。川って、声の届くも届かないもない、だって水の音だけで溢れてて。で投げ棄てられたものは赤ん坊の形をしてるなら赤ん坊なんだ、死に掛けの獣のように低く途絶えない泣き声ばかりが頼りの、影のねっとりと濃い。なら丸丸と、浮くように沈むように水の上と下をコロコロ転がって海へ出るなら、そこは渦が巻いて、巻き込まれて海の底。でも何でもない、この世の汚れその儘の泣き声さえ潮の辛さに噎せ返ってがなり立てれば、その泣き声を海の底へ置き捨てて、もうふわふわと川岸で。呼んでるよ、おかあさーん、って聞こえちゃったら、お母さんでしょ、って誰が。何処をキョロキョロ見回してるの、その声は薄っすらと、他の綺麗な声の色に混じって卵の白い上っ面を滑ってないかな。ならその細い色ばかりを巻いて行こうよ、卵の形へ、なんて言わなくても、もうその色ばかりくるくる回って、卵の形なんて弾き飛ばして、さあそれで、もう時が来たんだよ、数えなくても数えたかに、それとも赤ん坊が代わりに数えて呉れたのかな、きっとそうだ、だってその濃い影の丸丸とした身は、蹴飛ばしても向こう岸へぶん投げても戻って来るよね、毬のように。そうして撥ねる度に数えてしまうんだな時を。そうと分かればもう要らないんだ赤ん坊なんて。で居なくなった赤ん坊の残して行った細い色ば

かりが巻かれ続けるんだけど、細過ぎて何時までも経っても細い儘。ならそれで構わないや、ってそれを耳の中に巻き続けて、でもそればかりだなって分かれば、顧みる身はその色の音の震えを纏うばかりの、赤ん坊と同じ丸裸で。でもそうして凝っと動かずそこに籠もる儘ならそれで構わないし、って呟いて、赤ん坊の数えて呉れた時に割り込んで。そうなりゃもう、周りは声ばかりの賑わい、色なんて汚れて穢れて、そんな汚い色の身形で、何の声が何処へ届くものか。でももう済んでるんだよ、そんな話し。済んでないかも知れなくても、係わりないんだよ、ここらで声を上げてるような誰もかもには。届く限りへ声はもう届けられて、それでこの世の汚れは何処って見れば、何処も彼処も汚れで溢れて、でもそんなの知らん顔で済んでしまうのは、誰もかも、もっと汚い顔付きだからで。ただ独り、身に細い色の音の震えばかりを纏って丸裸の誰かさんだけは、そうじゃないって知ってた？　なんてまぁ私独り綺麗な顔してるんだろ！って笑いが込み上げるにしても、それで何処に行き着けるのかな。誰も汚い顔付きなんてしてないよ誰も汚い顔付きなら。綺麗も汚いもない、だって声は届けられたんだ、その届く限りへまで。で声の消える筈もないなら、それがまた汚れた世の中なんだけど、そんなの決まり切ってるよ、だってこうして声になるものを声にしてられるから、こうして上を向けたり下を向けたり出来るんで。そこで、何処へどう籠もろうと色の音を纏うばかりじゃ、それをどう

穢れなく奏でても、そうして身を幾ら飾った積もりでも、恥ずかしい。裸を隠そうとするならさて何処かな。汚い声に晒されてしまうなら隠せない。ならもう土の中しかない、声を拒むなら、その汚れを何処へ届けようもなくてずっと汚れっぱなしのね。土の中って、世の中に入らないから、知ってた？　でもそんなに慌てる事でもないか、なら、赤ん坊のお墓でも建てとく？建ててあるなら発いとく？でもどう遣って。だって赤ん坊なんて初めから居なかったのは知ってるよね。も何も、向こう岸へぶん投げてたのは、少しと数えもしなかったせいで濃い影を落とすだけの丸丸と丸まって、何の使い途もない、時の屍で。それだけは嘘じゃない、だから戻って来てしまうんだ、ほら直ぐ足元に。やっと何処に立て籠もってるか分かったね。でももう時の屍も要らないんだ、だって要らない赤ん坊と見誤つただけのものだもの。それは見る見る朽ちて、籠もってらける所でもなくなって、風に砕けて吹き払われればどう？も何も、もう土の中にすっかり潜り込んでないかな。いや潜ったのは、土が汚い程に輝くばかりに綺麗なのは綺麗な細い色ばかりで、音の震えを纏う身は、土の上をのたくって。だって音は、声と同じで土の中へは入れて貰えないから違うの？違うなら違うって言ってよ何で黙ってるの。そうか、だって声なんて汚れてるものに身を震わせるなんて、したくもないよね。ならいっそ、声になってしまったらどうかな、めきめきかがさがさか、あはは。なら身を汚れで震わせるなんて嫌

な思いもせずに済むし、その身が汚れた声なら、直にそんな事も忘れて、世の中の何の汚れに係わるも染まるもなくて、ひょっとして世の中を綺麗に眺め渡せるかもね。でもそれだけじゃまだ、嘘が片付いてないか。でもそれで嘘まで片付けちまったら、その身が汚れた声だってのも嘘だってバレて、もう何処をのたくっても居られないなら、それでやっときっぱりと、輝く細い色を追うように、土の中へ潜り込めそうだね、やっぱり追い詰められて命懸けでなけりゃ何事も。やれやれ、ホッと一息。でも片付けられた嘘って何処へ片付けたの？数えてなけりゃ、まだ流れる儘の嘘の時に囚われた切りでしょ。それとも時はもう流れるのを已めたのかな、そんな時は世の中の何処かへ置き捨てて。でもきっと世の中に入れても貰えずに、流れて止まった時は踏み躙られるばかりで。で、そんな時から逃れられたかなら、やっぱり囚われる儘で。尤も、だからそれでどうなんだ、って話しかも知れないね。で、綺麗な細い色へは追い付けたのかな。ならその身もそれを纏って、さぞ輝いて居ようね。で、どうなんだろう楽しいのかな。何も言って呉れないなら、好きに思い描くしかないけど、うーんそうだな、時を数えるのから逃れたかったのなら、逃げ切れて、それはそれで身軽ではあろうね。いや忘れちゃいけない、声なんだよ身は、でしょ？ただ世の中には背を向けて、身を震わせたりせずには済んでるだけで。それでも声なら、届く所までは届けなくちゃいけないって、そこから始まってる訳だ

し、この話し。土の中をのたくるばかりじゃ、どうにもならないんで。どうするの？「なら、声を届けるって話しが間違ってるんだね、汚れる儘で何が悪いんだ、も何もない位に、って事さ、もう分かってたろ。」なんて事じゃ、答えにならないからね。声ならもう届く所へまで届くしかないんだよ。で届けられるのは、その汚れなんだよ、例え土の中でもね。世の中に背を向けた位で、何をひっくり返せるものか。届くしかないのが届かない儘なら、何だろう、己の汚れを食って出して、その出した汚れたものをまた食って出しての繰り返しかな。「そう、それが答え。やっと分かったのかな。でもそれって土の中ばかりの話しじゃないね。晴れ渡る空の下の世の中の汚れた声にしても、届く所まではは届けなくちゃいけなかろうがなかろうが、そんな所へ届いてなんてない。だから汚れる儘なんだ、そんなの届いちまったら、汚れを落とされて、すっかり透き通って色も音もなければ、何だそれ。聞き届けられるも、届く限りへ届けと張り上げるも、数えられた時の中ではその汚れを投げ棄てられようが、流れる時が嘘なら、数えられた時だって嘘だって、そんなの、もう初めから分かってたね。だから数えるんだ。流れる儘をお座なりの、間抜けの誰かさんとは違うんだぞ、って事にしたくて。それだけの事。だから川に水は流れる訳さ。水だって、流れてないかも知れなくても。だって流れる時が嘘なら、流れる水だって嘘だって、そうなるじゃない。でもそれじゃ、嘘の立つ瀬がないってとこ

かな。水ばかりは流さなければ、時の屍を流す為にも。風に吹き払われるだけじゃ、直ぐまた戻って来てしまう、粉粉に砕けて塵になって匂いは消せても。いや、この世はそんな塵ばかりで噎せ返りそうだけど、だからって何もかも止めてしまっては風も吹かない。で取り敢えずは水ばかりは流すんだ。でも、何だ？この話し。私って誰に口を利いてるのかな、私に口なんて無かった筈。ならきっと、私の身の汚れがその汚れとだけ語らってるんだね。でも何の為に？でも抑も汚れって何だっけ？どっちを見回しても、そんなもの見付からない。見回してるこっちが汚れだって事にしてみたって、何も言ってないと同じで。じゃ汚れなんてすっかり棄てられるかって言ったら、棄てられるにしても、その先に替わりに掴み取れる何もなさそうなら、汚れが汚れでなくなるまで汚れに絡み付くか獅噛み付くか、こっちが汚れだこっちが汚れだって、呪いの声でも吐き続けるか、でも、そんなのも直に飽きちゃいそうで。な事言ってられるからには、何処かをぐるぐる回ってるのかな、回ってなくても。そんなものって色しかないよね、行けども行けども土の中なら音とは係われないんだし。その色が私かどうか知らないけど、知らないなら私じゃない、私なんて無いって、誰に向かって言うもないなら、色はもう何処を回るも、何処も彼処も色ばかりで。ならもうその綺麗も汚いもなく、水が流れたところで何になる。水なんて疾っくに色に吸い取られて、ただの乾いた水色で、水色だからって水じゃないんだ。

じゃ何、何処まで掘っても土の奥へ果ての知れない、脹れるばかりのでかい石にでもして置こう、なら石の色だね水の色って。そんな事なら、何の色も何の色だって構わないって話しかな。そこをするする擦り抜けて行けるんだよ。って何が？私じゃない私だね、って事にしてもしなくても同じ事。ただ色なんだよ、擦り抜けるのも擦り抜けられるのも。でそこからそこに何が届けられるかって、幾ら巻いても巻いても細過ぎて何時まで経っても細い儘の、唸りでも上げそうに輝く、一繫がりの色で、それだけはずっとたった一色で、だから輝く儘に何色とも見極められないんだけど、それが何をするかって、乾いた土をガリガリ傷付けて、何処までも転げ回って行くんだね。そうしてそれは何を探してるかって、声だね、って先ずは言ってしまっても、声である筈ない土の中だよずっと。なら、兎も角もガリガリ煩い音を和らげて呉れる、そうだな、笛の音にでもして置こう、笛なら土に埋もれ掛けて土の下にも馴染んだり、また風に転がったりして。そんな笛の音だったらきっと、汚れた声の届かない先まで届いて、そこをコロコロ転がればすっかり何の音でもなくて、そこがもうこの世の外なら、その音は裸に剥かれたこの世の穢れそのもので、それがガリガリこの世の外までも傷付けて行くのなら、それで却ってこの世の穢れもガリガリと削り取られて。‥なんてクネクネした作り話しが虫が良過ぎるってんなら、幾らでも湧いて来るその虫共を食う為に、何処までもクネクネと土を掘り進ん

でれば、乾いた水色だって、水色ならば水なんだって、勢いで、そう決め付けて、きっと一繋がりの輝く一色なんて身に巻き付けて、身は一色に巻き付けられて、ああ、やっと色が何だか分かったような、どんな石だってその土の奥まで突き通せる。聞こえもしなかった笛の音なんかより、ずっと遠くまで行ける。で何処、そのずっと遠くって。土の上へは身は晒せないなら、どんな石も届かない土の奥底しかないかな。そこへ降りて行く丸裸って、なんて穢れた姿なんだろう、奥底の暗さに輝けば輝く程、唸るばかりに。でもそうして唸る輝きに身悶えすれば、穢れなんて何でもなくなって、なら何って振り返っても見返っても身は何処の何とも繋がりも係われもしないなら、丸裸の身って何だっけ？あの一色に傷付けられた土の傷跡にぬるりとゆっくり流れ落ちて行く冷たいばかりを誇る一雫と変わらないんじゃ、嘘の時へとまた流れ込むのと同じ、だからそうじゃないんだよ、見返ったり出来たのが間違いで、その儘そうして凝っとさえして居れば、空の果てより土の底より見えないに窮まってる遠くから、クルクルずっと回ってた何処かの小さな白い卵のそのまた小さな卵に向けて、なら卵じゃなくて孰れ卵へと産まれ出る、輝くのを已めてほんのり点るように薫るようにそこを動かない、でもやっぱり何色か見極められない辺りへ向けて、ほら聞こえるよ、はっきりと、唸りさえせずに何とも静かに、その細過ぎるばかりに途絶えない、（二〇一七年三月二十二日）

（どっちを向いていた…）

　どっちを向いていたでもないなら、もうそっちを向いていたんだね。それともそっちを向いてしまって、それでどっちを向いているかでもなくなってしまったかな。なら何故そっちなのか、そっちしかなかったか他のそっちもあったのか、なんて事考えてもどうにもならないんだろうけど、どうにもならないなら、どうにもならない儘どうにも出来ないで、またうっかりと、どうにもならないな、なんて考えさせられるしかなくて。ならそれは、どうとも知れるようにも知れて、それでどうって事もないって、放って置ける筈なんてない儘に放って置くしかない。何故かは知りようもなく、何処か知らない先まですっかり知れて、それで他に何も知れなくなって。つまり、そっちを向いてるそっちがそっちと知れてれば、他に知れる何もなく、それで何もがすっかり知れてると。風が吹いて行く。ならそれは、だって風ばかりと来ては、何にも止めようもなく行ってしまって。その後に、薄っすら暖かいかの、風の残した低い色が、土の上を土の温さと戯れるかにざわついていているなら、そっちへ向いてもう向きを変えようもない足は、風の冷たい痕でも滑るように、なので何処かぞっとする

ようにでも進んでしまう。間違っているしかないなら、それが正しいしかないかに強張って、ぞっと。で、重さは匂い、光りの向こうに…。に、？何…、そいれは有るのか無いのか、眠って居るかはしゃいでいるか、向かって来るか逃げて行くか、それともそれは、斜め何処やらに虹でも描くか色は消して、それとも虹だけは憎くて、空へ昇った水とその青まで消して空から灰ばかりを降らせるか。そんなのどうだって、匂いではある、そう確かめられたには違いない。の、違いないって何だっけ。そうだよ、違いないのって何だっけ、だよ。ここが話しの始まりだね。で、始まってしまえば聞こえて来る匂いの中の声には、確かに重さがあるんじゃないか。そう確かめられないと分かり切っているようなら、その重さを纏っているらしい匂いの確かな姿からは、もう逃れられない。見た事もないような、なので見えていないかも知れない姿にしろ、そっちが匂いと重さで来るなら、こっちは声には声だ！って粋がる割りには、身は痩せて見窄らしいようでも、その声はすんなり届いてしまうね、何でも搦め捕ってしまうかにぼんやり惚けたそっちの声に。で直ぐに絡まり合う声と声、もう解けない。どっちのせいでもない。始まったばかりでこんなでは、先が思い遣られる、の先って何ってのは、もう分かってる。このそっちのもうこっち辺りで遣り掛けの事を片付けるって事、息を吸ったり吐いたりするかに。もう声はこんがらがってるんだから、その儘に、終わりに向かって骨を折るだけさ、片付け

られるなら何でも片付ける為に、息は吸ったり吐かれたりされるんだしね他にない。で誰だよ、疲れてへたり込んでるのは。でも始まった話しも、その疲れた誰かさんの頭がうっかりぼんやりした向こうへ働かなければ、受け継がれようもないらしいね。その頭の中は声と声がこんがらがって、ぐるぐる回ってるし。なら、それへ巻き込まれて行くしかないよ、こっちの声で。で却って、光りのこんがらがってたのが、すっきり解けて、そっちはもうきっとこっちで、光りの向こうの重さは匂いは、手に触れられはしないけど、動き出してる。さて何が何を巻き込んで巻き込まれるやら。なんて考える間もなく、身はすらすらと動いて、片付けちまったらしい、こら辺りのは。でもう遣り掛けの事もないなら、重さは匂いはどうなったかな、って光りの中を浮き浮き泳ぐように、その行き着くしかない先へ行き着けば、全てはすっきりと晴れ渡って、重さは匂いの姿もくっきりと、もう手に触れられる。これの何処が間違ってるんだろう、いやその心の弛みが拙いんだ、でも手に触れたいなら、心は弛ませるしかなかろうね。頑なな心に出来るのは、きっと逃げる事だけかな、でも何処へ？もうそっちがこっちだって、さっきは確かめなかったっけ。ん？そっちとかこっちとか何の話しやら。でも、重さは匂いの儘だよね。だから手に触れられるんだ、でもただそう思えるだけで、触れようとしたら触れられはしないのかも。触れられないからそれで、触れられるって思えるなら、その触れられない儘でもう、

触れられてるんじゃないのかな。だって重さは匂いだよ。そんなの触れてどうなるの？触れられる事にしてしまえば、それでそれは、触れられるものの儘、何処へ失われるもない。それで何の障りもないならもう、それで。「それで、って？まるで片付いたみたいな口振りだね。それで、は始まりでしょ。」ああ、重さは匂いの声は、やっぱり重さは匂いだね、だと思ってたよ。「そんな惚けた呟きは、これっきりでね。さてと、」さてと？いやもう、重さは匂いに出来る事なんて有るのかな。何処へ失われるもないなら、その儘に、そう有るだけで。「だから、こっちになくても、あんたには山程有るって。で、さてと、」そうか、なら一つ、はっきりさせて置こうよ、重さは匂いの声には従うよすらすらと、その替わり、その声の重さは匂いは、必ずこっちへだけ向けて、こっちを何処へも失わせない。そう言う事で、そのこっちは、ずっとこっちで、ずっと重さは匂いと離れずに遣って行ける。どう？「知らない。」それで良いよ、知らないって事は、何を拒むか逆らうか知らないって事だからね。「そうかな？」その、そうかな？も、それで良いよ。そうかな？は、そうかな？の儘だからね、その儘なら。「そんな事より、風だよ。行ってしまった風が、吹き戻されて来るんだよ、拙いでしょ。」何が？「であんたはもう、その風に飛ばされ水に流されて跡形もないんだよ、声だけはあるらしいね、ふわふわと尖って。でもそれも、こっちがこうして声を掛けてるから有るんで、まあ、私の声の影みたいな

ものかな。な事より、吹き戻される風だよ、重さは匂いを消し飛ばしたいかの。…声も返って来ないなら、あんたももうその風の何処から、こっちを狙ってて。風なら向こうから大きく吹き渡って、たっぷり温い色をさざめかせて、その音が耳に染み通るならそれは山の音で、山の音なら水にも染み通って、耳の中の水の流れが、重さは匂いを守って呉れた筈。でも、そんな風とは違うんだ吹き戻ったりする奴は。もう逃げられないなら穴でも掘ろう。で掘る程に却って、穴を塞いで突き上がって来るのは何。知らない、顔も見たくない。逃げるんなら先ずはこいつから逃げないと、なら態と風に吹き飛ばされてみようか、消えたら消えたで逃げ切れた訳だし。でも易易と当たり前な顔で追って来る迫って来る、風なんてないかに。風なんてなかったんじゃないの、なら水は淀んで溜まって、風に全く震えないなら自ら渦を巻いて、その渦の目が見上げる空へは、何の障りもなく攀じ登っても行けて。つまり障りってのは、風だけだったんだよ。風さえ失せれば、高いも低いもない身さ、重さは匂いの。なら空なんて攀じ登るまでもないんだけど、そいつは登って行きたいらしい、土の中から掘り出されたんじゃ、見るものどれも珍しいかに。ならその登れる先に、重さは匂いの届く花でも咲かせて遣ろう、彩りも淡く暖かく。きっとそいつはそれを摘んでみせなきゃ居られない、でも誰に？そんな所に咲く花の使い途なんて誰も知らない、なら教えて遣れよ。摘んだ花を束ねては投げて落とせ

ば、真っ直ぐ花はそこへ積み上がって、それを囲んで皆で踊るなんて、どう。花を全て摘んでしまえば、もうこの世を飾れるものもなくなって、それならば、自らが花になった積もりで、萎れて行く花の周りではしゃいで見せなければ、この世は何処までも見窄らしくなるばかり、ってね。でもそれも萎れた花のじっとり腐ってこびり付き合ってられる間で、風もないのに腐った花は見失われるしかない。きっと、そんな腐った味の好きな獣にでもこっそり食われたんだ。それとも酷く腹を空かせていたかな。いや態態腐った花を食いに来るなんて、その獣も腐って干涸らびた屍で、それでも腹だけは空いてしまう、その腹が受け付けるのは腐った花だけ。そんな獣の棲む所が有るらしいなら居ても立ってもいられない、もうそこへ落ちるように降りて行く。淀んだ水の渦へ潜ってしまえば良いんだ、岸辺は日暮れて、腐った花をたらふく食った色取り取りの色んな獣が戻って来る。どれも素速く獲物を仕留めていた、生きていた盛りの頃の姿で、その中に当たり前に混じって居られるって事は、そいつもそんな獣の一匹なのは、そいつも当たり前にそう思えて、でも、なら俺は何を獲って、それで真っ盛りな雄叫びでも草原に轟かせて、満ち足りた時に酔えていたんだろう、それを少しも思い出せないのが悔しくて、他の獣達とは馴染めずに直に端っこへ押されて、どうやら俺は獣なんかじゃなかったんだ、としたら、獣と戦うしかないけど何処で？って思えば、襲い掛かって来る獣は何処からも湧いて

出て、でもそんなのは違うんだ、俺の戦う所はもっと先の何処かなんだって、そんな獣らはさっさと打ち倒して、そうしてもうそんな獣の追って来なくなった所で、行く先もなくなって、すると己の白い影のような放って置けば置くだけ何処までも脹れて行きそうな大きな奴が虚仮威しの角ばかり生やしてのろのろ襲い掛かって来るのを仕留めて、そのうっとり甘い肉を貪れば、やっとあの満ち足りた時に再び浸れるようでも、そんな事は何でもなくなって、そいつはその何でもない向こうに何を見付けるかって、重さは匂いしかないよ。ならそいつって、あんたじゃないのか違うの？……ってやっぱり声が返って来ないなら、風からは逃れようはないのかな。って思えば私が花なんだ、重さは匂いの。でも誰にも摘まれたりはしない。だって重さが匂いなんだものね。でもそれで却って他の何より風の怖さを知ってる。嫌でも知れる、震え戦くしかなく。花に殺された奴らは、だって花の他に何が奴らを殺せたろう、で皆風になったんだ、それが向こうで一塊の冷たい暗い渦になって向きを変えて、こっちに突き刺さって来て。」「そんなに怖がらなくても。」「え？行き成り話し掛けるなんて、私と口を利きたいんなら、」「ああ、分かってるさ。もうぐるっと遠回りしてるじゃないか、後ろに回り込んでるじゃないか。そこでほら何か跳ね回ってるじゃないか。水に入れずに。でも水に入りたい、なら水の子供かな海月かな。跳ねる尾っぽが水を切るなら、水の子に似た魚に似たら水の子にでもして置こう。で

水に入れないって何だ？風の中で息が出来る筈もないのに、それでも息をして死ねもせず、何処へ戻るも、何処から出て来たのでもない。ならその風の中で生まれたにしても何処へも産まれ出られずに、ずっとそこにそうして、自らの生きる身にも拒まれるかに。跳ね回れない海月なんてもっと酷い、風の熱さに焼け焦げてる。転げ回って見えるのはあれは海月を焼く火に違いない、でも身は海月の、水へ産まれ出るしかない姿の儘に、産まれようもなく。でもそっちからは見えないよ、だから話して聞かせられる。もし見えるなら、重さは匂いだろうが、疾っくにそんなの食い潰してる。でも孰れ見えるに違いないなら、もう俺に食い潰されると決まってるかな。いや分からないぞ、またうっかり重さは匂いを舐めて掛かってるかも。殺されても殺され足らない程、痛い目に遭ってるってのに。それも、重さは匂いが花かどうか、どうにも見極められないせいだ、それは分かってる。いやそれだってどうだか知れない、声が聞こえて来たら、またうっかり身一つは惑わされそうだし。そうだよ、身一つってのが何ともな。それで風の中に逃げて紛れて、でもそれで身一つは何処へ紛れ込めたやら。風なんてきっと、重さは匂いのあざとい作り話しで、なら俺はまた、何処かに間抜けな姿を晒して、誰かに話し掛けられるか、誰かの話しを聞きに行こうとでもしちまってるとか。だって風なんかの届かない所へ、ほらやっぱり嘘話しなんだ風なんて、身一つはその嘘を踏み付けるかに、なので危うい足

取りで登って行くよ。なら俺に分からない事なんてないんじゃないか。でもそれが益益俺を危うくさせる、だって分からないなら足も震えよう身も竦もうに、守る身を硬くして。そうして俺に全てを分かった儘にさせてしまうのが花なんだ。で花の他を何も分からなくさせてしまう。いや違う、花なんて要らない。花なんてなくっても全て分かってて、花を見上げて全てを分かったような振りをしてるだけさ。何の為かって、重さは匂いが花かどうか見極めたいからだろうな、見極められないと分かっていながら、であればある程に。でもこれだってきっと、重さは匂いのあざとい作り話しをなぞらされているだけかもな。ならてもう、うんざりだな。身一つの他は全て振り払って、それで却って身一つが全てから振り払われて、それでも振り払えないものが一つだけ有るなら、それが重さは匂いに違いない、それが何の作り話しだろうが構うものか。重さが匂いが一つだけって見極められれば、もう花なんて跡形もなく散ってるよ、誰かの笑い声だけ残して。でもその笑いが幾らけたたましく辺りを覆い尽くしても、重さは匂いには届かない。重さはもうきっと匂いじゃないし、匂いにも重さは纏えない。それなら重さも匂いもこっちの知った事じゃない。で何が残るかって、身一つももう、水の子さえ入れない水の流れに沈んでるなら、声だね。笑い声を上げる誰かの耳に届きそうな。あの笑い声って、ひょっとして、こっちの声を促そうって、誘ってるのかも。こっちの声を聞いて、またそれを笑いの

めしたいかに。構わないとも、で俺には声が有る。風だって呼べる、なら誰の耳も要らない。風がもう俺の声で、風に出来ない事なんてない。誰の笑い声だって、そこに溢れる喜び楽しさ卑しさ憎しみまでだって、悉く剥ぎ取って遣る。山の音を届けに吹き渡って来るあの大きな風の恵みだって、ズタズタに引き裂いて遣る。ああ面白い。であいつらは何が欲しいんだ、神様にでも愛されたいのかよ、なら洗い浚いそこへ差し出せよ、俺が丸ごと吹き飛ばして遣る。そうして風ばかりなら何も俺を止められないで、風の俺はもうギシギシと歯を生やして重苦しい胃袋を引き摺ってて、花という花を食い潰して遣る。花なんて要らないんじゃなかったのかって？俺の居ない所に花なんて影も無い。俺に食い潰されてだけ、その食い潰されたものが花なんだ。そうして食い潰された花は俺の胃袋の中で惨めにドロドロと喚くかに溶けるばかり。なので花は何処にも咲かない。その何処にも咲かない花を風を追って狙っているなら、そいつは鳥か、いや鳥でなくったって構わない、風よりすばしっこく風を出し抜いて花を毟れるなら。そうだよ、そうして何処にも咲かない花を毟れる奴だけが、俺の身一つを沈ませた速い流れの川を渡って行けて、ならそこはもう風も届かない、だって風なんて食い潰したいだけだから、水の流れの向こうには食えるものなんて何もなくて。そこは、生きていた盛りの頃の姿の獣達の、重さは匂いの花を飽きもせず毟り取る、激しく振り立てられる牙の匂いばかりが溢れ返って、

それで花も、咲いても咲いても咲き溢れ。で済まないなら、その陰に、誤ってか水を渡り切って果てた鳥の運んだ蛆虫の身一つの、ぴりっと臭い息が眠たげに、（二〇一七年四月七日）

（直ぐに濡れたり…）

直ぐに濡れたり乾いたりする獣臭い粗い土を隠す落ち葉の彩りは鮮やかでも、そうしたいのか、やはり濡れる儘にぬるりと獣臭い色で、その沈み泥むような目障りな色が遠ざけるものなら色色有りそうで、そのそっちの真ん中に向こう向きに反り返って伸びてる木なんて、常に大風を呪うかに瘤だらけで、捩れて歪む程にどちらへともなく高くて、太くて酷く己を重そうで、根なんて猛り立つ岩山のように深いに違いなくて、でもそれって木なのか、それが木なら他の木なんて木じゃないのかな、それでその木までも木でなくなるようで、暗い水をこれ見よがしにたっぷり溜めたかの鈍色の空の重さに潰されては。で、ただ奥深げな大風が、常と変わらず姿を隠していそうなだけで。でも、にしても、こっちにだって木は若葉をサラサラと風に戦がせてるよ。それとも若葉なんて匂いだけかな、根なんて何処にも生えてない、ツルツルで、なよなよと静かで

柔らかくて形がありそうでなさそうで、目を離した隙に消えてしまわないかヒヤヒヤさせられる、けど、大風に晒されない何かの陰でも見付けて根を張らなくてもそこに凝っとして居られそう、肩肘張らず、ふわりと楽しげに、その楽しさしか知らぬげに。芽を吹いた時から知ってるけど、その姿を見失った事なんてないんだ何故か。遠出しても戻れば必ず、大風の日が続いてたなんて嘘みたいに、ここから眺められる思う姿の儘にそこに居る、そっと。そんなで木なら、そっちもやっぱり木だな、どう見ても。で、そっちとこっちは、そんなには離れてもいない筈。だってその二つだけで、ずっとそっちとこっちなんだから。ひょっとして互いを知ってもいそうだけど、でもどっちも木じゃ、全く離れ離れで、なら何がそれを繋げるのかな、なんてうっかり手を休めて考えてしまうのに付け込まれるのか、もうそいつに声を掛けられたからには、そいつがそのそいつである他にない。いや、うっかりそいつなんて呼んじまったけど、そいつは少しもそいつなんて呼べる代物じゃない、きっと。ならそいつの事なんて忘れてと。で何を思い出さなくちゃいけないんだっけ。も、思い出さなくちゃいけない事なんて有る筈ない。済んだ事ってのは何でも、忘れられて今に繋がるんだ。忘れられないならそれはまだ済んでなくて、今しなくちゃいけない事の妨げに違いない訳で。いや、そんな嘘には引っ掛からないぞ、有った事で忘れられる事なんて有る筈ない。なら思い出す事なんて何もない。にしても

思い出されてしまうのは石の事で、石が俺に言ったのか、俺が俺に言ったのか、殺すと言ったからには、石を殺さなくちゃならない、急いで。だってぐずぐずしてたら、石が俺を殺す話しに擦り替えられそうで、だって俺と石だけじゃ、擦り替えなんてほんの知らぬ間、なら誰が言ったにしろ話しを進めないと。って、何時の話しを蒸し返してるんだろ、石なんて疾っくに殺したじゃないか。石を殺さなくて、木なんて何処にも生える筈がない。いやそっちの木は知らない、根っこが岩と来てはね。でもこっちの木は、石を殺して砕いて、それが常に石より重い空から降って溜まった腐った雨水を吸って自らバラバラに砕けて、その上に種が転げて芽を吹いたんだ。まるで違うかな？違うも違わないもまるで違わないなら、どうでも構わんが。でそれで済むかって済まないのは、石が何処から来たかって事だよ。それを俺は知ってるんだな、それで厄介なんで、だって石はただ硬くて他の何とも比べられなくて石なだけで、なら俺だって他の何と比べられるんだ、俺が硬いかどうかなんてどうして分かるんだ、って事になれば、ただ石である己を眺め眇めつしてるだけが俺かも知れないし。いや、そう先走るのもどうかかな。俺がそこらに目に付く何かで有りそうだなんてのは、突き詰めれば必ず俺は、その突き詰めたものに成っちまうに決まってるし。なら、放っとこう。で石を殺した話しだけど、俺と石しか居なかったのは確かだ、いや違う。それを確かめる奴が、俺の側に影のように居て、俺は俺が何をする

か――そいつに話し掛けなければ遣って行けない。影みたいなものならどうって事もない、で済むかどうかはまだ分からない。殺された石がどう出るかだな、いや殺された石なんてない、有るのは殺される石だけだ。石は殺しても殺しても、ずんぐり丸い木の芽が脹れ過ぎて土の粗さに断たれて転がるように足元に溢れて来て、殺される姿の儘に殺されてるって事。いやそんな筈ない。俺の知ってる石は、俺と石しかない所の、ただ一つ切りの他にない。ならあの、じめじめした音を立てて転がって行く石共は何だ、と目で追えば、やっぱりあの奥深げな大風の仕業で、うっかり騙され掛けてるよ。石なんて何時だって殺せるんだ、だって石が俺に話し掛けて来るって、石の殺し方を俺に教えようって他にないし、俺はそれをすっかり分かってるし。なら石を生かしてだって置ける、だって孰れ殺される石なら、生かされる石なんてその死ぬ姿を際立たせるだけのもので。なので俺は独りなんだ、なので、どんな狭い石の割れ目もするすると擦り抜けられるぞ。そうしてその割れ目の先を凝っと睨み付けられる、石よりずっと硬い目が俺を導いて、俺の身はダラダラそれに引っ張られて行くのが取り柄で。数知れない蛍の骸の匂いのまだ生生しい叢を抜ければ、やっぱり、そいつなんて呼んじまうしかないそいつなんて呼べそうにないそいつで、でも濡れて中中乾かない草の根の絡み合う土のもりもり盛り上がるのと取っ組み合って、疲れて黙り込んでるなら、こっちから声を掛けようか、うっかりと。の、

うっかりにうっとりと、蛍の盛りの時の草草の賑わしさも取り戻せるかに。蛍の時なら蛍の時だけじゃなかった、他にも甘い水に誘われて、色色と血を匂わせて彷徨き回るのを楽しんでたろう。そう思い描けば賑わしさだけなら取り戻せて、その浮き浮きした目で探せば、旨そうな肉をぷりぷりさせた奴らなんて、向こうから遣って来るよな。そんなもの等に係わって時を潰すのも悪くはないが、でもまるで物足らないのは俺はもう、腹も脹れたし、そんな血の匂いに駆り立てられるより石の割れ目の先を先へ先へと見詰めて見通して行きたいから。も何も、先に先に石の割れ目から俺を誘って、そいつなんて呼べそうにないそいつなんて、遥か後ろに引き離して、でそうなると、残るのは何。と見回そうにも、俺は血の匂いの中をのたくっていないかな。それも蛍や何やらの時が過ぎれば消えてしまう儚い匂いとかじゃなくて。ずっと俺の鼻の奥に棲み付いていたかに、俺を誘って已まなかったと嫌でも知らされる、そんな匂い。それは血のようでも血でもないか、それともただ誘う為の血ではあるのか、にしても、その血らしき匂いを、この身一つで貫かずには居られなくさせる。で、のたくっていた筈の身は、蛍の時の後に、消えた賑わしさを確かめる為かに必ず一筋来ずには済まないらしい、石なんかよりずっと硬い細い風の去る向きに、矢印のように強張って、で何だろう、そっから先は知らない、俺の事じゃない。で却ってそれが間違いなく血の匂いだとは分かった、でも触れられそうで触れら

れない、それとも幾らでも触れられても、触れる程に触れてもどうにもならなくなる。ならそれは、根の生えてないツルツルのこっちの木の、その覗こうにも見えない内から薫るしかなかろう。なら木はもう、なよなよと静かで柔らかくて形がありそうでなさそう、ってだけにも行かないかな。それは影まで振り切るかに強張るこの身が、その匂いを嗅ぎ回るのを已めないからで。そう、嗅ぎ回ってるのは確か、でも何の匂いも忘れられてしまってないか。俺は何処から来たか、あの一つ切りの石と並んで産まれた所へは、その匂いを辿るしかないなら、もう何処へも戻れずに、後ろは脹れる石に平たく塞がれ。そうしてそんな壁のような石に触れてだけ、強張りは解れて平たい上を這い回れるにしても、ただ冷たいだけで、その冷たさがまた、木の中の嗅げない血の匂いへと身を強張らせて。そっから先はその木の事なんで、形がありそうでなさそうでもないそれに任せるしかない。で、この石って何だっけ、って見れば少しも平たくなんてない、ぐりぐりと丸く、そんな上で強張ってられる筈もない。でもそれは、盛り上がるより衰えて蹲るような丸み。俺が殺す石なんかとはまるで違う。軽軽と乗り越えられそうな形も、その形が却って俺から力を奪って、身はぬるぬると狭い泥の窪みへでも滑り込んで捩れてのたくるしかないかで。なら石に見せ掛けて石じゃないんだ、そんなの直ぐに見破れるぞ、石で知らない事のない俺だ。ほら、小さいけど割れ目だって、こんなの見付けられるのは俺だ

けだな。でもぬるぬるとのたくるばかりはどうにもならない。でそのやっぱり狭い窪みなのか、それがゆらゆら揺れるようにぐにゃぐにゃと形を変えて、俺の身をどうにも引き込んでは揺らめかせ、すっかり泥にでも仕立てたいらしい。で、泥って何だっけ。行き成りそんなの知れる筈ないなら、泥と先にすっかり泥んでる俺の影にでも聞くか。と言ってもそいつは影なんかじゃなくて、影の振りして後を付いて来るだけの奴だが、俺の話しは何でも聞く。…何で黙ってるんだ、いや、そいつはもう影もない、じゃなくて、影じゃなくて、そいつはそいつなんだ。俺に黙って、替わりに誰に話し掛けてるんだろう。と見れば、石はもう二つになってる、割れ目に見えたのは二つに分かれる分かれ目だったって事。なら三つにも四つにもなって、もう数えるのも儘ならない、って、だからこんなの石な訳ないんだよ。どいつもぱくぱく口を開けて、こんもり怒るように太った尻の、活きのいい蛍を食ってやがる。それ何時の蛍だ、いや俺に蛍の時が分かる筈もなかった。俺が欲しいのは、ただ俺の欲しい匂いだけだ。それが何の匂いかなんて知るか。その欲しい匂いに塗れて居られるなら、光りも水も時も要らない。だってそんな俺はもう、なよなよと静かで柔らかくて形がありそうでなさそうな木に音も立てず絡み付いて、そこからもっとなよなよと静かで柔らかくて形なんてまだありそうにない、その俺の欲しい匂いの塊を、木のほんの狭い、まだ出来たばかりの薄っぺらな柔らかい洞の中へ、面白いよ

うに重ねて隠して置ける。で、うっっかりそう呼んじまったけど、匂いの塊って何だっけ？まだ形もありそうにないなら。…そうだよ、それってもう一つしかないよな、だろ。だから、俺は俺が欲しい匂いに塗れて、俺の身を三つにも四つにも幾つにも切り分けて、それにその匂いを染み通らせて、ならそいつらは、俺そっくりの生温かい小さな息みたいなもんで、いやそんな息を吐く、その吐く勢いにブルブル震えるしかない息より小さな波打つその匂いを放つ血の塊で、そいつらは石と並んで産まれたがってるじゃないか、違いない。それを凝っと見詰められて俺はやっと、ちゃんとあの一つ切りの石をこの手で殺せたんだって手応えも掴めて、それでまた思う様、形がありそうでなさそうな木に心をささくれさせて、緊く棘棘と黙って呻く声に弾みを付けて絡み付いて、もう他に何も要らずに。でもそうなると、そいつなんて呼べそうにないそいつの好きにされちまうのを、どうにも出来ないって事らしい。で、そいつって影の振りして付いて来た奴じゃないのか。いや、どうだか？何かこんがらがってるな。それが全く俺のせいだって事は分かる、なので却ってどうにも出来なくて、そいつはそいつのそいつは、蛍の食い尽くされた真っ暗な河原を、鼻を利かせて彷徨いて、俺の隠した俺の欲しい匂いを染み通らせた血の塊を木の洞の中に嗅ぎ付けて、隙を狙ってそれを引っ張り出そうって構え。もう俺の絡む木は、冷える儘に苦しげに捩れて怯えてるじゃないか。獣臭い色まで映した皮は、

ぴりぴり乾いて、音もなくふと剥がれそうじゃないか。そうか、俺が石を殺した腹癒せに、そいつはそいつのそいつは、俺の血の塊を孕んだ木を殺しに来たんだな。でも暗い河原を埋め尽くしてるのは、俺の殺す石とはまるで違うにしろ、やっぱり石なんだよな。ここは、そうにして置こう。なら例え血の塊がむざむざ引っぱり出されたって、その数え切れない石がそれを黙って優しく吸い取ってくれるかな。それともその石から滲む乳の色をしてるなら乳を、血の塊に吸わせてくれるかな。辺りはすっかりそんなんなら、そいつはそいつのそいつなんて何も出来ず、もう影もなく消えちまったさ。河原は俺の欲しい匂いに満ちて、でもやっぱりまだ肌身にすっかり馴染んだ木にも絡んで居たくて。でも、その匂いを孕んでいた血の塊ごとごっそり引っぱり出され、その上俺に執濃く絡まれ続けて、もう獣臭い色さえ透けて色もない木の、もう水も受け付けず痩せ細ってしまう儘を、どうしよう。と見上げれば、蛍は食い尽くされたどころか、そっちの捩れて歪む程に高くて太くて酷く己を重そうに反り返ってる木の枝にも幹にも、まだまだ殖え続ける勢いに、びっしり張り付いて、風に削られて尖った岩みたいな木の姿を、闇の中に輝かせてるじゃないか。それとも、はぐれて巻く小さな風に紛れて俺の目に飛び込んだ、乾いて毛羽立つ埃が幾つかぐるぐる暴れて、汚れた遠い光りまで目の中に取り集めて来るだけか。にしても俺の身はその光りに釣られてか、何故かすんなりこっちの木を離れて、流

されるように河を渡って、もうそっちの木に絡み付くしかないなと、その根元の窪みの泥の中をのたくっていて、いや少しも根元に届いてない、俺は何処か長長とした身を揺らめかせて、暗い浅瀬を漂ってるんでないなら、ここは何処だ。くらくらと上げた頭の後ろを直ぐ様圧すのは、風だろう。血の塊よりもっとぬるぬるした風だって思いたい。でも、そのぬるぬるを見付けられずに頭ばかりを捻り回していると、疲れて強張ればその身が震えるかに自ずと前へ進んで、それでどうやら木の根元まで辿り着けたらしいにしても、何だろうこの嫌な匂い。何だなんて考えてられる身じゃない、嫌で堪らないなら、その嫌な身を脱ぎ捨てて、それでその匂いも振り捨てて、ごつごつざらざらした、乾いた風に晒されてる岩より乾いた木の幹を上って行くしかないさ。でそれが俺の匂いだったって分かれば、力が湧いて、身にもぐりぐりと肉が付くようで、ごつごつごつざらざらしてたのだって、水みたいにツルツルと。で蛍は何処行ったんだよ、やっぱりあれは目の中の埃が集めた光り、と決め付け掛けて決め兼ねて、僅かな光りの残りが古い石みたいに丸い涙になって、思いの外それは溢れ返って、きらきらぼろぼろ零れて行くのを止めようもないなら、もう何処を見下ろす事も出来ないなと、真上に向けて硬く目を剥けば、そそり立つ奴はとても木の姿なんかじゃない、ただ闇が凝り固まって震えるような、いやそんな何もそそり立ってなんてない、ただ俺が上って行けそうに見えてだけ途切れないらしい、

風を切り分ける透けた道がくねくね上って行くだけ。お、風を切り分けられる
なんて凄いじゃないか。ここは笑いが込み上げて来るところだぞ、でも却って
目先は滅入った色に塞がれて、その色に俺は何かを思い出させられなければな
らないに違いない。縊り殺され、骨を裂かれ続けるかに。なら、その色をした
奴が俺を殺しに来るって事か、いや俺から態態殺されに来たって事だな。剥か
れた儘の目は、そいつを睨み付けてるじゃないか、でも何も見えないなら、色
なんて罠だ、って思えば、俺の身は進んでその罠に絡むかに捩れて、それでや
っと斜めにも目はぐるりと向けられて、何を見下ろすでもない向こうに。何だ
ろう向こうには？俺の匂いその儘の血の塊らに乳を吸わせてくれる、数え切れ
ない石が転げ回ると思いたい。が徒で、低い辺りは喧しい声がこちらに背を向
けるかに、ざわざわするだけの暗がりで、それを見下ろしもしない遙かに切り
分けられたかの、ずっと高い向こうには、ただ、遠い岬を重そうに回り込んで来
た、影をどろりと真横へ延ばすような大きな風が。何処へ向かうんだろう、ど
うやら見えない向こうへ。で、そんな向こうへ向ける筈もない俺の身は、強張
れもくねくねとのたくれも出来ないで、ならその岬の風の届く筈もない音に縛
られて、また真っ直ぐ上にしか剥かれない目は、そいつを睨み直すしかない。
の、そいつの姿が見当たらない、それともそうして目を凝らせただけ目に掴み
取れる闇の形へ、岬を照らすのと同じ薄い光りがちかちかと挟まれては、闇を

縁取るような途切れ途切れのぎざぎざが積み重なるのが、その姿。あはは…、いやここは笑うところじゃないだろ、耳を澄ませるんだ、まだ木から落ちてないなら、岬の風を恐れて逃れて来た鳥達の囀りにでも。でもそんなの少しも聞き取れない、そうか、岬の風もこの木も、鳥達には同じに恐ろしいんだな。でも何故、と風に冷えて行く木肌の冷たさに肌を擦り付けるようにすると、何かに巻き付かずにはいられない、その何かが、取り返しようもないかに酷く空っぽに迫って。すると冷たさなんてまやかしとあっさり分かって、禿げ上がるようにに木肌は熱を反り返らせ様、俺の身を放ったに違いないが何処へ、の先には高い陽の光り、嘘のような、嘘かも知れない。嘘だろ？と試みに問い掛けた相手は、行き成り俺の首をへし折りたいに違いない。俺の身の抗い振りで、そうと分かる。それで身は、巻き付けるものに巻き付けられた、のかな。そう出来たにしろ、そいつは木肌なんかよりもっと熱くて、どくどくと内に血を滾らせ激しく自らを震わせたいようで、孰れ高い陽にも届きたいかに、それとも高い陽なんて疾っくに味わい尽くしたかに。そんなものに巻き付いて先の危うい決まってるなら、更に緊くそれへ巻き付くしかなかろうに、寧ろ身は、ただ聞こえもしない風の音と揉み合っているかで、高い陽を受けて熱くなる筈が却って冷え冷えとそいつが、凍るかの血の滾る音を硬く尖らせて、俺の身を裂き、骨を断つよう仕向けて来ては、俺の目はもう、どっちへ剥かれるもないな。と

はつまり、どっちが上も下もないって事で、なら何に巻き付くにしろ、ただ輪のように何とも繫がらずに回っているようで、その輪の内へなら目は剥くだろうかと、そうしようにも、その目は何処。いや目なんて要らない、初めから無かったかも知れない。目なんて無くっても、見えないものは何もない。陽の光りの、空さえ知らぬ間に僅かに翳るのさえも。と陽の光りを届かせる空が迫ると、それは、すっかり空の姿をした何処までも石で。でもそんな石は知らない、それとも、それをまるで知れないので、それは石。などと考えていられる身でもなく、ただ石の他に何の現れる兆しもないなら、それへ剥かれる、ただ目ばかりを食い込ませて行くしかない、要らない筈のない目で。しかし直ぐに分かる。それが目かどうかなんて、どうだって構わない、だって、それが先ず石なんで。でも何をしたい石なんだろう。空そっくりの姿で、空を睨み上げる素振りはしたそうでも、その大きく拡がり過ぎた裏側では、それは、怒りに任せるかに凄い勢いで、ぼろぼろと崩れ落ちて行く己の様に酔っていないか。空そっくりはもう、空を睨みたい薄っぺらな上っ面だけで、風の音の運ぶ岬の暗さに孕まれた微かな湿った匂いでも届けば、空の姿も、もう僅かな石の厚みも、粉粉に打ち砕かれそうで。ならもう、そんなものは疾っくに砕かれ何処かへ吹き飛んでいて、替わりに、剥かれた目のように丸い、何を見たそうでもなく、ただ真上を睨む形に飽き飽きしてもいそうな、他に何も見当たらず、なら他の何

をも埋めてしまって、きっとうんざりする程大きな石が、ただ一つ。いや、一つと見れば、そう見えた所に奥深そうな割れ目が出来て、そこへまっしぐらに突き刺さって行くのは何。も何もそれは、その一つ切りのそれにしろ、その形が割れ目の狭い奥に、差し込む光りのように落とす影は、卵の形、くるくる回る、何とも繋がらずに。でも何かと繋がりたいに決まってる、だってもうそれは、何かなんて待ち切れず、自ずと二つに割れて、その二つで繋がり合おうとしてるよな。で、それに釣られてか、その動き回る影の形を目に刻み付けたいのは、ひょろりと長くふらふら頼りなげに揺れる、低い奥底から湧いて出て来たに違いない、それも影。いや、そのどれにもどうやら俺の匂いが隙なく染み込んでるなら、向こうへ残して来た木の洞の中の血の塊の成れの果てか。知りようもない。しかしどうやら影ではなさそうなのは、どれもその影の色の中に、青く光る点にしか見えないにしても間違いなく二つの小さな目玉を翳して素速く動き回らせているからで、でもその目はどれも、もう卵の形を追うのは諦めて、替わりに互いの目の中を覗き込み、その覗き込む己の姿に目を凝らすばかり。その姿には見覚えがある、真っ直ぐ上に目を剥いて木を上って行く俺の姿に違いない。それをこの目で俺が見上げる筈もないが、その姿を先に知っていて、そのあからさまに見上げられるのをずっと望んでいたか。そうして、そのひょろりと立つ奴らは、どれもが互いの目の中では俺の姿で、どいつも取り憑

かれたように、隣の目を覗き込むのを已めない。しかし何か違う。覗き込む目の中のその目を覗き込む姿は、間違いなく己の姿で有る筈が、その姿の何処かしらに己とは違うものを見付けて、それを酷く思い悩むような。しかし俺の姿とこいつらの姿が同じでないなら、それはそうでしかないだろう、と思うのは俺だけか、の俺って誰。へっ、もう忘れたのか、俺の目はさっき空そっくりの石になって粉粉に砕けて、何処にもないんだよ。何を見てんるんだ、それでも俺の姿を見付けたいなら、こいつらの姿が俺の姿で有るしかないだろ。そのこいつらの覗き込む目の中の己の姿が、己と何処か違うなら、それは、俺が覗き込む俺の姿が、俺の姿と何処か違ってるって事で。そんなの、ただで済む筈なかろうに。と思い至れば、ひょろりと長く立って、割れ目の底に数知れず犇めいて揺らめいてるのは、どれもそっくり俺の姿で、そのどれもが、俺の姿を映そうと隣の奴の目を覗き込むまでは良いが、そうして目の中に映った俺が、俺と違う姿な訳で。などと、ただ一つの目の中に映る己の姿に、乗り移るかに凝っと目を凝らしていると、まさか乗り移れたのか、辺りはすっかりのっぺりと静かで、少し離れた所で、卵の影を粧う卵の形の石が嬉しそうに跳ねては、ひょろりと立つ間違いなく俺の匂いの血の塊を、水玉でも呑むようにパクパク食っていて、もうその残りは二つ切り。それが俺か、まだ俺ならば、って言ってみるなら言えるさ。で、その二つは互いの目の中の己の姿に目を凝らして、そ

の何処か違うのを分かりながら、その何処とを見抜けずに、なら二つを一つにしてしまえないか、その遣り方を思い巡らしても見付からず、互いを憎み続けて、そのどっちもどっちなら何を憎んでいるのやら。なら遣り方を変えるんだ、と心付くと、それだけで嘘のように一つになった強張る身が、卵の石とだけ向き合って、その身に目が二つ付いているようなら、そっちも二つでなくちゃな、と思えば、石は右左に分かれて、でもそれは何の形?卵とは似ても似つかない、翼でも生やしたそうに。知るか。そんな事より、映ってるだろう、その二つの間の何もないかと見えた辺りに、それを覗き込む、そっくりなもう一つの身が。で、それもやっぱり、そっくりなのに何処か違う。にしても、二つを隔てる何もない、なら、身と身を擦り付けて、何処が違うか、思う様、互いを弄れも出来て。で、見付かったよ、しっかりどちらの手にも弄れてるよ、違い。まるで違うぞ。何故こんな酷い違いを見損えてたのかな。となればそれで、こうして二つで馴れ合うように張り付いてるのも、どうにも辛くなる、全くこっちが翼を生やしたいよな。の、こっちって、どっち。翼が生えるなら、きっとどっちにも生えそうだ、なら同じ事。と思えて耐え難くなる程、緊く抱き合って離れられない、離れでもした互いを互いに、恐れれば恐れる程に。なら、もう、一つに溶けてないか、なんて慰めは通らない。だって右と左の石は、こっちに背を向けて、呑み込んだ俺の血の塊を、その向こうへ吐き続けて止まりそうにな

い。それはこうして二つの身が、離れもせず抱き合っても溶け合いもせずに居られるからで、でなくなれば、石は何をするか。きっと石はどっちもこっちを向くぞ、で辺りは吐かれる儘の血の塊で盛り上がって、でもそれってもう間違いなく血の塊の屍で、それでも吐かれ続けるなら硬くびっしり固まって、固まる程にそれは石の殻に覆われたいだろうな。分かれた石も、右と左からそれを挟み撃ちにするようにすっきり呑み込みたいだろう。そうして継ぎ合わされ継ぎ目もすっかり消え、緊く合わさる石はもう、割れようもない。いや、そんな事させるもんか、と思えば、もうそうなっていて、すると離れた二つの身は、何処か違う筈が全く同じで、そのそっくりな姿から、互いに逃れようと。でも逃れられる筈ない、だってやっと分かった、初めから二つだったんだ。一つに継ぎ合わさった、と見えるだけで、初めから一つだった石の中に閉じ込められて、はっきりそう思うにしろ、これで何が出来るのかな、って身が、血の塊の屍でしかないに決まつてるなら。ふん、まさか、それこそ出来の悪過ぎる慰めだ、血の塊の屍なんて、それが幾ら山になろうと海になろうと、あっという間に吹っ飛んださ。お前は死にも出来ず、ぷりぷりと蛍の尻みたいに素っ裸に生っ白く、二つながらに空っぽな石の殻の中にぽつんと浮かんで輝いて、で、遺る事なんて一つしかない、ずっと二つと来てはな。二つなのに一つなんて、有つてはならない事に決まってるんで。初めから一つだった石だって慰めにはな

らない、だって石なんて、初めがどうだろうと、何処へ行こうと行く先先で、待ってましたって数知れず転がってるさ。そんなのに一一躓いてたら、何遍躓かなきゃいけないんだ。然もどの石も空っぽで、中で転げるお前の二つの身がぶつかり合って、カラカラかコロコロか、間の抜けた音を立てて切りがない。ならなんて知った事じゃない、石の殻に閉じ込められてる話しだって知った事か。で、踏むなら何？って足元を見詰めるのは二つの内の一つだけで、そこに活きのいいピチピチ跳ね回る血の塊が、尖ったり丸まったりを繰り返して、うじゃうじゃと数知れず湧いて来るのを見付けてしまえば、そっくり同じもう一つは、それを見ていない儘なのを弾みにでも、真っ逆様に飛び込んで行く、って何処へ。何処へも行ける筈ない。ただ身を逆様にして、そっくりなもう一つと、ぴたり向き合うだけ。で、そうなればそうなるって決まってたみたいに互いと繋がって、潰れるようでも輪の形なら一つ転げて、身の向きを取り替えれば、もう輪の形もなく、捩れて絡み合って巻き付き合うようで、その儘に飛び込むように落ちて行く先は、太く張った木の根の。匂いはする。腐った岩の汁のような。その汁を吸って萎れた草のような。でもそれだけ。そこはツルツルじゃないか。でもその底なしのようなツルツルに触れれば、二つで一つの身は、そこが深く広く降りて行く根の中だと分かって、力任せに巻き付き合うのは已めて、繋がりながら二つで一つで根を拡げる形をしようと互いを弄るにし

ても、ツルツルに撥ね返されるように輪の形になるしかないなら、そこが底なしの底と思い定め。なら、二つが一つに繋がる輪にしか出来ない、切り無しの舞いでも一差し。と先に舞うのは、その輪の影で、何故ならそこでも血の塊は疲れ知らずに湧き出して、影を柔らかい肉のようにでも波打たせるので。で、それを真似るなら容易そうが、却って身は踊りを忘れたかに輪を捻曲げるばかりで、こんがらがって歪に丸まって、そこは底じゃなかった、また底なしの低い奥へと生白く転げるのは、包んでくれる殻を探したくてか。でも、卵の殻も石の殻も、遺っては来ないね、決まってる。二つの身ではな、ならいいさ、ここがまだ木の根の中なら、それで。と見下ろしたか見上げたか、狭そうにも重そうな風の回るなら根の外か。そうして立ち上がると、二つは身の何処かで一つに繋がって、でも枝分かれの形に二つでもあって、その儘必ず同じ向こうを眺めようと努めるなら、身は独りでに拗って踊り始め。そう始めはしても、始めばかりを繰り返すようで、それで却って力強さは増し、何にでも突っ掛かって、ぶん殴りたい心持ち。でも殴るなら、互いにもう一つの身ばかりなのは明らかで、とは言え、試みに殴り掛かっても、殴る振りに舞う、それを擬くに収まるばかり、閉じない輪を身をずらしては描き続けるばかりかに。これって何の殻より身を守ってるようなもんだな、って思えば、身は二股の形の、どんな水も侵せない硬くて腐らない石で出来てるに違いなくて、その股から産まれる

卵の幻を、蛍の群れを飛ばして追わせたいにしろ、そんな蛍を集められるのは何だろう、蛍が何を好きか、知ってるのは木か水か。いや木も水も、蛍の腹を満たすに無くてはならないなら、きっと蛍は、どっちも憎んでる。なら、空しかなかろう、蛍を呼べるのは。木の根の奥深くで、空なんて見上げられる筈もないなら、見下ろす暗がりが何処までも空に決まってて、根はその空に、空そっくりに張り渡って、その拡がりを横切る蛍の群れを、まだ産まれない卵共は、匂いを潜めて、何処から眺めているだろう、そんな卵がびっしりの巣を嗅ぎ付けては、漁り回っていたのは何時の頃だったろう、と思い出せそうで、硬い筈の二股の身は、クネクネと柔らかく風さえ呼びそうで、で風を掠めるかに呼ばれるのは、ただ向き合って輪にもならず触れ合いもせず、触れるより濃く互いを濡らすようにただ見詰め合う、そっくりな、やっぱり生白い裸の二つの姿で、それにもう色もない二股の身は、もう要らないだろうとばかりに、それに泥のようにぐしゃぐしゃと踏み潰され、股から血の匂いだけは噴き上げて、向きの揃わず羽搏くばかりで飛べない歪んだ翼のように、底なしの空を何処までも、風を孕めずに落ちて行く。風なんて孕みたくないよな、とその消える限り限りまでを追う、風を切る刃のような四つ角角しく並ぶ尖った目も、ただ霞んで滲んだかにそっくりで、どれがどっちのどれかもあやふやに、ふと入れ替わったりしてしまってないかな。その二つ身の、どちらかがどちらかを何処かで殺し

てれば疾っくに済んでたろうに、と今更に心付いても、もう狙い定める身一つが、切られて滑り回る風のひとひらのように、裏か表かと二つの姿に、ふん、であろうとなかろうと殺れる筈もなかろうに、とそう、そのどうしてかなら直ぐに分かってしまうのが、（二〇一七年五月三日）

（白って何故…）

「白って何故白いか知ってます？　全てを隠して何一つ表に出さないからなんですよ。一つも表に出さないって事だけは、表に出したいのか知れなくても。赤や青なら、その赤か青の通りの事をすっかり表に出してますもんね。黒なんて、何故黒なのかを遡れば、闇の奥と見えた所にさえ、隠されたものなんて何もなくて、誰にも知れる限りの事が出し尽くされてますよ。獣の話しじゃありませんよ。獣は色を纏ってるだけで、少しでも楽に生きられる色を選んでるんで、それが白なら、その為の白です。じゃ、何の話しかって？　例えば石ならどうでしょう、白い石も黒い石も生き易さとは係わりないし。それとも石にだって、白には白、黒には黒でなければならない事が有ったでしょうか。石は石なりに、白であったり黒であったりするのが生き難くて、黒くなったり白くな

ったりしてるとか。でも、獣と石は違いますよ、きっと。獣は、食べる為に動き回って、その時時の、その行った先の色を身に映したり、それが嫌なら身を隠したりしますもんね。夕陽を浴びて紅に、白も黒も並んで染まる石とは、やはり違います。でも、石の話しをしたいんでもなくて、なら、何でしょう、石に似た、例えば骨とか。白くて硬くて、ごろんと転がってて、余所見してて、うっかり躓いたりしてしまう。骨の白さって何でしょう、生きて働いてる内は、ずっと血や筋や肉の中に隠れてて、なら黒くたって構わないのに。骨がこっそり黒くて、それが嫌で生き難いなんて事有りますかね。血も肉も毛皮も透き通ってて、骨の色剥き出しの獣なんて知りませんし。どうして骨って、白いんですかね。」そうか、私は骨に話し掛けられてる。「何もあなたに、話し掛けてなんていませんよ。白は、何も表に出さない事っ切りなくて、それだって、誰の耳に届く筈もありません。でもそれで、思う様何の事も、透き通って何処へも染みて行ける声には出来そうで、その声にしても、土と水を透けた光りに戯れ掛けられるだけのような。と言ってそれが、どうして骨が白いかの答えでもないんですが、こうして骨になってるんなら、それは、ああそう言う事だったんだなって、もう取り返しようもなくて、ただ白に委ねるかに声を。の声に白が映るかも知れず、何処を眺めてもただ、今日みたいに柔らかな陽の差す明るく暖かい日でさえ、暗い風のように濁って、何も透き通ってなんてなくて冷たく

て、その何処へ紛れ込んでしまって居るのやら、こっちは。それだって白のせいなら白を憎まなくちゃって、でも憎むって何でしたっけ。きっとそれは、白でない色に挑むか突っ掛かるような事に違いなくて。なら白は何処。な事より、何故骨にならなくちゃいけなかったのかな、取り返しようもないにしろ。何も身に覚えのないなら、そっと殺されてしまったかな、でも誰に、何に。」身に覚えもなく殺されたなんてのはね、眠らされてるだけかも知れないよ。「どう違うんでしたっけ？それって。眠らされてたって、その身へ帰れないんじゃ、だって骨で。」ほら、話し掛けてるじゃない。「何もあなたに、話し掛けてなんていませんよ。殺されるなんて、殺されてしまえば何でもないんで、なら、ただ眠らされてるようでも、眠ってるのは何でしょう。私でないなら骨？眠る骨って、骨が眠り込んだところで、何がどうなるでしょう、取り返しようもなく骨の儘で。ってやっぱり声が、骨の白を頼るかに。その白にさえ留まるなら、声は澄もうと濁ろうと、何処へ紛れるもなく。でも何処へ紛れもせず、声に何が言えましょう。ただ白に黙って従って、何も表に出さないでいるしかないのでは。にしても、そうして白に委ねられる声なので、それは何処へも染みては行けて。でもその何処へもにしたって、白に見晴るかせる限りより向こうへは行けずに。尤もその向こうなんて、白を拒むなら黒か他の色なだけに決まって、げっ、としか、でも行ける所へまでなら、声は光りを追って並ぶように滑

りもせずに滑って拡がるように届いて。ならもう声に言えない事なんてない、その言える限りには。ならもう声は、陽に照らされて蝶の羽を揺らす野原の草草の輝きに溶ける儘、そこに見るもの聞くもの匂うものを、取り取りに語り続けて已まない筈。でもどうかな？じゃこの声は何。草の匂いなら常に薫っても、ただその辺りに黙ってばかりだよ、って言うしかないんじゃ。この声にだけ聞こえる事をこの声にだけしようと、この声に語られて聞き取られる、そんな、この一つ切りの声。一つ切りなら却って声は一つじゃなく二つなのかな、互いへ語って互いを聞き取る。いや、声はずっと一つだった筈、間違いなく、他の何がどれ程幾つにも割れて分かれて砕けて消えても、声は声一つの儘だったんで、それでこうしてまだ声で。その一つの声が、例えばこちらからあちら、それともあちらからこちらへと通り抜ける為の、そのこちらやらあちらやらの二つの端を携えていて、必ず声は、水の揺れて傾いては向きを変えながら流れるように、その間を行き来する、そんな端なんて見えないけど、見えなくてこそ、ふわりと何時も端ならそれで。でも夜になれば月のようにぼんやりとは輝くかな、浮かぶ月二つを秤のように右左に乗せてるようで、そのどちらかが霞んだり霞を払ったりで重さもなく、声はどちらへも薄っすら白く透けて草原の陰を抜けては返し。そうして、星を見上げては行く先を誤ってないか確かめてばかりの誰かに、掛けられる筈のない声を戯れに掛けてしまったり。でもその誰か

って、何時も出会う誰かなんですよ、姿の色形は星の光りにぼやけても、白い影の形が何時も尖った星のように同じに歪んでるんで、立ち尽くして。ならひょっとして、いやきっと、その誰かが私を殺したんですよ、だって他に居ませんもんね。尖った星のように歪むって、それ、形からして刃を振り回してますよ、怖。でも、骨どころか薄皮すら断てる刃じゃないってのも直ぐに分かって、何でしょう、声も風も草の匂いさえ切れずに、じゃ何を切れるんだって腐腐して、独りでただ自らを振り回してるだけかな。なんて思わせておいて、血の一雫ばかりはこっそり消えるように滴らせても、何処にも何の痛みもなしに、途切れたとも知らされず途切れる夢のように、息付くものを見付けるなら、切るでもなくそっと切り殺す。でないんなら、自らはただ、薄ぼんやりと脹れた光りの粒のように怠そうに捩れてくるくる回ってるだけでも、その姿がその姿の儘にその匂いのように辺りに薫らって、その薫らいの微かな陰を湿らされるように被るものを、逃げようもなく塞いでしまう。その塞がれるのが石なら、星影を映すかに艶を増しそうでも、それがまだ命なら、瞬きも出来ず息の根は止められて、夜が明ければ、その薫らいの、何が薫るもない陽の光りの冷め切ったため底へと、その屍を沈めるしかない、そんな。でも分からないな、まるで違ってますよね、きっと。でも何が違ってるかなんて、違ってるだけの事で、幾ら違おうと違っただけ。な事より、何故、その影は白くて、白ならやっぱりまた

何一つ表に出さないか、なんですけどね、その隠してるものは分かりましたよ、くるくる回ってるのを眺めてれば。それはね、白は、誰にも見られずに何かを拵えてるんですよ。なら、誰にも見えないものを。なら拵えてないと同じで、その同じで、に取り付くように、すらすら出来上がってしまう、そんなものを。ああ、それなら見える、どんな色でもなさそうな、形は風なんて寄せ付けもしないかに風に戦ぐような、その戦ぐ色なら、高い限りの陽よりも明るく濃く輝いて、でも重くて、土や水を何処までも撫で回す黄金色の、でないならやっぱり常に目から逸れて行く、でもそれは高い限りの陽よりもずっと強く、自らを光らせるからで。ん？ならやっぱり見えないのかなって、その、かなって、ところに日溜まりのように微睡むように。でもそう見えるだけで、少しも微睡んでなんてなくて、すっきりと醒めた姿のその儘の形は、土も水も拒むかに軽そうで。それを拵えてそれと繋がってだけ、白は白の儘、他の色に染まらずに居られる。で、あなたは誰って、その姿に声を掛けられる、その声って、この声なんでしょうか。きっと違う。それはもう、あなたの声なんだ、でないなら、あなたを拵えた白の声。だって、その声のする所って、そこだけ真っ白く立ち昇る土の匂いさえ陽の光りに響かせて、ならもう、そこには土の匂いや陽の光りだけでは入り込めずに、なので他の何も近寄れずに。でもそれは、それってのは、その声と真っ白な響きとが溶けて、ゆっくり長い息を吸い込んで首を擡

しも白くないので。だって、それに跨がって白くないのは何故、と見れば、それを操る姿を見失えはしないので。でもその姿まで白くないのは何故、と見れば、それを操る姿を見失えはしないので。でもその姿まで白くないのは何故、と見れば、その獣の走り廻る辺りだけが、草は消え、草原の中に設えられた真っ白な庭のようで、その土さえ白く響くなら、その響きの届くまでは、全てを動かせてられそうで。で、あなたは誰って、その姿に声を掛けられる、その声って、間違いなくこの声で。それは、庭に響く白そっくりな。黙ってる儘のあなたに向かって、幾度も同じその声を掛けられるって、なんて楽しいんでしょう。楽しいって、つまりはもう、他に何もないって事ですよね。で楽しい儘にその声なんて掻き消されれば、そうして替わってそこへするりと獣の息遣いが滑り込めば、その獣ごと白に溶けて、それを溶かした庭の白も溶けて、ただ一つの姿ばかりが立って、今し方長い闇を抜けられたばかりのように、ずっと探していたかのそちらへと傾いて。でも、そちらって、まだずっとあちらの向こうなんだなって心付けば、足元を固めるしかないかに、その足元に丸い、骨じゃない、もっとずっと重そうな丸い大きな石を見付け、黙り込むばかりでも何も隠したいものもなさそうなそれが白いかどうかなんて心にも留めず、だって、白がどうって声の事で、その隠し事を咎めようにも、その声ってもう掻き消されたんだし。ん？そうかな、じゃこの声って何。って何。溶かされた庭の白が、何処へも行けず側の低い辺り

にまだ溜まってるなら、弾みに、何かに、って何って、その身が声を一つ震わせたかの。でもただ一つのその姿にすれば、そんなのって、どうなのかな。要らないでもないにしても、要るでもない。要らないでもないかには要るかも知れない、それならそれを、そのように扱って、どうにかその儘に片付けてしまいたくもなるけど、さてどうしようとか、そんな。って、もう、声が届いたんですよね、声でなくても、声が届くと同じな何かが。なのでそれは、その一の姿な、そんな。で却って、って何ってその自らの姿を拵えたいのかな。でもうそれはすっかりそうなってて、その姿は、って何、の、その何かを探しに歩き始めてる。それも独りじゃないですよ、きっと、だって肌身離さず持ってなくちゃならないものを忘れて来てる、それが何かも忘れてる。ならそれは、花にしよう。花がどんなものだったかなんて、何も思い浮かばない。だって真っ先に忘れてしまうものなら、そんな花でしょう。だって花なんて、花を眺めていないなら、全く要らないですもんね。花を眺めてる時には、花は無くちゃならないけど、それを眺めもしないで、どうして花の事なんて心に留めて置けるでしょう。でも、だからこそ、花は忘れちゃいけないんです。で、そんな花を忘れて来てしまっては、って何って姿が、その儘に居られる筈もないですよ、だってその姿に花が挿してあって、それで初めてその姿は眺められる訳ですし、って誰に？なんて尋ねても花がないでは仕方ないんで先を急ぎますけど、　の何

が先もないなら、出来る事って、忘れた花が白かったかどうか思い出そうとしながら、どっちを向いても行く手を塞がれて乾いた目を真下に落とす辺りに穴を掘るしかないかな。で穴がぽっかり穴らしくなれば花の色なんて知らない。だって花はもうこの先、全く出て来ないから。だって丸い石が足元に、ただその重さだけを見せびらかすかに、穴を覗き込むように穴の脇で凝っと動かずに居て、その石を一転がしして穴を塞げば独り切り、空の青が空より下へ降りられないかに。何を忘れるも、肌身離さず持ってなくちゃならないものなんて、何もない。独り切りなら、守るものなんて何もない、自らの姿さえ放って置ける。空がその姿を裸な儘に放って置くように。そうして、それを穴に閉ざしてしまえば独り切りになれる、そんなものを穴に埋めたとだけ憶えて置いて。いや、そうじゃなく、石で塞がれるなら、穴の中のそれも石と同じに凝っと動かずに居るしかなくて、それがその儘なら、そこから幾ら遠く離れても、独り切りになんて、なれよう筈もありませんよね。なら花だって忘れちゃいけない筈が、どうやらそうでもないらしいのは、独り切りになれようとなれまいと、守るものなんて初めから何もなかったって分かってしまったからで、それは丸い石の姿が、そう知らせていて、穴に乗った石は再びそこを転げて穴の中のそれを解き放つ事は出来なくて。つまりその石抜きには何の話しも出来ず、石を動かせないなら、ずっとその石の側近くか遠くかしかない何処かで、その石のこ

っちと向こうとで話しを続けるしかなくて、それで独り切りにはなりようもなく、何を守るも、石の重さに任せるしかなく。でその話しがまた、忘れて穴を掘らせた花が白かったかどうか、かって言うと、花なんて何処にも見当たらなくて、何で花の話しが紛れ込んでしまったんでしょう。そうか、それは石が、どうにも白くしかなくって、萎れてしまう花の忘れられた色と比べられてしまったかな。ああ、白って全く、この再び動かせない石の姿の事だったんだ、そうしてそう分かってしまって、独り切りで居られないのに独り切りで居るしかない事を泣かなくちゃいけない事だったんだ、でも泣けないのかも知れない。いや泣けなくたって構わない、だって泣き声なんて、疾っくに届く所へは届いてますし。空がただ空の儘なように、改めて泣かなくちゃいけない事が起こる筈もなく。そんな事より、喉が渇いていないかな。骨になってしまっては、水は飲めず、ずっと渇く儘の喉を忘れられず、苦しむしかなくて。でもそんなの、疾っくに慣れた筈。今更また喉の渇きに居たたまれなくなるなんて、石のせいに決まってるにしろ、きっと石ばかりじゃない。石って何？石の側でもどんなに石から遠くても、石を囲むものは石を囲む事から逃れられずに、なら一つ残らず石の事なんじゃないの？　石からしか始まらないなら、風も光りも空も石の内、石がそこに有るだけで、　いや、たった一つ、それだけは石の事じゃない、石に塞がれたそれだけは。　石の下の暗い穴の底で誰にも見付けられない骨にな

って。いや違う。石なんて何処にも見付からないんだ。いや違う、石なんて何処にでも見付かるので、却って、それは、その骨は、もう何処へ行ったか行方知れず、でその骨だけは石を囲みもせず石の内にも入らずに、そう骨が、何より骨身に染みて分かってる。だって何処にも見付からないんですよ、骨なんて。待ってよ、それで花の話しが呼ばれたって事かな。骨も花も見付からないなら繋がってる、って訳だね成る程。って何が、って何、って姿だけが、ただ一つ姿って呼べそうな何かで。ならその姿はきっと耳を澄ませてる、その姿は何、って話し掛けて来る声を待って。何が有ったの？それは取り返しの付かない悪い事？まぁ有った事は有っただけの事で、どうにもならないけどね。そんな事より喉の渇きはどうなったのかな。疾っくに慣れたんだね。いや慣れるも慣れないもない、だって石は何処を見てるって、石という石はどれも真っ直ぐ独り切りなの空を見上げてて、空の何処にも水飲み場なんて見付からないなら、水の事なんて忘れてしまってるんで、その水って何？朧にも浮かばない花の姿みたいなものかな。で空から降って来る声に耳を澄ませてる、その姿ばかりは見失えない、石なんて忘れてしまってても。ならその、石も忘れてただ空からの声に耳を澄ませる姿が、どっちの何が先もないなら、でももう穴を掘ろうにも、それを促す石にも頼れないでは穴も掘れず、なら却ってそれで行く先は定まりようもない儘に定まりそうで、そうして歩き出せば、何を置き忘れて来たかだけは

思い出されて、それを取りに戻る足取りは酷く重く、身を俯せに投げ出せば、石のように重いその身は冷たくてまるで骨だな、って空から話し掛けられたに違いなくて、ぐるりと仰向けに空を見上げようとして、取り返しの付かない事が、どれ程取り返しが付かないか今更に思い知らされるように、やっとそれで、泣けそうで、でも涙も泣き声も、花や水と同じで、それが何かも忘れた儘ではどうにも出来ず、ならせめて、空の何処かに、何処かへ行ける道筋でも見付けたいもんだなってそっと呟いたのか、そんな声が却って小さいばかりに空を突き抜けるように届いたらしく、ふと側に、殺した筈の石の姿が、花なら咲くようにでも微笑み掛けて来るって、でも石を殺したって何だっけ、って何って姿しかなくて、それならその姿に微笑み掛ける姿を自らの影のように思い浮かべる事ならあっさりと出来てしまって、小さなる水溜まりを挟んで向き合って、腹這うようにして、そっちとこっちでその水を啜れば、直ぐに水は涸れても、潤せた喉の話しは一渡り弾んで、で話しも途切れれば、そっちとこっちはどうにもただ隔たる儘にそっちとこっちであるしかなく、涸れた水溜まりの跡がくっきり残って、それは草を掻き分ければ何処にでも見付かって、その水溜まりの跡に水が湧く事もあれば湧かない事もあるなら尚更それから目を離せずに、そうして、そっちとこっちは、どうにもそっちとこっちの儘でしかないと思い知らされるしかなく。でまた、石を殺したって何だっけ、って何って姿だけが、

そこに取り残されるしかないなら、間違いなくそっちから聞こえて来る声に耳を澄ませる事が出来て、でその声は耳に届く声になるより先に、空の高い所を切り裂く一筋になって、空に道筋を見付けたいって呟きに応えて呉れたんだなって、少しは嬉しくても良さそうなのに、その向こうに何が有るか、いやその前に、そんな道を行かなければならないのは誰、ってぼんやりとでも、そこに白い影でも見付けてしまえば、却って悲しくなくちゃいけないようでもあるのかな。ようでもあるだけだけどって、そう、ぼんやりしているその姿に微笑み掛ける姿が、道の途絶える空のもっと高い先から、こちらへ呼び掛けるような姿なんて見付かる筈もなく、ただ声だけが、空から降るようじゃなくら、そんな姿なんて見付かる筈もなく、ただ声だけが、空から降るようじゃなく土や水から湧くように、それが空の奥で何をしたいかを教えて呉れる。いやそうであるにしても、声は、その聞き取られるのを拒むかで、この空の下から立ち去るよう促して来る。それは石を殺したからだ、でも誰が、って、そんな事でも考えて、その声の望みを有耶無耶にするしかなさそうに。でどうなのかな、そのこっちを拒む望みを拒み返したようでもありそうなら、まあ痛み分けってとこかな。痛み分けって言っちまえば、何だって常に痛み分けで、まだこうしてここに居られるんだろうけど。の、ここってのが怪しいのも常の事で、ならその怪しさを何かに託けて隠すのも常の事で、ここはもう空から声の届く所じゃない、って叫ぶ振りでもして、声がそれを咎めでもすれば、それに絡ん

で、何が怪しいなんて後回し。でもしようと思えばしようと思っただけで、後回しに出来ないものなんてない。でも何がそれらを後回しにするのかな。って、それは、後回しの、そのまた後回しにしてしまって、却って後回しに出来なくなってしまったもの。それなら知ってる、見慣れてる。でもそれを、必ずどうにかしなければならないのに、どうしたら良いかはさっぱり知れない。そう知れないとは、今知れた。その見付かる筈もない姿が空の奥で何をしたいかを知れたので。それで石は殺されるしかないんだ、だって殺された石の身の置き所なんて空の奥しかなくて、石が殺されないでは、空はただ何時までも独り切りで。でその空の奥が、それをどうしたら良いか、全て知っていると知れて、何を後回しもなくなると見通されるなら、何が起ころうと、それらはどれも石の殺される事ばかりで。とそう、初めて石と空とを見比べられたなら、誰が石を殺したか、その姿は自ずと現れる、どのようにも。どのようにも？って、ああ、それなら一つしかない、どのようにもなんて居られる筈もなく、どのようにも骨で。ん、骨が石を殺したってのが答えって訳？あはは、まさか、逆様でしょ、いや逆様でもない真逆とか。殺した事にした石に殺された事にして、自らを骨にして、なら殺したのは、骨になった自らであるのだけは忘れずに居ようと、いや石に忘れられずに居ようと、その為にだけ骨で居ようと決めて。で、空を見上げるようで、空なんて無いかにまるで知った事じゃなく、なら取り敢えず

土や水に馴染む振りで、殺して殺された骨が、そう骨に仕向けた土や水の向こうで、泥塗れで、石には目も呉れず泥ばかり食ってる彼らに、せめてその日一日、血腥さを無くした振りの彼らに、骨のこれまでの事を。」ああ、それで分かった、何が分からなかったかが。白が何かが分からなかったんだ、でも、その分からない白って何？だから分からないんだけど、ならどうしてそれを、白って言えてしまえるのかな。が、どうしてかが分かったって事だね。つまり行けども行けども土と水ばかりなら、嫌でも骨を見付けるしかなくて、そうしてその骨と語らえるなら独り切りで、だってこっちは、殺すとも殺されるとも係わりようもない身だからね。そんなの、泥ばかり食ってる、泥臭さの血腥い彼ら限りの事さ。石は殺されなんてしないのに、そんな作り話しが、骨にはなくてはならないだけで。骨が骨を殺して骨に骨が殺されたのは、石が骨を殺したから、そう見透かされるしかない、ってのだけは、作り話しじゃないかも知れない。でもそれも作り話しになってしまうのも仕方ない。骨が骨の儘であるしかないように。でも、だったらどうして骨を見付けてしまうしかないんだろう。いや、だからそれはもう、分かったんだ。何が分からなかったかで。そうしてそのお蔭で、彼らのように泥など食わずに済む。で骨と向き合えば、土の上に水が浮いて、それを骨と並んで、草原を眺め渡しながら啜れば、骨は静かに草陰に転がり消えて、土に残る水の跡が色を滲ませるなら、それは空の青に隠さ

れた、空にしかない色の数数で、その彩りに描き出されるのが、柔らかい石の重なり合うに似せたかの花の姿に違いなく、それを毟って食べては、空きっ腹の儘、独りでその甘い味に酔っていると、分からない事なんて何もなくなって、ただ泣けて来るなら泣いて、その泣き声の届いて、それに耳を澄ますのが、石を産んで育てて、でもその石って骨で、「骨を何だと思ってるんですか？ 花の事じゃないって言いましたよね、言いませんでしたっけ、ま、どっちでも構いません。骨は見失われた儘ですよ、それを見付ける為なら彼らは他の骨を焼くかも知れません、獣の骨ですよね。それが何を見せて呉れるでしょう。その焼かれた形を空に翳せば、空の高い所は幾筋にも切り裂かれて、それが道に見えようと見えまいと、もう通り過ぎられてしまっていて、その通り過ぎたのが誰かなんて、どうせもう名も忘れられた誰かなら、誰であろうと後回しにされて後回しに出来ず、あなたの言う土の上に浮いた水を啜る事が出来て、石に忘れられた骨にしても、石に殺された事は掛け替えもなく残って、つまりそれは、骨と石を繋ぐ白さに違いなく、その白に隠された儘の、空の青の奥に隠されてすらいない、まだまるで陽の目を見ていない色の数数が、骨と石の間を彷徨うように滲み出る彩りは、見失われた骨を影ごと浮き立たせ。そうして骨は、再び見失われる事もなく、自らを見失いもせず、で却って骨の形を失って、柔らかな陽の光りの塊のようなその姿で、土と水の上を滑るように進んで。それに

導かれるあなたは、そう、ここであなたですよ、あなたは、そのあなたの透き通った姿で隠すんですよ。白に隠された儘の色を。そんな色なんて有る筈もないかに。それが私の望みだったかも知れませんね。それでこそ白で、踊るような。陽の高さも突き抜けて。でもどっちへ？高さなんて知らない事。それはあなたや彼らや殺され続ける獣達の目にしか映らない。つまり空って事ですけど。空なんて嘘なんですよ、初めっから、土と水との。土と水とが交じり合える為の。でもそれ、骨になるまでは知りませんでしたけどね。いや、そうなら嘘が嘘かも知れません。嘘って嘘なんですよ、全く踊るように。つまり踊ってるんですね。それでこそ、白でさえなくて。なら、骨でさえなくて、ってのは言い過ぎですけど、言うだけなら嘘にもなりません。なら、何も踊ってなんて居ないでしょう。踊るまでもないからで。そうして嘘でも嘘が嘘でも、空は何一つ拵える事なんて出来ないからで。もうお分かりでしょうね、そうしてあなたは、酔って独り切りで踊って、周りを驚かせて居るからには。酔うしかありませんよ、泣かない為には。でも泣くのは私独りの事、あなたの知らない事ですけどね。泣き声の届く所なんて、骨の私の、空の下へと転げ出た、草の陰の暗い風の奥の何処かへ紛れた暗がりばかり。でもそこは暗がりでもない。草が陽に輝くせいで暗がりに見えるだけ。そこは私を獣と分け隔てた穴。でも穴も暗がりも同じなら穴でもない、ただ空っぽな、でも決して空へは向かず、土と水の交

わるのを操るかに。でもそれのせいで私は、分け隔てられた獣達とも思う様、交われて。そうして何を、私達は産んだんでしょう。言いようもないようなものばかり。言い掛けては、違う何かに言い換え続けるばかりで果てのない、そんな。なので黙っていてもすっかり言い得てしまえる、そんな。そんなものらの栄えるなら、獣達なんて悉く食われてしまったかな、その血の匂いまで舐め尽くされて、なので幾ら風が草原を揺さぶろうと、嘘のように静かなのかな。嘘のようなだけですもんね、嘘なんて。そんな事より、土と水の交わって、すっかり円い硬い花の姿をしたなら花が、その姿を彼らの血腥さに壊されて、骨の白さなんてもう、何処にも見付けられません、骨なら骨の儘に見付けられても。骨は骨の色しかしてませんよ、骨の色なので骨で、獣とも同じな骨な。で、何か悪い事でも有ったんでしたっけ。誰か道の途絶えるその先まで行きたがってるのって何故でしたっけ。花の姿って死ねも出来ない誰かの恨みでしたっけ。その何だか知れなくったって、ただその消えて空の下から去って行く姿を見ていて欲しいんですよ。それでこそ、花の姿をしたなら花の姿が壊れて、その無様な欠片の、水の涸れた土の上を踊るように焼けるように、水に恋い焦がれるその壊れた儘にも花で居たそうな、って事は、花なんて初めから嘘な、その嘘の儘に水の姿へと行方を眩ます、そんなそれが、土に残る水の跡と滲む色を踊らせるようなら、きっとその彩りは空に蔑まれるように見下ろされ、水に打た

れた杙にも見紛われ。その見紛われる他は、骨の名残の微かな白の薫りへでも振り払われるように見失われれば、土とも水とも交わらない空は、空独りに思いを掛けて、空だけは嘘じゃなかったとその日の終わりに呟きたそうに、（二〇一七年六月九日）

（それ、捨てて…）

　それ、捨てて行くんですかね。」「んだけど、戻って来るって分かってるから。」「何が？」「その、それですよね、この。他に何か？」「それですよ、その。何でしたっけ？それ。どう見たって直ぐに分かりそうなもんですけど、それがどうして、」「何でしたっけ、なんてね、すっかり分かってると分かってて、その分かってる事から逃れようと、いや違うな、分かってる事が、だよ、そこから逃れようとしてて、でも何処へ。その逃れる先をきっと頼みに、」「でなら、それがどうして、もないって、口裏を合わせたいのかな。でも、それがどうして、も何も、そうか、それを望むにしてもこっそり囁くようにしか、だってもう、逃れようもなく逃れるしかない先へ逃れてて。」と聞こえるのは、何時もなら、沼の底の匂いの風に移ったからと当たりは付くのに、左腕の肉を粗方削って、

刃は鋭いので血は少しも出ず、もう骨だけになって、それも削ろうとする乾いた右手に刃は握られてなくて、そのせいでか、声の在処もまた緩い沼の風にさえ弾かれた何処かかも、と来ては、水際は足を滑らせそうで危うい。にしても、足を濡らしてもいなくて、なら水際って何処だったんだろう、ここじゃない。危ういのは、無くした骨の事で、血の出ないのは、骨の数の足らないせいに違いない。刃で骨を剥き出してもぬるぬるした骨は直ぐにまた筋や肉に覆われるなんて、分かり切ってたし。それで刃を沼へ捨てたんだな、手が滑って落とした振りで。そう思い至れば、声なんて何処からも聞こえず、何処を向いても深い森なのに、鳥の羽搏きも風に震える梢の音一つ届かないけど、森の中って、何時もこんなんだっけ？　思い出せないのは、あれこれ遣る事に追われて森に背を向けてばかりだったからって事にして、にしても沼に行く手を塞がれる切りでもないのなら、遠く微かなせせらぎに誘われるかに、静かなばかりな辺りを後に、崖道をくねくね登ってはいて、直に崖の上で、その仰ぐ空から降ってて来る音なら聞こえそうでも俯いて見下ろせば同じ沼で、回り込むばかりと来ては沼から先へは行けないらしい。きっと来る日も来る日もそうだったんなら、それでこんなに静かなのも、ずっとそうだったって思い出せたかな、こぢんまりと真っ白に。でもどうして来る日も来る日も来るんだろう。来ない日の事だって、もう知れようもない程に知ってるんだし。なる事より、日焼

けした太く硬い左腕は傷一つなくて、それなら右手に刃の握られていないのが風のように軽過ぎて、その儘延びて崖の下へでも、ふわりと流れてしまいそうな右腕のせいで、体が捩れるのを抑えられない。のか、それとも、態と抑えようとしてなくて、それで体はクルクル回って、って、そう巧くは行かなくて、って、独りで呟いたでもなさそうなら、きっと二人で、ならもうクルクル回ってない。それともクルクル回り続けて、回ってるのを忘れてしまうので二人かな。そんなもう一人ならきっと幻で、クルクル回ってだけ見える、でもどっちがどっち、かなんて直ぐに分かる。だってこっちは、直ぐ先に沼の真ん中に浮いてる白い骨を幻に見立てるようにして、もう目が離せないんだから、崖に上も下もないかに。もう一人なんて、ずっと後ろでキョロキョロしてるだけ、まさか沼に足を取られてなんてないだろうね、それって時を捨ててるんだよ向きになって。でも、こっちもうっかりしてたかな、骨は沈んだか水面の輝きに紛れたかで、もう見失ってしまっては、またどっちがどっちか覚束ない。そうしてどっちもどっちなら、そんな二人が、たった一つの当てになる幻で、他に何も見当たらないなら、それはそれだけの事、時を捨てるも拾うもなく。で、そんな二人が息を呑んで凝っと覗き込んでだけ覗き込める中へ、滑り込んで行くしかない、独り切りで。だってそこへ通じる隙間は狭くて、僅かに開いては、そこを擦り抜けるものなら何でも噛み砕くように、直ぐにまた閉じてしまって、

だろ？って振り返ると、もう一人は、どうでも構わないさって顔で笑ってる。ああ、そんな顔だっけ、初めて見るような。でも覗き込むのを已めはしない。だってそこには真ん中に、花を咲かせたように輝く、ならそれって花なんだ、それからもう目は離せない。それとも、こっちが見詰められてるかな。見詰められる程、肌は白く身は透き通って、崖も沼も忘れて消えて、狭い隙間も擦り抜け易い。でもその前に、透ける程に酷く腹を空かせてるなら、食べなきゃいけない。それも二人揃ってでなければ食べられない、だって食べ物を掴み取れるのは、その日焼けした左腕しかないんで。でも、こっちからはそれは左腕でも、そっちからは右腕かも知れない。そんなじゃ、掴み取れる物なんて、腹を満たせるかどうかあやふやな物だって嫌でも分かりそう。で、分かったのかな、分かる筈ない。食えそうな物を食うだけ、独りで。もう一人は？って振り返っても、流れる水が、さも造り物であるかに高く湧き立つばかり、なような。ならもう、知らずに狭い中を擦り抜けたんだね、独りで。食べ物は、右手でも左手でも幾らでも好きなだけ掴み取れそうに、大きな石の一皿に盛られてる。でも、匂いが受け付けない、色も形も見た事もないものばかり。ならどうしてそれを食べ物だって思えるかなら、そこに居る誰もが、それを黙って食ってるから。誰かって誰？食ってる誰かも、食ってる誰かに食われてないか。食いながら食われて、それで姿を現す、そんな誰かが、ずらり揃って、骨をしゃぶって。

「で何を探してるんだっけ、探しようもなさそうに。」「刃です、肉を削いで骨を剥き出す為の。」「嘘だね。」「ええ、嘘だって、ちゃんと分かるように言いました。ここは何処でしたっけ。」「山の中。川の中でなければ。」「じゃ山の中の川の中にしときます。つまりどうだって構わないって事で。ただ、ここが何処か、事有る毎に、誰かに尋ねてないと、何だか肉の中で骨が疼いて何処かへ流れ出しそうで居たたまれなくて。」「嘘だね。」「ええ、嘘だって、ちゃんと分かるように言いました。ここは何処でしたっけ。」「何処なんて話しは、どうでもないさ、だってお前だけだぞ、食い物に手を付けないのは。でもお前を食いたくなってるのは、俺だけじゃない、なぁ。」と、話しを振られた黙ってる奴と、もう静かに取っ組み合っていて、でもそれは、もう一人で、こっちは、花を咲かせたような真ん中を、呑み込まれそうに見詰めて花と色色言葉を交わせているような心持ちで、その心が波打つように身を重くするのか、その真ん中の底へ沈みそうで、それに抗いようもない儘に日焼けした腕が濃い陰を伴って浮き立って差し伸べられるなら、それに縋るしかなく、それがもう一人の腕と分かれば、二人揃って、沼に放り込まれてしまってないか。二人揃って？な訳ない。もう一人って、そっくり沼だったんだ、でないなら、沼に映る姿の影、沼を見詰めてだけ息の出来る、沼を背にしてだけ顔を作れる誰か。もう一人が、そんななら、こっちだって、何処にも放り込まれてなんてない。独り、崖の上で沼

を見下ろして、落としたものの事を考えてる、他の事なんて考えようもなく。捨てた振りの振りをしてただけで、間違って落としてしまったのは何？やっぱり刃か、それとも足らない骨。それが沼の中では、見極めようもない。「で何を放り込んだんだっけ。」「骨の数の足らないのは確かなんですよ。そのせいで、刃を投げ込んだのかも知れませんね。」「骨なら、取り戻せるって分かってたんだろ。」「さぁ、そんな話しを耳にした事なら有りましたかね。」「嘘だね。」「ここは何処でしたっけ。」「聞いたか。ここは何処でしたっけ、だってさ。あいつだよ、花を枯らしたのは。でも枯らされたって、花はまた咲く。それをまたあいつは、ズタズタに切り裂いたんだぜ。切り裂かれた花が、どうやって元に戻れるかって？なんで元に戻らなくちゃならないんだ、態態切り裂かれる為にか。花は沼になったんだ、でないなら、沼を囲む森と沼を見下ろす崖と、沼の底の匂いの風に震える梢に止まって囀る煩い二羽の小鳥になったんだ。どっちも同じ事か。」「ここは何処でしたっけ。」「聞いたか。ここは何処でしたっけ、だってさ。そうやって誰かに尋ねてれば、成るように成るとでも思ってんだ。な事より、囀るなら、元は花だったって事で良いのかな俺ら、って言いながら怪しいけど。だって梢に止まってなんてないよな。梢って何処だっけ、って口が移っちまったよ。な事より、どうして来る日も来る日も、ここは森の中の沼の側で沼の風は回るばかりなんだろう。止まる梢も見付からずに。やっぱり、花が

沼になったからか。でも花は、昼は知らない寝てるから、夜になると花は、森の奥から沼へ来て、まあ森の奥なんて見せ掛けだろうけど、水を吸いには来るじゃないか。それとも欲しいのは水じゃなく、水に溶けた骨の匂いかな。それも古い骨じゃない、今さっき水に沈んだばかりの若い骨の。それを沼が見てるんだ、けど、誰の目で？もない。沼が目だったんだ、花の。花弁を裂かれても、花は、その目だけは裂かれずに、沼の姿の目で何を見るか、って、花に決まってる。いや、それを見てるのは俺らだぞ、なら俺らが目なんだ、花の。沼は、裂かれて腐った花弁の重なって、それで山に溜まった水を呼んでその水が水を呼んで尽きずに、いや違う、沼は沼の目だから沼で、花なんて暗い山颪の陰だろ、って侮ってて、なので、花の事なら何でも沼は知ってる、知ってる限りのな事より、若い骨の匂いを嗅ぎに来る花だよ、辺りも水も真っ暗じゃ待つしかない。でも何を？花に待てるのは花の姿だけ。骨の匂いなんて山颪の向こう側にだって待ち望めない。だって骨なんて、ここは何処でしたっけ、なんて言ってる惚けた奴らが、しゃぶりたいだけのもので。な筈が、どうもそうじゃない。花は、骨の匂いを嗅げば嗅ぐだけ艶を得て、己の姿を水際に晒して、鏡のように静かな沼にその姿を、裸を晒すように映して、その花の色は沼の色と溶け合って。」そうか、そうして沼の色と花の色が重なれば、それが刃で、何でも切り裂かずには居られない。でも、それを探し出して手に取れて、何がどうなる

か。花の姿が骨の匂いで出来ていて、骨が、その花の姿の中にしか見付からないなら、刃は何を切れるか。って事じゃないの。違うの？なんて分かりそうにない事を思い巡らしてだけ、崖の下の狭い辺りを通り過ぎては沼を巡って居られそうで、そこでまた、腹が酷く空いて来ても、腹は透けてはいなくて、なら腹は暗い色の二匹の蛇が絡み合うように黒黒としてないかなって、もう一人に尋ねたい、そのもう一人は、こっちに何の断りもなく独りでさっさと歳を重ねてか、髪も肌も黒目までもカサカサに真っ白で、湿った風でも受ければふわりと散り果てそうに、立ち枯れの硬い木の幹に縋り付いて、目だけを光らせてる。黒黒としたものなら何でも透かし見てやろう、って言いたげに。でも、そう言った訳じゃない、寧ろまるで違う事をしてる。つまり目は、自らを光らせる為にだけ目で。黒黒としたものなんて、疾っくに透かし見られて其処彼処に溢れてて。だから目は光ってなくちゃならない、って事だろ。でも何処で光るかだよな、なんて呟いて水際の暗い足元を覗き込むと、足なんて無かったかに全く足を取られてる。水にか？水にしては酷く重いなら、沼の水に溶けた石に違いない。それが筋にも肉にも骨にまで食い込んで、それでやっと、もう一人に語り掛けられそうなら、「二人揃って、放り込まれたんだよな、ここが何処も、放り込まれるしかない処へ。そこへ沈むだけ沈んで、血よりも濃い水に身を委ねれば何とかなったのを、知らなかったかのように微かに思い出し。とことん

微かでなくちゃいけなくて、その為に力を抜いて、空を見上げるよりぼんやりしてなければ。でも円く切れ込んで来る、水の、血よりも濃い色に妨げられて、いや違う。こっちから妨げてるんだ、なので水は血よりも濃くて、石の重さにも近付くしかなくて」と、語り掛けられたかどうか、「それよりも、」と、もう一人は、老いた姿を脱ぎ捨てたかの若い声、でもなく、ただ言葉の角を水のように丸く柔らかくして、「…無くしたものの事だよ、骨か、目か。それとも右手に握られてた、でもきっと刃じゃない、って思えてしまって、それで空を見上げるよりぼんやりするしかなくなってて。でもその、無くしたなら、骨が目、って事はないかな。骨が溶けて透けて光りが通り抜ければ、光りを当てられた色形が、その姿になって、その儘に動き出すなら、そこが丸ごと、目で。でも、そんな目じゃ、その後を追って拾いにも行けないね。いや、そんなで目なら何処も彼処も目かな。でも、それを目だって確かめる目なんて無くて。構わないさ。何でも見付けられるものを見付けて拾って来られるものを拾って来て、それで、それが無くしたものかどうか、試せば良いんだ。でもどう遣ってかって？　沼に映った花の裸の姿にそれを宛がって、ぴたり嵌まれば、それが無くしたものじゃないのかな。でないんならなくても構わない。それはきっと、無くしたものより役に立つ、は言い過ぎか。無くしたものも、それとぴたり嵌まるものを、知らせては呉れる。それと花の姿の知らせて呉れるものと、どっ

ちがどうかなんて、知れてもきっとずっと先の事。かどうかはどうにしろ、花そのものの姿の沼の水に晒されるって、何の話しだっけ。花が森の奥から出て来るって？花の事なんて二人しか知らない筈、二人しか知らない花なら。そんなのって、ええっと、小鳥の囀りなんだよね、そうか、ならきっと、彼らの知らない、森でも空でも沼でもあちこちの水辺でもない木の洞でもない、土の下に埋もれてる事だね。知らない事しか囀りたくないんだもの、鳥なんて、知ったか振りで。なので囀れる、虚ろに誇らしげに。ただそれが騙りでも、その目が土の下の影を追ってでも動いて、それを語らせるのは間違いない。ほら、目が見付かった、目なら目で、誰のとかに拘らず。で、それって、骨だよね全く、土に埋もれた。いや土に埋もれてたんじゃ身動き取れない。沼の底に揺蕩って、そうして森の土の下を見透かせる積もりになれなければ。いや違う。骨と目は二つ揃って並んでるんだよ、二人みたいに。なので、無くしたものを考えたくもなって、何処へ放り込まれたかなんて事も心に懸かってしまうんだね。どう？」「さっぱり分からないけど、分からないんだから、それで構わない、って事なら、行く先は腹に聞こう、って走ってて。食い物の匂いのする、そっちへね。でも受け付けない匂いに変わりはない。でも何で受け付けないかって、ひょっとして、花を枯らすから、花がそれを嫌うから、と何となく当たりが付けば、食い物の事なんて、どうって事ない。腹なんて空いてて当たり前で。生付

まれてこの方、何かを口に入れた覚えもない。ってまさか、こっちが花だなんて事もないだろうけど、花を切り裂くばかりの身としては、花とは切っても切れない繋がりが。」と、それを見付けられないかと振り返れば、高い泥水が湧き立って、独りで。食って食われる誰かばかりで、「お前、骨を取り戻しに行ったんだろ、骨を取り戻しに行ったんだよ！　でだ、骨なんて俺らがしゃぶり尽くして、ここに並べてあるんだよ、それを取り戻しに行ったんだ。ほら、取り戻せてないじゃないか。だって骨はここに有るだけ有るんだから。それから、目だけど。」そうだ、骨じゃなくて目。目は確かに無くなってる。花を咲かせたように輝く、ならそれって花、の真ん中に、必ずなくてはならない目が、だってそれがなくちゃ、こっちは誰に見詰められてもなくて、なら、どっちがこっちもなくて、そんな目が、失われてる。だってそこは、幾ら花の咲くような輝きで隠そうにも隠し切れない酷く窪んだ影で。「いやね、影なんだよ花って全く。」誰？「小鳥の囀りにしとけよ、な訳ないけど、だって直ぐ後ろを、臭そうで触れもしない流れる高い泥水に塞がれてるんじゃね。」目、って事だ。「アハハ、大当たり過ぎて、何も言ってないと同じ。間違えもようもなく。もう一人はどうした？」あれは、もう一人じゃない、まるで違う誰かじゃないかな。「今頃分かったのか、でも何も分かってないって分かってはなさそうだな。」それだって、間違えようもなく何も言ってないぞ。いや言い争いをしに来たん

じゃない。つまりそれは目じゃない、って何が？って尋ねられるのは誰かって事だけど、だってそいつは、のそいつがどいつかだけど、食われててばかりじゃないか。でもう、骨ばかりで、でも並べてある骨とは別けられてて、その向いてる先に、花の色を失って、なので間違いなく花って分かる影が、真っ直ぐ立ってて、それが失われた目を覆い隠しているのもはっきり分かれば、その目とその骨だけが並ぶのを見付けるしかないのが、やっぱりもう一人って事かな。もう一人じゃなくても、もう一人って呼ぶしかない、その、酷く楽しげに髪も肌も黒目もカサカサに真っ白な、その光りだけでその姿を、影の前に晒せるような。でもそれじゃ何も出来ないって、そのもう一人も分かってるなら、そのもう一人のまたもう一人が、日焼けした逞しい腕で、その骨とその目を掴んで、それを放り込める処なんて決まってるから、真っ直ぐそこへ走って。いや真っ直ぐは言い過ぎかな、真っ直ぐなようで真っ直ぐな積もりで、ならそれって全く真っ直ぐなんだろうけど、やっぱり真っ直ぐじゃなさそうなのは、ただその目とその骨を掴んでる腕の重さのせいで、その腕ばかりが疲れてしまうからに違いなく。「もう一人のもう一人なんて言い草はさぞ喉を詰まらせようね、分かってる癖に。」そう言う、小鳥の囀りも、な訳ないも、どうにも拵えものの癖に。「なら、光りが嫌いで飛び去った小鳥の羽搏きが、呟きに聞こえる事にでもしとけよ。」喉が詰まるなら却って転げて行ける、転げて行けるそっちへ、

そのもう一人で。そうか、俺はそのもう一人と話してるんだろ。若くもない老いてもない何を掴む腕もない、影ならきっと有りそうだけど消されたような、声に聞き覚えが有るだけで、だってその声しか知らない、その姿をさも目の当たりに出来てるかに語り掛けられる、そんなもう一人。それならそれってもう、もう一人じゃない、やっと分かった。お前はお前だ。一人切りの、そうしてこっちを一人っ切りの独りにしてしまう。「嘘だね、やっと分かったなんて。ずっと分かってた事さ。」で、そっちはどうだい？「嘘だね、そんな問いも。だってあんたには見えてるじゃないか。目は、あんただけのもので、今のところは。その目にものを言わせてみろよ。」ふん、そんな言い草こそ、聞かされるこっちはまた、沼の水に溶けた石に、有りもしなかったかも知れない足を取られて、いや水際の暗い足元に、間違いなく、歩き回れる処なら全て歩き回ったらような骨張った足は生えていて、その足に聞けば、何処に何が有ったか知れない事もなく。「それも、やっと分かった、なんて言う積もり？　嘘なんだよ。」何を言わせたいんだ、俺がお前を殺して、血塗られた手のせいで嘘がバレたとでも。「あんたに殺せるもんか、嘘吐きに殺せるのは、嘘の中の拵えものの誰かだけ。」そのお前は嘘の中でも殺されたんだろ、そう言うなら、拵えものな訳ないじゃないか。「嘘だね、分かってる癖に。な事より、刃だよ、沼へ落としたのが何か知れなくても、刃を無くしたのは確かで、それが水に溶けた石の

匂いを追ってヒラヒラ舞えば、その跡は、光り輝く目が、並んで行くようで。これって分かる？あんたの目で見える通りを声に写し取ってるんだよ。で、その並んでたのが、こっちから真向こうへ揃えば、一つの強い輝きに纏まって、それをあんたは、花の裸の姿としか呼べなくて、でもそれはどんな姿にも見て取れなくて、なら何を脱ぎ捨てて裸になったのかなって、目で探るにしても、それらしい布切れの色と形を薄い影を重ねて濃くするようにでも拵えるしかなく。でも影を幾ら重ねても影だよね。でも他に何も浮かばないなら、それを花の姿に見立てるしかなかろうね。で、それをヒラヒラ舞って何処へも行かない刃で、ハラハラと切り裂ければ、それは間違いなく花だ、って思い込める望みに取り憑かれ。でも石の匂いに、どうにも妨げられてしまう。あんたが殺したと思つてるのは石だもんね。でもそんなのもう疾っくに済んだ話しで、石は生きてるのと同じに何処を掘っても太い根っこみたいに出て来るし、何処の水にもたつぷり溶けてるし、沼の深いのは、その水の重さのせいなのは知ってたよね。で、どうする積もり？もう何もあんたに出来るのは、その花の姿に見立てた影を攫って、石の匂いの届かない処へ逃げて行く事だけ。逃げられるかって？そりゃ、あんたの何時もの嘘を使えばさ。でもそこでどっちを向いても、ヒラヒラ舞ってる刃なんて見付からない。ならその手にしてる影が花かどうかも知れない。酷く窪んだ影を抱き締めてるだけ、投げ遣りな笑いさえ込み上げて来

そうに。でも構わない、何とか足を踏ん張って水に落ちて溺れでもしなければ。花があんたを追っ掛けて来るに違いないから。それが光り輝いて窪んだ影を埋めて呉れるかどうかなんて事じゃない。光りなんて石ころと同じで何処にでも掘り出せる。花を掴み捕れたなら、光りなんて煩いだけ。」なら骨だろ、それ。「うん嘘じゃないね、それ、目を片付ければ。でも危ない橋を渡ろうとしてる。つまり骨を見付けたって言うには、まだ足らないんだよ、ヒラヒラ舞ってる刃でもない。」ほら、だから、さっき言ったろ、目って事だろ。「まさか。何を聞いてたの？」聞く事なんて何もなかったか、だってお前はお前だし。きっと、こっちとそっちじゃ、目はまるで違うものに違いなくて。なら目なんかじゃない、これで片付いただろ、目は。そこにはただ、夜の真っ暗な森と沼が映ってるだけで。「夜なんて知らない。お前はお前、って誰の事？互いにそっちとこっちしかない。声だってない。これが声じゃないのは知ってたよね。」お前はお前なんだよ、それが誰の何の事かなんて知るか。それでこっちは声も聞ける、声じゃないって言い張ろうと。いや違う、声なんて要らなかった。嘘であろうと構わない嘘を一一暴こうとするのがやっとの。でその、お前だろうと誰だろう、左手が握って放さないものは何だ、何も握ってないかに見せ掛ける、その左手の形は。その形に隠されたもので、お前はずっと俺の右腕を削ってた。凄い力で。凄いとも分からない程に。刃なんてものが無くっても、それが刃で。

それが、筋と肉を削いで、間違って滲んだ血など泥水に拭い捨てて、骨だけを残す。何故かなんて知れてる。骨だけが、無くしたものを探せる目に成り代われもするからさ。でもどんな目だろう、沼の底に沈んだ儘か、それともそう見せ掛けて、何処にでも掘り出せる石ころに潜んでるか、その確かめようのないのは、それを確かめられるとしたら、その目だけだからかも知れなくて。なら、目なんてどうだろうと、骨を常に剥き出して置ければ構わない。いや違う、まるでそうじゃない。だって、骨に探せるものって目だけで、骨に探せる目って、骨に探せるだけの目でしかない。そんな目って何だろう。…そうか、そう言う事なら、確かに目じゃなくて、骨でもなくて。「で、目を片付けた事に出来たかな。」何も片付けてない儘にならな。そうして、何も片付かなくさせるそっちとこっちを繋ぐものに、目は塞がれて、だろ？「ふん、だろ？って誰と何を分かり合いたいのかな？　そっちとこっちで挟み撃ちにすれば、それらしいものを追い立てられるとでも。先ずは、足元だな、足なんて黙ってるだけの、なら乾いた腹の底と一続きの。見ろよ、暗い色の二匹の蛇が絡み合うように黒黒としてるじゃないか。尽きない泥水の湧き立つ渦でもありそうにだ。でも違う。そっちの手が刃よりも鋭くこっちの腕の筋と肉を削り、こっちの手が刃よりも鋭くそっちの腕の筋と肉を削って、その儘ではずっと削るのを已められず、つまり凄いとも分からない程の凄い力って、そんな事さ、そうしてる間に止め処

なく流れた血の色の暗さじゃないか。違うのか？血はもう見飽きたかで、それを血とも水とも見分けられないか。なら構わない、血じゃない、沼の底に溜まった泥。でも石なんて溶けてない。石を殺した奴なんて、どの道もう居なくなってて、なら石は甦って、嫌でもその儘生きるしかなく。その重いのはな、血でもないなら、そっちとこっちの重なって、重なるべきではなかったろうに、なんて言ってみたって何にもならない、そんな。そんな重さの、空の下に動かないせいで、そっちだのこっちだのの温い騙し合いになったりして。なのは、それだけの事で。それより、刃だよ、刃よりも鋭いなら刃でもない。刃は無かったって？そんな言い換えも出来るのは、全く刃しか無かったか、刃よりも鋭いなら、刃でもない、そんなものしか無かったからさ。それはずっと無くしようもなく、どっちの手にもどっちもなく、手そのもののように携えられていて、ならそれって、手そのもので、その手が何を切り裂くか。花なんて、穢れた目に映るだけの、まやかしに決まって、切り裂きようもないし、切り裂くまでもない。花でないならそれは、切り裂こうとすればしただけ逃げて行くもの、然もズタズタに切り裂かれる儘の、これ見よがしな姿で。ならきっと、逃げる振りで却って、飽きもせずに切り裂かれに迫って来て已まないかの。そんなのを切り裂くなら、刃よりも鋭くても、また影の根から生えるようにでも刃で、欠ければ欠けたで厚みは増し、そっちとこっちの重なりよりも重くなって。

その一振りで、山一つ断ち割って、その裂け目で沼の水は全て呑み干されそうな。いや違う、いやそうであったにしても、そんなのはどうでもない。山なんて放って置いたって、木の実の弾けるように自ずと割り裂けるんだし。刃が何を切り裂くでも何が刃に切り裂かれるでもなくて、切り裂き切り裂かれる儘に、無くしても何故止め処なくも刃は求められてしまうのか、だな。しかし、何に？」「骨。」「な訳ない。筋と肉を削いで骨を剥き出すなんて話し、嘘の始まりに違いないんだから。」「だから、そんな嘘は暴いての、骨。」「そんなの骨じゃないし嘘に戻るだけ。」「何処にも戻りゃしない、骨を知らないだけさ誰も。骨は何処へも戻らないよ。それが骨で。刃はその骨を切り裂く為に刃で。なので刃も、姿形に係わりなく、何処へも失われたりしないしね。探さなくちゃならないものなんて何もなかったかな。そんなのきっと、来る日も来る日も来てしまう、ぼんやり見上げるしかない空の拵え事で。な事より、って言うか、な事なんだけど、その逞しい日焼けした腕に確と握られてる、分厚く重い、ただ凝っとしてるだけで山颪を黙らせる程に唸るように鋭い刃は、そっちだのこっちだのはただ利き手が右か左か位の話しで、その刃だけは手放せないのは知ってたかな。知ってるようで知らなかったなら、その知ってるようで構わない。知ってるようなら知ってるんだ。だって知らない事なんて、この空の下なら何も無い、何処を掘っても石ころみたいな根っこが出て来るように。な事より、な事よりだ

よ、骨。いや骨の事なんて知るも知れないも知れた事で。だってこれから行かなくちゃならないのは、刃を無くしてしまうかも知れない処で。だってそこでは刃なんて何が出来るだろう、何を切り裂いてみたって、光りに影を投げ付けるようなんて事。暗い刃の輝きなら役に立ちそうでも、切り裂こうとして骨を輝かせてしまうようでは、そんなで骨を幾ら切り裂いてみたって、却って骨の輝く姿が数を増し、転げてその輝きを撒き散らせば、辺りは光りばかりが弾けて、影を投げ付けようにも、何が影かって。刃がその振り立つ姿を晒せば、鋭い影を描けるとでも。そんなものは直ぐ様、骨の輝きに紛れてしまうも何も、その影が初めから骨より輝いてしまってて。だってそんな刃なんだよ、って姿ばかり刃で、それってもう、刃を無くしてるんで。で骨は、削り出しようもなくて、捨てようもなくて、無くなりようもなく、戻りようもなくて、そんな骨って何。すっかり忘れられるしかない。忘れられた骨程、どうにもならないものもなかろうね。石や根っこに混じって骨だって掘り出せる筈、だよね、なのに、骨だけは泥と見分けられずに沼の底に沈むならその儘で。行った先でそんな事を思って沼へ引き返しても、きっともう沼は、青を頽れさせて傾く陽を浴びて黄金色に眩しくて、温く脹らむ水の色も褪せ飛んで、広広と山颪が吹き戻って行くばかりでは、登る崖も見付からず。あのカサカサに真っ白だったのは、誰のもう一人な筈もなかったとあっさり諦めるにしても、腹の底に、褪せた泥の色に

嬉しそうに染まった乾いた蛇が、さて何匹やら、死ねずにカサカサと蜷局を巻き続けるなら、腹は空かず、食うには困らず、食えもせず、あれ程飽きもせず数えていた骨の忘れられたのまで疎まれて。でもう再び沼へは来ないだろうなと背を向けてしまえば、沼の風も森の静けさも追って来なくて、大きな石の一皿だけを、取り戻した忘れ物のように懐に抱えて行く先なら、その皿に決められてしまうにしても決まってて、でもそこへ行き着けるのはまだずっと先の事で、その皿にしても、食べられない食べ物を盛るしか使い途もなくては、水と血の混じり合わずに重なるばかりなように重いだけ。にしても、それで足が疲れて痛んで、水の湧く辺りを探して腰を落ち着ければ、誰にその盛られたものが食べられるかは、知ってる筈。その誰かが食べに現れれば、直ぐにその姿は見て取れて、二人揃って、そっちは食べられるし、こっちも食べる振りなら出来ようね。だってそれって、骨と目だよ、だって、石の上に静かに乗せられるなんて他のもので有る筈ないからね。で、そんな骨と目じゃ、それが何かなんて、知りようもない。でもそうでなくちゃいけなくて、その為に、石は殺しても甦るって思い起こしながら、石のその皿でなくちゃいけない。でも二人揃って同じように手と口を動かしたなんて、ほんの一時か、一時でさえなかったかも知れない、って腰を上げて、そうしてまた少し先へ進めて、見上げる向こうに、そっちの空が、さもこっちより高そうに、って事は、さも骨と目とをもっ

とあれこれ分かってそうに、（二〇一七年七月二十五日）

（陽の昇る…）

　陽の昇る丘の、そこから緩く下る、そのまたもっと東はなだらかに開けていて、様様に光りが弾けて賑やかで、夜も月や星の出るなら、こっちよりずっと明るい筈。で、来る日も来る日も、摘んだ花を束ねて背負って、そっちへ出掛けて行くんだけど、何の為かって？　だって手ぶらじゃ、そっちじゃ、どうにも手持ち無沙汰で、ただウロウロするばかりな姿は、我ながら見窄らしくて辛いだけ。陽を浴びて輝く花を背負ってれば、賑やかな中を楽しく歩き回れるからね。って事にしておこう、だって丘のその東なんて、陽の一日当たらないじめじめした険しい高い崖にすっかり遮られて見えないし、崖の下は、ドロドロの緑色の大きな沼で、丘の東まで行こうとするなら、這い蹲るようにして指に血を滲ませて崖を攀じ登るしかなくて。でも来る日も来る日もそうしてる、花の束を負って崖を越えてはいる。でもきっとそれで疲れてしまうのかな、丘のその東を眺め渡せる筈の何処かに倒れ込んで、目を覚ませばもう陽は、崖のぐるりと裏側の西のまた西へ傾いて、暗くならない内に崖を戻らなければ、だっ

て真っ暗じゃ足を踏み外して沼へ真っ逆様に決まってるし、って、さっさと引き返すしかなくなって。で慌てて踵を返すんだけど、帰りは同じ崖を這い蹲らなくて済むんだ何故か。道なんてないけど、崖の脇の傾く叢やら乾いた風の行き来する抜け穴やらだらだら下るばかりで狭くてそこを降りるしかない泥濘やら、崖を見失っても、薄暗い辺りをとぼとぼと俯いて。で崖が沼に迫って行き止まりな処には必ず、幹より太いかも知れない枝が俯いて巧く垂れ掛かって、そこを、ゆらゆら危いようでも早足で渡って行ける。ただ、それ、倒れた幹でも流れ着いた朽ち木でも同じだろうけど、水の上に架かって渡れるのって、木に見せ掛けた蛇なんだよって話しが、耳の底で常にざわざわしてる。良いよ、蛇だって。渡ってる間に拗ったり捩れたりして、この身を水に落とさなければね、そんな目に遭った事もないし。って知らずに呟いてしまったかな、で蛇に聞こえてしまったかな、足元は、もう、頭も尾もないけど見るからに蛇で、でも良いよ凝っとしてて呉れるなら、とは思うんだけど、引き返して遣り直そうかなって、ふと振り返ると、西日に紅に染まる暗い丘を初めて目にして、何だ丘こそ蛇じゃないか、それも寝そべる頭を幾つも並べて重ねて鈍く輝かせて、って、はっきり足元の蛇に聞こえるように声にした、とは思うんだけど、どうかな？ってのは、それっきり静かだから。で蛇に向かってって何とか言って呉れよってのも、どうかしてるしな、なんて思いながらだったんだろうか、使える物は

背負った花の束しかない、なんて小賢しい考えの浮かぶ筈もなかろうけど、もう花の束を纏めてすっかり沼へ放ってたんだよ、それも蛇に向かって、「あんた、遣る事を見てて欲しいんだろ、遣りたいように遣ってご覧よ。陽も沈むんだしさ。」なんて口走りながら。そりゃ聞こえたでしょ蛇にも耳は有るからね。蛇の耳って幾つだっけ、って思えば、どっちを向いても蛇がその耳を数え切れず欹ててそうで、なら蛇はこっちの言った通り、その遣りたい事の続きをまた遣り出すに決まってるんだけど、こっちも言った手前、ぼんやり凝っとしてる訳には行かなくて、蛇の何を遣るか、その見え易い辺りを探せば、何も見通せない大きな穴が目を逸らしようもなく迫って、そのどちらへ身を躱そうか迷ってしまって。その迷いのせいか、足元の蛇には身をするりと隠され、耳もすっかり何処かへ失せて、蛇を当てに出来ないんじゃ迷いは深まる、まぁどうにか沼に落ちずには済んだけどね。で、穴の右左のどちらかが来た道になって、どちらかが行く道になるには違いない。来た道へ行けば戻れて、行く道へ進んじゃ戻れない、きっともうそれっきりで。の、それっきりって、どれっきりかな。戻ればまた来る日が来るだけなら、戻れないのも悪くないとか。「っだよな！」なんて、ごつごつした石の重さを確かめるように、ずっしりした声をさも楽しげに浮き立たせるように穴へ放り込むと、穴の外のそっちからだけ匂って来るのは、きっと蛇共の涎で、それも薄っすら花の香りのするなら、蛇は

飽きもせず花を食いたいんだね。でも花を食らった蛇なんて、目をとろんとさせて、すっかり使い物にならないのは、花を摘む度にあちこちで見て来たよ。足元で蛇は白い腹を上に向け、捩れるのも煩わしそうに、花の香りの涎を垂らし、半ば草に埋もれて延びてるんだ、だらしなく片目だけ思わせ振りに薄っすら開けて。花を摘めば、足に絡み付きたそうに首を擡げはしても、片目さえ泳ぐ儘それっきり。なら、そっちへ進んでどうなるかも、凡そ分かるようでもある。って、どう分かるんだろう、例えば、こっちも花を摘みながらそんな蛇ばかりじゃ蛇に成っちまって、もう背中から零れそうな花の束をベロベロ舐め回してる内に、そっちもこっちもどっちがどっちか知れなくなって、腹を空かせて、それっきりとか。それとも周りは蛇だらけなら、口を開ける儘に滑り込んで来る小さな蛇らを呑み込んでれば、腹は脹れるかな。でも蛇に丸呑みにされた蛇って、ちゃんと熟れて呉れるんだっけ、却って腹を食い破られでもしたら、こっちの身は背から溢れる花の束に塗れてばらけて、次の花を咲かす為の肥やしかよ。それとも例えば、蛇に成ったりはしないで、延びてる蛇を掴んでは束ねて陽に干して、ぱっくり上に向けた口を拡げた儘骨と皮だけにしちまえば、それ、遠目には花の束と変わらずに、いや花の束よりずっと長持ちする、きらきらと陽に輝くのを見せびらかせる、身を飾り立てるには持って来いで。でも何処へも戻れないんじゃ、そこで身を飾って何になる？なんて考えるにも飽き

ればˋただ遠くばかりを眺め、でも遠くばかりじゃ、そこが遠いかどうかもあやふやになって、喉を反らし口をぱっくり開けば、丸ごと眺めを呑み込めそうで、でもそれって、そんな事の出来そうな程に、どうにもそこで、それっきりに身動き取れないだけって分かれば、その眺めを呑み込んだ身を、腹の中で裏返る眺めに呑み込ませるにはどうすれば良いか、そうだ、その眺めが蛇で、こっちがそれに呑まれるだけのちっぽけな花なんだ、なんて思い込んで、全くそれでそれっきりに、戻れない道の果てる儘に消え去るしかないとか。それもまあ、身の行き着く先は、花を咲かす肥やしかな。なら、やっぱり来た道を戻ろうか、なんて思わなくても、足はそっちにしか向いてなくて。でも、足が戻ろうとしたのは確かでも、その足の影が、罠に嵌まったかに穴の縁にねっとり絡んで先へ進めないかのよう。かのよう、だけなんだから進めるんだけどね、足の影なんて無くしたって、きっと何時かまた生えて来るよ、位に構えて。なんて、そんな積もりになってると、どうやら向く先は、穴へでも、戻る道へでもなさそうで、じゃその間の何処へ向かってるのかなって、見下ろすと、高い崖の縁から目の眩みそうに真下の深そうな淵が覗けて、見上げると、蛇の寝そべる頭を幾つも並べて重ねて輝かせる丘が空を蝕むように暗く間近に迫つて、見下ろしても見上げても、先へ進むのは酷く難しい事になりそうだなって。で真っ直ぐ前を見据えた積もりだったのかな、でもきっと真っ直ぐ前なんて何処

にもなくて、そのない処に、切れ長の目元の涼しい白い小さな蛇がすっと立って、目の横に付いてる筈の耳の見当たらないなら、声を掛けても聞いて貰えないな、とは分かるので、身振り手振りでこっちの事を伝えようとはするんだけど、さて何が伝わるやら、も何も何を伝えたいやら。いや、何を伝えたいやら、って何やら伝えようとするなら、一通り伝わりそうだね、伝えて伝わる事は。で、僅かに口元を微笑ませる白蛇は幾らか向きを変え、そっちへ身を横たえながらするする進んで。すると真下の淵と間近の丘は、何処か裏で繋がってしまうから丸まるように歪んで、また見通しの利かない穴ばかりが、奥からの重い風で膨れた岩のようにこっちへ押し出され、それだけこっちが狭くなれば、嫌でも白蛇は直ぐ側で、耳を通さなくても膚と膚を触れ合わせれば声は伝わりそうで、でもこっちのそうしようとするのを分かるのか蛇はそれに先んじるかに身を拗らせ、こっちの思い通りにはさせて呉れずに。そんな内に、こっちも重い身を横たえ、膚こそ触れなくても、まるで蛇と絡んで交わってるようだな、真っ暗じゃないんだから、これって何処かにきっと映ってしまってるぞって見ると、やっと穴の奥が薄っすらと見通せて、そこに確かに、蛇と組んず解れつしてるかの骨のように細い身が、でもすんでのところで蛇から身を躱してもいそうに、上を向いた小さな鏡に映ってるのが見付かって、でもそう見えてしまっただけで、まるで違うものの映ってるのかも知れない、白と白の絡み合いに

は違いなくても。なんて考えてる事を喉を震わせて、それを蛇の膚にも震わせて伝えると、ほっそりしてた蛇の身は、すっかり脂が乗って、その丸みを帯びたなだらかな白い身に促されるかに、こっちの姿も、その白い影のように膨れて、ゆるゆると、白蛇と息を合わせるかに、さも浮き浮きした振りでもして立ち上がれてしまう。その先の眺めを、仲良く肩を寄せ合って見詰める為かに。でも足元のこっちの影は、まだ骨のように細い儘で、立った白蛇の下には、何の影もなさそうで、そんなじゃ先の眺めなんて、例え見付かっても、ぐらぐら揺れて目を回すだけでは。ならそんなの諦めて、蛇にしっかり抱き付いて、その儘押し倒すように、揃って穴へ滑り落ちて行こうか。見掛けに寄らず蛇の膚は、少しもヌルヌルしてなくて、こっちの膚にぴたりと張り付いて、白い二つの肉はすっかり丸丸とした柔らかな一塊になって、でもその姿に遮られるかに穴は見失われ、なら鼻を利かすしかないな、穴の匂いって、忘れてたけどずっと前には何時も嗅いでたんだ、それも嫌という程。でもその鼻は潰れたように蛇のたっぷりな肉に埋もれ、それで却って耳ばかりが澄まされ、何処からか川の流れる音の已まないのが煩いばかり。なら川で良いよ、穴と川の違いなんて、まだ分かりようもないんだし。するともう足元は川なんだ、って当ては外れるばかりで、惑いながら水音に縋って川を探し回る姿は、疾っくに痩せて骨張った独り切りで、でもその影が白く丸丸と脹れてるなら、そこに肉付きの良い白

蛇の潜んでるのは見え易そうでも、そこもまた水音に塞がれて。でももう、水の音でもないかも知れない、だって川は真下に黙って流れてるんだよ。なら川が蛇ってのも有りそうかも、闇に白白と脹れて浮かぶようで。この身の白い影もすっかりそこへ投げ込まれてしまったようで。戻るには渡るしかないにしろ、どう遣ってそんな川を渡れるだろう。川が蛇なら蛇に尋ねるしかないにしても、それには蛇の声を聞く耳が要るけど耳は、もう聞こえない水の音にすっかり蝕まれ、使い途のない虚ろな穴でしかなさそう。でもそんな穴なら、どんなものも拒めはしないで、穴の中はびっしりあれやこれやで埋まってないかな。それらをせっせと掻き出して川に沿って一続きに並べて眺めると、そこには無いものなんて一つも無くて全て揃ってるなら、それらを残らず川へ放り込めば、必ず蛇に尋ねたい答えは返って来そう。で、そうして、で蛇はもう声を上げているのかな、ねでもこっちの耳が利かないんじゃどうにも、と苦し紛れに目を凝らすと、水の流れの溶けるように波立つ白い縁を、闇を小さく丸めてギザギザにしたかの、身震いもせず濡れっぱなしな小さな獣が、水に逆らって走り続けるのが見えて、ならそれを追えば川を遡れるとは分かって足を踏み出しても、流れは小さく丸まるように向きを変え変え、その度に獣の姿もそちらへばかり、ぐにゃりぐにゃりと曲がって、尻尾を呑み込んでしまいそうに曲がり切れなくなると、向こう岸がそれに釣られてこっちへ回り込んで来てるようで、直ぐに

それが見失われそうならと急いでそちらへ跨ごうとすると、己の尻尾を銜えた獣の姿の川縁へ沈み様、古い岩のような匂いの、様様な暗い色ばかりに覆われた分厚い胸板の大きな鳥が、態とのように激しく水を裂いて川縁へ突っ込んで、で獣を一呑みにしたんだ、直ぐに翼はただ風を切る刃のような儘に真上を向いて、崖の上までなんて一息に昇って、喉を一つ二つ震わせてるし。間違いない、獣を呑んでしか、きっと目はそんなに強くは輝かないから。そんな目で真下の川が広くじっくり見下ろされれば、淵は底無しに深そうで、もう川を渡ろうなんて心は失せる。投げ込むものもないなら、その心ごと川へ身を投げようと背を丸めると、何時の間にかどっさり背負っている、陽に干して骨と皮にしたぱっくり口を開けた延びた蛇の束が、下に向けた頭を越してするすると幾つも落ちて已まず、そのみっともない姿を嘲笑うかに、鳥の鳴き声が、その目よりも強く淵の上を輝き渡るようなら、闇の奥へもその輝きを追って行ける耳は、闇より奥深いかにすっかり甦ったに違いなくて。で、蛇の声だね、聞きたいのは。それは深い耳の奥にしか見付からない、って、耳を逆さに傾ければ、大きな穴の底からに違いない、束にされた骨と皮の蛇共のだろう、何も聞こえないよりも尖った叫び声が、「死なないのは蛇ばかりかって？　何一つ死んだりなんかするもんか！」って、後ろに底無しの淵を従えるように直ぐ前に一揃いにガサガサと突き上がり、それが独りすらりと身を立てて白くぼやける蛇の姿を呼び

込んだのかな、その小さな口から零れる声は、噛み砕かれたかに甘くて丸く。ならら、その口に含むのは何？ああそうか、きっと花は小さな実を付けたんだね、その丸くて甘そうな実の生る木なら確かに見付かる、ぼやけた白い蛇には付き物のように。その幹の酷く丸く脹れたずんぐりした小さな木は、葉も僅かばかりで、頼りなげに撓る枝と萎れた細い根を、すっと立つ儘の蛇のぼやけた身にそっと絡めて。でも枝も根も殆ど透き通ってて、ただ丸く脹れた瘤の形の木っ端が蛇の背に負われてるとしか見えなくて。でも他にないなら、蛇から受け取れる答えって、それしかないよ。燻んだ色の虫食いだらけの葉は見窄らしいけど、探せば、小さいけど真ん丸な実は、噎せるような幼い薫りを放って面白いように幾つも見付かる。瘤のような木っ端の捩れてるのは、この実を守って育てる為だね、きっと。でも枝も根も乾いてはらはら落ちて消えて、蛇の脇にぽつんとそれは、もう木っ端にさえ見えないなら、何だろう、獣なら足を生やして逃げそうでも、実が生るからには獣じゃない。転がる度に泥が粘って、泥が腐って、木肌は汚れるばかり、でも実の幼い薫りは変わらない、かな？でもどうやら薫りは、こっちを向いて呉れなくなって、何かを探しに行くみたいで、もう幼さに艶めかしさを加えてて、それに惹かれるものならきっと色色有りそうで。そうしてその転がる後を追って、広い野原でやっと捕まえて抱き上げると、するりと腋を擦り抜け、やっぱり獣だったじゃないか、って。でもその儘、

透き通った枝か根がこっそり生えたか、腰に張り付いて離れないらしい。いや違う、それを腰に留めてるのは、何処となく眩しい程にくっきりした姿の白い蛇で、なら蛇はずっと黙ってこっちの腰に絡んでたんだね。で、どうしたいの？取り敢えず、腐った泥をドロドロと端から落として行くと、木肌より先に泥の中に顔を出す小さな実は少し綻びて、ならそれって実じゃなくて蕾だよね、もう真っ白で、真っ白な花なんて見た事ない。花を摘んでたのも、色が欲しかったからだし。形だって、綻びる程に尖って行くみたいで花弁なんて開きそうになく。もう幼い薫りも消え失せ、腐った泥より際立って臭い匂いが、ただ薄ぼんやりと小さく、ふらふら揺れる蛇の額を撫でてるばかり。で離れたくないなら、それで良いよ。広い野原ならぐるりと見回して、来た道なんて直ぐに見付かる。でも歩けばそりゃ腰が重いな、って胸にしっかり抱き上げると、白蛇を巻き付けた木っ端みたいな獣みたいなそれは、凝っと固まって、素直に抱かれて落ち着いてるよ。ボトボトと腐った泥が落ちれば、やっぱりそれは枝も根も無くどんなにずんぐりしてても愛おしそうに蕾を付けた木で、その木に一つ切りの狭い洞（うろ）に身を潜めて蛇は、狭い額を出したり引っ込めたり。で見付けた積もりの来た道なんだけど、広い野原をぐるぐる回ってるだけなんじゃないの？って誰が？あんただよ、でも知らないな、あんたなんて、見掛けない顔だね、でも獣だってのは分かるよ、だってどう見たって白く乾いた毛はた

っぷりとふさふさしてて獣の姿だもの、でも顔が。尖ってるんだよ、蛇ばかり食って、顔付きも蛇に似ちゃったとか。きっと、そんなだね。それともそんなり獣ばかり食ってて、それで顔も体付きも獣そっくりに似ちゃった、さっきの鳥とかね、違うか。でも、何だって構わないさ。でその、抱いてるのは何？まさか蕾を付けた木だとか、木の洞に籠もるのが好きな蛇も居るよだとか、そんな在り来たりな嘘は言わないよね。いや嘘で良いよ、って言いたいとこだけど、木と蛇と二つじゃ困るんだ、蕾ってのも、蕾な訳ないんだし、だってそれ、もう知らぬ間に花は咲いて、莢だけになって、中身は空っぽで。ってのも嘘の内だろうけど、嘘でも、その二つを一つにしなくちゃならないなら、嘘しか無くて。
「な事より、あんた、って誰に呼び掛けたんでしょう。広い野原をぐるぐる回ってるなら独り切りで、あんたなんて居ませんよ、あんたって自らをそう呼ぶなら知りませんけど。なので、嘘ってのが嘘で、つまり二つも一つもなくて、それは。」と、もうこっちの抱いてた筈のそれを抱いているのは、その声のあんたで、微笑み掛けながら、ずっとそのあんたの可愛がってたものだったみたいにこっちへそれを渡して来る。じゃ、こっちはずっと何をしてたの？　誰が？って、誰が誰に？「な事より、」な事より、じゃないよ、あんたは間違いなく獣だけど、川に沈んださっきの獣なんかと大違い、それはあんたが蛇か鳥にしか見えないからで、違うの？いや、その違うか違わないかなんて、どうだってて

構わない。そんなあんたの何を、こっちは知ってるか、だな。だってこっちの事は、あんた、何だって知ってそうで、だって真っ白なんだもの、ずっと白い儘に、その白さえ失せなければ、心は何にも揺らがなさそうに。「な事より、あ私達って、もう結ばれて一つなんですよね、だって、それを抱いてるのは、あなた独りなので。私はそれをあなたに確かに渡したので。それで私は、ただあなたと結ばれて、声もあなたに掛けられて、届いて。」はあ？　届いてるのって声なのかな、耳を澄ます程、何かそれ、水の音か、それとも水に音を立てさせてる火の音さえ、透けて聞こえそうなんだけど。いや違う、だって水の音と火の音なんて聞き分けられる筈ないもの。な事より、何時から、白蛇と木っ端みたいな獣みたいなこいつはあんたのもので、それを何時あんたはそれをこっちへ渡して、何時からこっちは、これを抱いてるかだよ。いや、時を知りたいんじゃない、時なんて、どう遣ったって知れない。じゃなくて、今は確かにあんたもそう言うんだからそうだろうけど、こっちが抱いてるけど、これって誰のものなの？いや、誰のものかなんてのも、どう遣ったって知れやしない。なら、知れやしなくて却ってどうにも手放せないって事かな、手放せば、何が起こるかもっと知れやしないのが怖くて。いや、怖いなんて知れてる。ならきっと、そうか、あんたの話しが少しだけ分かったぞ。始めにこいつが居て、こいつのせいで、あんたはあんた、こっちはこっち、結ばれてるって言うのも、ひ

ょっとして、そんな事じゃ。違うかな。「違うも違わないも有りませんよ、も何も、違うって何でしたっけ。な事より、ぐるぐる回れる野原ももう、回り尽くしたみたいに燃え尽きてるかで、その僅かな灰の匂いを跨いで、私に導かれる儘のあなたの身は、灰よりは重そうでも花よりは軽そうで、その軽みが探してしまうのが花でないなら、だって花が実を結ばなかったのは、さっきご覧になった通りですもんね、ならきっと小さな蛇達なんじゃないですか、あなたがずっと殺して、数え切れず陽に晒して来た。その違うも違わないもないなら、あなたはずっとその束ねられて並べられて絶えないのを脇に眺めて、なので私に導かれる儘でも、己の足で進むかに足取りはふわふわと軽く。まるで水の向こうから火に呼ばれて来た風の一筋の上を迷いなく滑るかに。だって、ほらもう、あなたの抱いてるのは何？木っ端みたいな獣の影さえ見付けられずに、透き通った灰色の洞に籠もって、溶けた水みたいに凝っとしてるのが蛇なのかどうかって、疑ったりするのがやっとで。ならもう、その疑いだけは抱いてる積もりで、私に渡されたそれを胸に出来た透けた瘤みたいに抱いて、後ろを振り返る時ですよ。時なんて知らないなんて嘯いたって、あなたの行って戻れる処って、時の折り目の一筋ばかりで、そこを跨げばまた同じ時が。」な事より、いや、な事なのでかも知れないけど、こいつは見る見る汚れて行くんだけど、花だの実だのが嘘でも、その嘘もまるで使い途のなさそうに。こん

な瘤を胸にくっつけてたんじゃ、こっちも汚れに塗れちまって。なら、何処へ戻るもあんたにも来て貰うしかないよ、少なくとも、こいつの汚れをどうにかする術でも教わるまでは。それとも、あなたがあなたで居られるのになくてはならない、「その汚れが、行ったり来たりだって、諦めれば」」それ、あなたの時の、変わらない行ったり来たりだって、何がどうなるかなって。こっちが今言おうとしてた。この儘諦めちまえば、何がどうなるかなって。

だよ、あんたはさっきからそこを動けなくて、それって後ろに何か隠してるからで、いや違う、もうずっと見えていたか却ってあんたの姿がそれが見えるようにしてて。にしても汚れは胸から溢れて泥みたいにドロドロと落ちて足元に拡がって、その足元なんだけど、隙なくすっかり骨ばかり、それも頭の形からどれも鳥の骨だって分かる、あんたがしゃぶり尽くしたんだろうね、あんたしか居ない、鳥を襲って食い殺せるなんて。「んで？」敷き詰められた骨が見る見る汚れに塗れて、足元はぐらぐらして来て、僅かに花の香りのするなら、汚れって、蛇の花を食って出した糞に違いない。にしても、もう立ってても居られず、「んならその儘倒れて、流されて行けばどうでしょう、あなたにずっと見えていたと言うそっちへ。遠ざかるようでも輪を描くように行き着けましょう、だって、」他に行ける処はないので、って言うんだろ、何処へだって行けるさ。でも糞になった花って、次の花の肥やしかも知れないなら、その流れ込む先を

見届けるのも悪くない。なんて甘い考えが徒か、洞から噴き出す汚れが凄過ぎて前も見えないんじゃ、何処へ向かってるやら。「こっちですよ。」と聞こえて見えて来るのは、蛇の食った花の糞の渦巻いて流れ込む辺りに四つん這いで、それを嬉しそうに啜るその獣の姿で、その西日の輝くような真っ白な儘でも黄金色の毛並みが、分厚い舌がずるりと糞を舐める度にギラギラ波打つのが目に耐えられず、捨てられるならと抱えた洞を放り出すと、足元から汚れは退き、辺りは乾いた骨が白くびっしり続いて、洞を放った弾みからかこっちは生白い丸裸で、共に岸辺に打ち上げられたかの大きな鳥の骸の暗い色の更に暗い色の皮を剥いで頭から被るとぴったりで、その鳥の耳を通して数知れない骨の音が刺さるように膚にヒリヒリと伝わって、少しでもその痛みの和らぐ向きを探して歩き回っていたか。そうして、骨の敷き詰められるばかりな平らな中に、縦長の裂け目を押し出し剥き出して誇るかの白い岩の尖って独り突っ立っているのを見付けて、近付けばそれはこちらと同じ背丈程のすらりとした石で、音は全くその石の裂け目からで、骨など何処までもまるで黙り込んでいて石の音ばかりが際立って耳が引き裂かれそうで。そうして力尽くで剥ぐように脱ぐしかなかった鳥の皮は、萎れた花弁の一片のように、石の根元の裂け目の下に続く深そうな穴に吸い込まれ。覗けば穴は奥へ深く広がりながらも、積み上がる大きな卵で塞がって、その内の幾つかの、殻を割って嘴を出した雛の首を次次に

引っ張り出してる、丸丸太った背も腹も色取り取りのギラギラした鱗を纏った蛇が独り、穴の主のように懸かり切りで寝返りを打ち続けるかに動き回っていて。またギラギラか、と覗くのを已めると、白い尖った石にも目に残ったギラギラが映りそうで、とは言え、そのせいか、石の音は已んで、ならこちらから静けさに付け込んで、こんな穴など覗かなかったと声を掛けたいにしても、こちらとも石とも同じ背丈の真っ白な痩せた鳥が石の脇に立ち、後ろからぐっと寄り掛かって石を包むように覆うその翼が石を擦ると、骨を粉に擂るようなその微かな音で、喉は塞がれ声は詰まって。で、ゆっくりと石を上へ下へ擦る縦に長い白い翼を眺めるしかない、その白が、見知った白と違って、白い儘に酷く汚れて見えてしまうのは何故、きっとこれは白じゃない、少なくとも初めからは白じゃない、汚れて汚れて、色という色を打ち消して白としか見えなくなった、汚れ果てた末にしか現れない、そんな色に違いない。それともそんなこれが全くの白で、これまで見知った白が、まだ何の色も塗られていない色と色の隙間でしかなかったとか。それともどちらも白なら、他のどの色より幅広く奥深いのが真っ白で。と見るなら、この翼の白は、長い時を掛けて、凡ゆる白を塗り込め消し去りしたようでもありそう。なら、つまりは時ですよね、その白の白さは。でしょ？「女はどうした？」ああ、あの獣、女だったんですか、それで糞になった花など貪るって訳ですね。「若い雌の匂いはどうだった？」

あれで若かったんですか、まあ少しも老けてはなかったですね。時を止めたみたいに、てのは軽口ですが…。そうかそれで結ばれるだの一つになるだの、独りで言い出すんですね。「あれはどうした？」あの洞、捨てて来ました、花の糞ですよね、その汚れがどうにもならずに。「抱いてる儘じゃないか。」確かに空の洞を抱えていて、腰や股の間をちょろちょろ這い回ってた白蛇が慌てて中へ滑り込んで、でも、水を隔てた遠い火の音が、汚れの溢れるのを抑えているのかな。「っ水の音と火の音を聞き分ける奴なんて居るか？」。居ますよここに、と言い掛けて、汚れに混じった火を蛇がせっせと舐め取って、それでもう、さっきみたいな酷い事には成らずに済んでる事にして。で問いが途絶えては、またた真下の穴が、影の差すように心に懸かって目を落とすしかなく。か細い叫びを上げて身を食い千切られるのを痛がる雛の尖った目が、さっきの獣の女にそっくりで、鳥の卵が、まさかと思いながらもあの女の産んだものに見えてしまってどうにもならなくて、そうなのか尋ねようと見回す辺りには誰も居なくて、なら誰と話していたのかなと呟いてしまえば、石の剥き出しの裂け目を更に力尽くで押し開き、穴へ踏み込んで、中で雛を食い続ける大きな蛇と組んず解れつ、勝ち負けの付かない戦いに明け暮れるしかなさそうでも、それを映すに違いない西日を受ける丘に頭を並べる蛇の目が、疲れ切って酷く眠そうなようでは、どうなのか。と躊躇う内に、穴の中の蛇の鱗の形が崩れて獣の白い毛が這

ように生え始め、それでも蜷局を巻いて、その毛は卵の殻の割れ目に擦り付けられて毟られるので、姿は辛うじて蛇にしても、雛共の嘴に鱗の裏まで啄まれては、さっさと獣に姿を変えたかろうな。などと、それを眺めて居る者の姿を、まさかそれは映しているのでは、と、そんな我が身など間違っても振り返ってはならないと目を上げると、鳥が石を後ろから抱き締めるのか、石が鳥の毛皮を纏うのか、きっとどちらでもないのは、鳥と石は一つに成って、それで鳥の儘でも石の儘でも居られないようだからで、ならそれは何だろう、と目を凝らす程、見る見るそれは高く聳え、見掛けだけなら鳥のすっと立つ形の大きな岩、ただ鳥の腹は縦に大きく深く裂けて、鳥の頭と折り畳まれた翼の他は、ただその裂け目ばかりで、その裂け目の奥はまた裂け目で、より深い裂け目が奥へ奥へ、より深い程その深さに犯されるかに柔らかく捩れて、また奥へ続くようで、その裂け目さえもただ見上げるしかなくなれば、その真下の穴は縮むばかりで、狭過ぎるのか、蛇も獣も雛も卵もその影もなく、微かに匂うなら、花の糞とは違うと分かりながらに、花の糞の匂いにそれを準えるしかないか、いやそれともそれは、萎れた花弁の一片のように穴へ落ちた鳥の皮の腐り果てた匂いの僅かな残り。そんな匂いも高い岩から降りる冷たい風に紛れてしまえば、その穴は、この胸に抱いている殆ど重さもない洞に違いなくて、今にも透けた枝か根が生えそうなら木の洞でも構わないにしろ、中にはただ静かに水が

張られ、その僅かな汚れで、それが白蛇だったと分かる。いや姿形に惑わされずに、その僅かな汚れが保たれさえするなら、今もそれは白蛇の儘に違いない。そして、そんな洞を抱えてでしか何処へも戻れる筈もなく、水が澄んだり酷く濁ったりしない為に、来る日も来る日も必ず水の蛇に与えなければならない餌が何なのか、そのぴちぴちと跳ねる姿は、そそり立つ白い岩の匂いたっぷりの重い風に吹き下ろされる耳の奥に、確かに冷んやりざわざわとこそばゆく、(二〇一七年八月二十四日)

(何ですかそれ…)

何ですかそれ蛇ですよね。」「ですよね。」「その、ですよね、って、じゃないですよね、って聞こえるように言ってますよね。ならじゃないんじゃないですか、いやそう尋ねたところで、じゃないって事でもなし、そうも出来ないって、大凡決まってますけど。だって、どう言ってみたって聞こえるようにしか言えないって分かってて、それで、聞こえるように聞き取れる筈もないって分かりながら言ってますもんね。ですよね。」「ですかね。」「その、ですかね、って、じゃないんじゃないんですかね、って聞こえるように言ってますよね。っ

て、それ蛇じゃない、って、言ってるんですか。それとも蛇じゃないって言えないって、言えないように言ってるんですかね。蛇じゃないじゃないかも、っても、言えないらしい儘に。」「言うだけなら言ってるじゃないですか蛇蛇。それに、蛇じゃないって言ってみたって、その言われた蛇じゃないだけで、蛇の他の何かじゃないってそれを言える筈もないなら、だって蛇でしかこのこれ、話しに出来ないんで、じゃどう遣ったって蛇じゃないなりに蛇でしかないですよ、そのようでしかない儘にどのようにかね、そんな話しでしょ、初めからずっと。」「ずっと？」「いや、ずっと、は話しの勢いに任せてしまって、つい。」「それ、話ししかないって事ならね、いや話ししかないんだけど、話ししかないって話しにしてしまったら、何の話しも無しになり兼ねませんでしょ。」「で？」「ま、なかった事にしましょ、この遣り取り。」「今更どう遣って？」「も何も、だって、話しの他に何もなくて、話しが無しになるにしろならないにしろ、その話しが蛇の他に何もなくて、それで蛇でないって事なら、それこそ何もなくなってて。で話しにケリが付くなら、そのケリに砂でも掛けるように蛇はきっとそっちの直ぐその辺りへ這い出して、って話しが始まるのを、何ですかそれ蛇ですよね、って尋ねられますかね、うっかりとも、だってもう話しは、そんな蛇に付いて来られずに、って話しを蛇が振り返るなら、誰かの蛇の話しじゃなくて、蛇が何かの話しを、でも誰かなんて蛇は知る筈もなければ、誰に

話せるでもないその話しは、その儘蛇に呑まれるかして、それを呑んだとも知らない蛇が、それとも呑み損なった蛇が、って事なら、蛇の蛇の話しかなくなってそうで、それとも呑み損なわれるなら、そんなの初めから蛇の腹が刷いた塵か何かの話しだよって、でしょ。って、そう聞こえる耳には、そうとしか…。ですよね。」「そうとしか…、って？」真ん丸でたっぷり重そうな花が三つ並んで、速い流れを少しも揺らいだり沈み掛けたりせずに下って行ったんだって。間違いない。遠目にもくっきり映るんだから、そりゃ見た事もない大きな、鮮やかな色の。と聞かされて、唆されてるのかなとも思いながら、それを一目見ない事にはと駆けて行くにしても、山の背の切り立つ崖を見上げながら、足は抜け道一つなさそうな谷底へ向けて滑るばかりでは。とは言え、速い流れって、この辺りじゃ、そこしか思い当たらないんだから、きっと真っ直ぐそこへ向かってるさ、なんてのんびり構えたせいか、足はどんどん重く、速い流れの見渡せる処なんて遥か高くで行き着けそうにないなら足任せと、低い山襞へ逸れて行く先は、そこだけ草の刈られ、傾いて尖った形に開けていて、太い蔓を絡ませ合うくねくね幹の捩れた木が独り狭そうに立ち塞がって行き止まり。花を摘んで呉れませんか。そんな声を聞きたかったか。花ですか、何処？と見上げれば見上げただけ、木の花は蔓の曲がり拗って輪になり掛かる中に収まりたげに大きな身を縮めるかに咲くのが見付かり、でもどれも蔓に遮られて手は

届きませんし、ヌルヌル滑りそうでとても登れそうな蔓でもありません、どうしましょう？と言い終わらない内に、ここからは傾く陽は見えなくても、その焼け焦げた光りを真横から斜め後ろに受けて、蔓の輪の中は暗いのに、花ばかり脂ぎるようにギラギラ光って、今にも光りの脂が滴って落ちて来そうで。でも摘んで呉れと言われたからには、そうしないではこの行き止まりを抜けられないと腹を括って伸ばそうとする腕にも脚にも、先のほんのり赤い産毛を生やした細い蔓が絡んで。にしても、動かせない訳でなく、動かしてしまえば却って止めるのも儘ならず、そうして愈愈身は蔓と蔓の中へと傾いて行くまでは良かったにしろ、いきなり首に蔓が絡んで息を止められた。で、「花でも蔓でもない、蛇の話しですよね、これ。」「ですかね。」「また、ですかね、ですか。さっきの繰り返しなら乗りませんよ、繰り返しでなくったって乗りません、もうその話し。」「えぇ？　繰り返しか繰り返しでないかのどっちかですよ。どっちも嫌なら、息を止められる儘か、それも嫌なら舌でも噛みましょうよ。」「そんな話しにも乗りませんって。だって、花を摘んで呉れませんか、って聞き覚えが有るでしょ。他に聞き覚えがない程に、静けさにすら。なら、その声は繰り返されて来たんですよ、耳の中で。で、その声を外に聞いたのが初めてなら、もう繰り返しでは済まなくて。で何で花が摘まれるんでしょう、その見事に咲いた様を妬んでるんですかね。それをズタズタに噛み砕いて唾と混ぜて土の中

へでもぺぺっと吐いて虫に集らせたいんですかね。でも花を恨む余りに身が竦んで、通りすがりの誰かに頼むしかなくて。蔓に絡み掛かりながら、ずっと震える身を隠すようにしてて。それってもう、蛇の姿でないなら何でしょう、って、それはあれこれ色んなものも思い浮かびそうです、長いものなんて幾らも有るし、花の種の行方なんて果て知れないですからね。でも決め手はきっと、大きな花の脂ぎる姿で、その脂に舌舐めずりしそうなのって真っ先に蛇でしょ。なので花はそれでもう蛇に挑み掛かってるようなもので。や、少し先走ってしまったかも、蛇の姿なんてまだ何処にもない訳ですし。」何処から帰って来たんだっけ、山からでしかない筈が山の姿も色も匂いも浮かばない。ならそこは谷底だったかな、その何処も腐った花の僅かに匂って、抜け道一つ見付からない。見付からない儘帰り着けたんなら、見付けられない抜け道を抜けたんだ、そんな事が出来たのは、身が独りでにくねくねと細く拗って。いや違う、抱いてるのは何、空っぽな大きな卵みたいな、少しだけ濁った水が満ちてるのが透けて見えて。なら少しも空っぽじゃないのに、何で空っぽみたいなのかな。にしても、その空っぽみたいなお蔭で、道を抜けられたに違いない。だってこれ、何の匂いもしないからね、きっと花の匂いの移るのが嫌な余り、谷底なんかに居られずにどうにも浮き上がるしかなかったんだ。でもそれがもう、空っぽみたいでもない、小さ過ぎて見付けられない破れ目を塞げずにか、僅かにも花の

匂いを移してしまったに違いない、見る見る濁って、水の儘か固まったかも見分けられず、でも重さも増せば、行き成り石になってしまった大きな卵としか。空っぽに濁った水を満たしただけかも知れない儘に。振るなり叩くなりして音を鳴らせば？いやそんな事して、何の音もしなければそれで済むけど、何か聞き取られでもしたら、その音は周りの音に寄って集って吸い出され、卵の形なんて見る見る引き裂かれ、中のものも外の音の餌食にされてしまいそう。それ程に周りは、隙あらば隣の音を食い殺したそうに、飢えに耐えられないかに捩れて尖って、何にでも噛み付きたそうな口を開けた音ばかりがぎっしりで、弱った音からガリガリ齧られて行く音さえ、耳の直ぐ側で喧しい。なら黙り込む石の卵なんて、やっと手に入った有り難いお宝かも。その黙り込む儘、そっと奥に隠して置くに限ろうね、で何も起こらないならそれはそれで、でしょ？ってそんな奥なんて有りましたっけ、それってもう卵の形を崩さずにこっそりゆるりと蜷局を巻く小さな蛇で、それが目を付けたのが、その奥で、ならそれがその奥って、卵の形から自らを解き放った蛇の姿そのもので、そりゃもう、そこに音という音が食らい付きましょうね。で苦しげにのたうち回るにしても、蛇の肉を食いに来た筈の音は蛇の膚にじわりじわりと潰されて、ドロドロにされた音に塗れて暗く光る蛇の身は逃げるのも嬉しそうに奥へ奥へ太く長く伸びて行く、奥と言うならその先こそが奥なんだけど、きっとその先には何の音も

しなくて、蛇はその音の途切れる境にひたすら身を預け。そこで、音が擦り切れて音でなくなる、その音限り限りの、音でなくなる間際に酷く甘く香るかの音か、さも音か、な辺りに誘われる儘に舌を這わせれば、身は、うっとりする程厚くて緩やかに影を落とす花弁から、それに続くその影を映して濡れるような花弁と花弁の狭い間へと滑り込んで、その奥の蜜を僅かでも吸えたかと思い惑うだけで、って、毒に痺れるかに震えは止まらない。蛇の肉を喰らって生きてる花なんだ、って、今更分かっても遅いのか、それともそうと分かるなら、こちらから身を捧げれば、花に喰われる儘に、蛇とも花とも見える姿に、身を窶せようか。喰われながらに花の姿に滑り込んで、花の息でも吸っては吐けば、それは蛇の血を巡って、その血は突っ立つように増えてその勢いで花の姿も、蛇に似て行くしかなくて、とか。も何も、蛇の姿と花の姿って、どう違うんだっけ、って、うかうか言えてしまえるなら、何でも有りじゃないか。でも蛇と花しかなければ、それっきりだけど、って話しかな。話しなんだよ、花しかないって、目が醒めたろ、花の話しが花、って、そう自らに言い聞かせるしかない蛇なら、そんな奥なんてさっさと食い破って、そのまた先へ尖った頭を突っ込む先に、やっと、ずっと水の儘入ってた空っぽの、その外を生まれて初めて眺め渡せて、その目の、疵一つなく真ん丸に、春の陽に薫る乾いた風に冷たく晒されながら、ぴんと脹れて張り出されるのが嬉しくて、その真ん丸な目を外の眺めに見せび

らかす為に目を開けてるような。そうして外の眺めを全て映し取って、色と言う色を目の中に浮かべて並べれば、そっくりそれで咲き誇る花の振りとかね。にしても、そんな花の姿などなかったかに、どの色もひらひらと眺めに戻されるかに過ぎ去って、その透き通って行くばかりの目に映り込んで来るのは何。何って、何の色も映さないなら、きっと影ばかり、の影ばかりって、どう見えるんだっけ。見えたところで透ける影ばかりなら、どう見えようと知れてるって事。って事だけを見て取ろうと、前にのめる身一つが、見えると言うなら見えるだけ。ん？身一つで、その影さえ見損ねて何の姿が浮かぶ筈もないのに、って、その何も浮かばない辺りに辿り着くだけでは。でも辿り着けたなら身一つは、その身一つの他になくて、でもその、一つの他にないのが、果たしてどうか。もう一つの、一つの他にない何かを探すしかない。そうでないものは受け付けない、だって一つの他になければ、って頑なに身を守らずには居られない、だって一つの他にないのって、その、ない他ってのが有っての、なので。つまりもう一つのって。でそれ、見付かるの、見付かったの？ぐるり回って、この身一つが見付かるだけなんじゃ‥、見付かると言うのなら。なら見付ける事じゃないんだ。って事は見付かったね、でもそれって何？も何も、それって何？って、その何が何になるの？だってもう見付ける事じゃなくて。なら身一つも見失ってて、ただ凝っと、知らない何かに見付けられるのを待つしかない

とか、それも怪しいなって直ぐに分かりながらに。んで、でも何を見付けて貰えるの？身一つも見失ってて。って開き直るしか。「花の話しをしましょうか。あ、間違えた。岩の話しだった、切り立つ崖の姿の。でもどうして間違えたんだろ、でまたきっと間違えてしまいそうで。その、崖になって聳える突っ立つ岩を花と言い間違えるのは、どうしてかなんですけど。」「蛇の身を巡る血の話しだからですよ、どっちも。何も浮かばない辺りに辿り着いて、そこからなら見上げられたでしょう、水に取り残された水底のように暗いだけが、その高い向こうに、崖の上に、真っ黒か真っ白か孰れにしろ何の色も浮かべない大きな花を、一目に数えられるばかりちらほら咲かせる大きな木が、痩せ細った炎のそっと寄り添えば幻の炎の次次重なり熾るような形に、分厚くふわりと。その根のどれ程深い事か、その根の深さと強さが、その崖を切り立つ儘にしてるって、でも元はと言えば、その根を巡らせてその根を巡ってる蛇の血の業だって、決まってるじゃありませんか、崖の真っ直ぐなような拗るような姿からして。よく見れば、崖の何処も彼処も角を幾つも生やすように刺刺した岩より硬そうな根ばかりで入り組んで、岩膚なんて根の影に暗く隠れて、ジトジト湧き水を滴らせてる有り様で。そんなものを見上げて、何が欲しくなるかって喉を潤す水の一雫でもって唾を飲み掛けるばかりを嘲笑うかに、木の高い枝先の目立って大きな花の花弁の一片だけが、風なんてないのに風に誘われる振りでもして、

影を断ち、鳥の翼のように風を拗らせ、その傾き掛ける風をくるりと纏わらせ
れば、その独り放れ、ゆるゆる回りながら舞い落ちて行く先を、凝らした目を
暗いばかりの中に突き刺してでも見届けなければ。それも必ずそこは、流れる
水のたっぷりと溢れ、どちらへ流れるかは水の重みの思う儘のような。で、そ
んなそこは見付かったんでしょうか、分かる筈もない儘に、花弁の一片は、何
処へか水に乗って流れる姿を晒して、乾き果ててもそれを追うしかない目の辿
り着くのは、鳥も知らない山深い花の盛りの時で。何の色も浮かべない真っ黒
でも真っ白でもないなら、きっと灰色の、か灰色でも少しもない、一つとして
同じ大きさも形もなさそうな花花が、崖の縁の、それまで枯れ枝ばかりだった
せいでか闇に溶けていた低い木木の、糸のように細い枝枝に咲き競い。にして
もそれらが、真っ黒か真っ白かの大きな花を咲かせる木が、どれ程それだけ飛
び抜けて高く空へ伸び上がっているかを際立たせる事の他に、その匂いさえ何
処へ届けるも出来ないと分かれば、同じ形の小さな花ばかりの怯えるように重
なり固まって咲き連なるようでしかなくなって、その姿の儘に花の時を終えた
かに、それらは、崖の縁の端から端までを長く身を伸ばす蛇で。で初めて、崖
の上を少しも揺らがず崖の縁に沿って真っ直ぐに戦ぐ風が知れましょう、その
蛇の膚を撫で摩るので。その撫で摩られた膚が、灰色か灰色でないかなど忽ち
に消し払って、色取り取りにさざめき立つように輝くのを已めないので。で、

抱いているのは何、空っぽな大きな卵みたいな、だって、その輝く膚の蛇の色の儘を映し取れてるのって、それしかなくて。でその色を目に映すしかないなら、それと引き換えに光りを奪われたかに、辺りは、空も崖も足元すらもどっちか知れない真っ暗で、その真っ暗な何処かへ、色取り取りの空っぽが滑り出るなら、それを追うしかないにしろ、暗過ぎて、その追う足も見付からない。でしょ？　それって、あなた、蛇ですよ。いや、あなたが蛇だなんてんじゃありませんよ。あなたはあなた、蛇は蛇でしょ、あなたがそこに留まる限りは。でも何が留まれますか、その空っぽはもう卵の姿なんて疾っくに捨てて、平べったく拡がるばかりで、扇のように誘うように招くように。それでも破れた卵の姿を探してしまうなら、それは、ほら、崖の底に見付かりましょうね。だって崖の底って、破れた卵の形ですもんね。ずっと、その見て見ぬ振りをしてたのも忘れて。で、その破れ目の奥を覗けるなら、きっとそこからしか覗けない一日陽の当たらない大きな沼が、幾重もの土か石に押し被されて埋もれそうな儘にも辛うじて何処までか見通せない先まで拡がってて、山の水も川の水も一雫すら含んでなさそうな、少しも透き通りようもなく初初しい乳色の水面には、腐り掛けの大きな花弁が、行き着く先を見付けて安らうように褪せて暗い色で幾片も浮いて横たわって代わる代わる寝返りを打つようで、あなたが蛇ならば、きっとそれらへと絡みに行かずには居られない。でもその儘あなたの目は霞ん

で、沼が土の下にぼやけて見失われるようなら、すらりと身を立てた蛇がすっと卵の破れ目から小さな白い頭を出し、額に遠い空の艶を細く清かに舐め取るように映し様、崖をするすると登る姿に、あなたはうっとり見蕩れて。」何時ものの山からの帰り道だったさ、春の陽に照らされてさ、傾いても春にしては強い日差しのせいで、ギラギラ輝くようには眩しくても、沼の畔の草原を、それは暗さを求めるかにくねくねと湿って。懐に山で拾った小さな卵を入れてる筈だけど、違ったかな。と、湿った懐に入れた汗ばんだ手は何も掴めずに、でも何を無くしたとも思えずに。それは、そいつは、いそいそと左の肘に絡まってるんだ。嬉しそうに瞳を輝かせる小さな白い蛇に成って。って事にしておこう。だって左利きだもの。なら蛇だってきっと左利きなんだね、って呟けば道は逸れてしまう、その左利きを確かめたさに。なら、それには先ず、速い流れを下る真ん丸な花を見付けなくては。そのたっぷり重そうな、きっと見た事もない色を見て取れれば、左利きの活かし方なんてすんなり教えて貰えそうで。な事で、ちょっと考えればそれ、まるでお笑い種だけど誰を唆したかな、私達はすっかり二人連れで、小さな足の縺れそうに歩くもう一人の肘には何も絡まったりしてない代わりに、その腕はたっぷり脂が乗って血筋の浮くように白くて、然もその血は乳色で、その柔らかい指先は、どれ程のどんな花をも、そっと抓んで摘み取って来たろうね。って思わされてしまえば、蛇にも増して、その左

利きの手捌き腕捌きも大いに当てに出来そうでは。しかしそうなら却って、花がそれを恐れるせいじゃないかな、花の下る流れを見下ろす処へ行き着けないのは。なら、連れを捲くしかないにしても二人切りではどう遣って、益益緊くこっちに身を預けて来るなら、そいつの左腕を切り落とそうか。その為の刃の形が色色に頭に浮かんでは振り回され、遂には刃ばかり重なる重い頭ごと振り回されて、振り返れば、そいつの姿はなく、こっちの右手に握られてるのは、長くて震えそうにさえ幅も広い反り返った在り来たりに白い刃に違いない。まるでくらくらした頭で居たこっちの知らぬ間に、そいつの左腕を、こっちの左腕が白蛇に操られるように捥ぎ取って、その捥ぎ取られた左腕が、その右手の長い刃に姿を変えて、その震えに微かに唸ってさえいるようで。まさか、そんな考えは直ぐにも振り払わなければ先は危うい、と力任せに刃で風を切る程に、その刃の色は、消えた左腕の脂の乗った白そのもので。右手で握っているのが拙いんだ、そうか、と左に持ち替えようとされる刃は、いきなり目の前を鋭く戦ぐ薄っすら花の香りの筒の形の風に巻き取られるように、縮んで細く撓って、濃い乳色に鈍く光って、それが真っ直ぐこっちの目を射れば、左の掌にちくりと刺さる痛みを残したか、何処かへくねくね転げるらしくても、それを追える目はない。なら、どんな目が有るか、その目を探す目を探すのは、目でないなら蛇、と言ってその姿は、その影も揺らぐ苦し紛れの。って何が？「扇のよう

な空っぽな中を脇目も振らず力任せに進むんですよ、平べったい空っぽをどう遣って行くか、ですって。平べったさに合わそうなんてしない事ですよ。空っぽの平べったい程、嵩張るどんな脹れたり尖ったりするものも放り込める、そしたら自ずと先をこじ開けられる、って鼻息でね。でもきっと力み返って、空っぽに額を打ち付けるようなばかり、でもそう分かるならもう、扇のような空っぽなんて、すっかり見失えて、孵った卵にまた帰るかに、卵の殻を探す身の重さに纏わるのは、甘く香るかの音か、さも音かで、その誘われる儘に、蛇を喰らう花の在処の知らされる筈が、もう潰れて硬く破れ目を閉じた卵の殻に取り縋って、膚を傷付けられるばかりと来ては。」「そう。そんな姿って蛇ですよね。蛇でしかないですよね。苦し紛れどころか、花の香る水に流れる影の何処までも引き延ばされるかに易易と。でも易易過ぎも、蛇を却って、蛇でなくしたくさせてしまうかな。そんなで、己の姿から逃げようとするのが蛇かどうかを確かめようと、己を見失うのは蛇でしかなくても、その蛇の己を疑い始めたのが、蛇であるかどうかはどうやら知りようもなく、引き延ばされる影かにその流れを探しても、何の花の香りにも水の匂いにさえ予め行方を眩まされたかに、何も見付からないとは易易と分かるのが、それでももし蛇なら、それは蛇で、と言えるにしても、」花を摘んで呉れませんか！って、聞こえなかったなんて言わせるもんか、待たせるにも程があろうに、まるで何もしないとは。

いや、だって花は…、って花？花にそう迫られてるの？だって花なら蛇は喰われて、有るかないかの血の艶でも花弁の奥にむっつり映すのがやっとで。そんな蛇に何の声も聞こえる筈はなく。お前が花を摘むんだよ、でなきゃ川に流れないじゃないか花。なら蛇は…。蛇？お前蛇を見たのか何時よ、それ。何時って何時って時なんて無い、その時のない中を声だけが滑って行くのは、蛇。そう言ってみるしかなくて、でもそう言えたのかなって、でも滑るのって、流れる水に延びて行くばかりに見失われる影でしかない、蛇の姿に似せはしても、その影の影もないならもう、蛇の姿形も、初めから無かったみたいに、その影を追うかに。なんて、誰か言ってませんでしたっけ。で、その影もない影は、無かった蛇の姿形を従えて何を追うかなら、花。きっと、たらふく蛇を喰らって眠たげな。ほら、見えたんじゃないかなやっと、そうして花を三つ並べて流して行く速い水の、春の陽に解けた筈が落ちる程にまた凍るかに冷え冷えと、どっちへ落ちて行くかが。音か、さも音か、の甘い香りは危うそうに水面を蹴るかに傾く渦を巻いて、回り込むように崖の向こうへ逃げて行く、その後をそれは追うに違いない、でそれきり見失われて再び水に浮かびはしない、でなら話しにしか出て来ない花は…。崖の向こうだって？崖に向こうなんて有るもんか。拡げて飾られた扇のように平べったい裏へ回れば空っぽで、何が放り込まれようと音も立てず直ぐに闇に溶けて、いやお前何を放り込んだ積もりかね、

その何を見通す目も無くしてだよ。放り込まれてるのは、お前の身一つじゃないか、空っぽにさえ疎まれて。って言える位な事で、放り込まれても居まいな、影もない影に従うばかりに。「そう。そんな姿って蛇ですよね。なら間違いなく卵は孵ったんですよ、こっそりとも恙なく。何処から卵は出て来たか、ですか。崖の底から這い上がったんでないのなら、花の姿の壊れる際に、ばらける花弁と花弁の裂け目から、やっと一つ切り痛い痛いと産まれた事にでもしときましょうよ、蛇の血の匂いの噎せ返る。それともその血の匂いの擦れて硬く固まって、その転げる塊が卵かな、ならきっと血のぎらつくように色取り取りで。なら孵って殻から頭を出したばかりでもう、その身は花の匂いを薫らせて、こっそり暗がりに隠れでもすれば、その暗がりごと恥じらうように、大きく咲く花かも、うん違いない。ああ、そんな楽しい嬉しい事って有りますか。嬉しさが脹らめば、その蛇の隠れた暗がりも、益益花の姿の脹れるように、香りを広広と打ち放って、好きなように、次次見付かる空っぽの向こうへ向こうへ延びて行きましょうね。いや、どうこう言うのもまどろっこしい、ただ身が、蛇蛇蛇蛇と長長と蛇、蛇。然も花の香りは盛んになるばかりに辺りに匂いを移し、その薫るばかりがもう蜷局を巻いて、蛇の肉を飽きもせず喰らって凝っと揺らめくそれとそっくりで。そんな香りを吸って蛇は、込み上げる笑いの止まらない息を、尽きない花の幻へ叩き付けるように立て続けにハハッハッハッハと吐

いて、そんな香りに倣えと蜷局を巻けば、もうここが住み処と勢い任せに、抜け道一つない谷底かと身を俯せに尖らせて。」「抜け道一つない谷底ってもう谷底じゃなくて水も染みない岩の割れ目で、なら俯せようもないでしょうに。ここを住み処と定めるなら、水の扇のように拡がる少しだけ濁った匂いに誘われる儘、身は自ずと裏返り裏返り仰け反って、その度に巻き直される蜷局は、もうさっきより脹れてて、水の溢れるように零れ掛かるぬるりとした蜷局なら、その姿を水の塊が安らえそうな卵の形にでも似せようと。その柔らか過ぎるなら、せめて破れた卵の形でもと、溢れる身の傾きの周りと釣り合うよう、蔓の先のように撓る尾の向きをずらし、平べったい尖った頭を風を切るかに捩り直して。」「なら、蛇ですよね、なんて尋ねるまでもなくて、くねくねる幹の捩れた木に蔓の巻き付いてたのなんて、さて何時の事でしたっけ。蔓は断たれて朽ちて日日の風にすっかり吹き払われ、もう何の花も付けず寒そうな裸の石のようになよなよと黙り込んで木は、蛇に巻き付かれる怯える色も滲ませて、なら寧ろ早く、蛇の身が重く成り過ぎる前に、とも願ってそうで。」花弁じゃないよ、丸丸花がね、流れて行くんだってさ。聞いた事有ったっけ、そんなの。でも言われてみれば、真ん丸でたっぷり重そうな花なら、水を額ずかせるかに響くように昂ぶる姿で、それを見下ろす山山の轟きすら歪めそうに。いや、でもそれって、流れを下ってたかなぁ。遠目にもはっきり見て取れるなら、ただ大きい

ばかりでなく、下る水を見下すかに流れに逆らってだよ、有り余る花の力を試すかに。やっぱり三つ並んで、そんなものを何時か見た覚えなら、きっと有りそうで。流れを昇って何処へ行こうとしてたかなんて知れる筈もないけど、この世に蛇の絶えない限り、花は少しも行き惑ったりせずに、蛇を喰らうに飽きたにしても、きっと蛇共から競うように、するする花に喰われに来そうだし。だって、花って、どんな蛇だって、髭を生やしたり足を生やしたりする蛇だって蛇ならば、蛇自らが喰われたいものの事でしょ、花に喰われたいでないのなら、その身を捩るも震わすも心を浮かすも沈ませるも儘ならず、息さえ止まって、違うの。蛇なんて、自らの身で自らを縊いてさえ花にしか行き着けない、でないなら疾っくに、枯れ木に絡む痩せ果てた蔓で‥。ふん、お前の目に映る花なんて事じゃないんだよ、蛇を喰らおうが獣を喰らおうが何だってんだ、花を摘めと言われて摘むしかないんだよ、お前がここへ来たからには、だろ。‥だね、いや、そう来ると思ったさ、で何がどうなったんだっけ？「花は流れて行く、摘まれるも摘まれないもなく、摘まれてもなくて摘まれなくてもなくて花は流れ、その昇る姿が蛇。それも摘まれようもなくて溢れて悶える花の力を呑んでは溜め込むかに、花に抗う水の流れの増す程に、蛇の身は常に流れの先を行くように長く伸びて脹れて、もう花もその浮かぶ水の流れさえ、蛇の白く輝くたっぷり脂の乗った腹の下に埋もれて潰れたらしい、その何処にも見付か

らないのなら。で、それでも流れる花の話しが消えた儘にも聞こえてしまうのは、そりゃ花のせいには違いない、でも取り敢えずそう言えてしまえる花って何？どんな蛇も蛇ならば、花に喰われたがってるのって、きっと水の流れるには、そんな話しも要るのでは、それだけの事。つまり、ただ水の花とも呼べそうに、それは。なら、もっと違った事かも知れませんね、花って。だって、くねくね幹の捩れた大きな木に咲いてた、脂ぎってギラギラ光る花は何処へ消えたか、ですよ。誰にも摘まれず消えようもなく、自らを消しようもないでしょ、あんな蛇を喰らって生き続けてる花では。で、水に流れもしないでは。」「なら蛇ですよね、あいつら、あの花こそ、蛇の初めの姿でなくて何でしょう。だってこっちの、水を呑み切ってもうその流れより大きく長い白い蛇は、少しも歪めず卵の形に蜷局を巻いて、その真ん中から擡げられる首は、崖の底の破れた卵の形の裂け目に覗く沼の奥を向いてて、その睨む目に映るのは、沼の奥を更に抜けた先の、その…」「花ですか蛇ですか、それとももっと違う名でしか呼べない何かとか、でもそれじゃ何も言ってないと同じな、そんな…」「って、そんなもの、知りませんよ。いや知らないんでこそ、そんなものはそんなものでそこにそんな姿で。のそんな姿をそっくり似せて写すかも知れない、あの、花とは似てもつかない色と匂いでは、そう疑わないでは居られない、それがあの花共で、あのように。…え？えっと、ならそれって蛇ですかね。卵の形に

蜷局を巻く大きく長い白い蛇も、そう心付くのなら、擡げる首の向きを変え、その卵の形の身を沈ませられそうな、山深い何処かの池でも探しに行きましょうか。己の水の匂いとその池の匂いとを結び付けたげに。」「にしても、何か足らないって引き返そうなら、そこにまた三つ大きな花が咲き満ちて、蛇を喰いたそうに口を開け、その開いた口より広い喉の奥に、きっと蛇は、無くしたものと何故かどうしても思えてしまう刃を見付けてしまいましょうね、濃い乳色のくねくねした。で、直ぐにそれが蛇の身をひらひら切り刻む為と分かるにしても、花の口へ身を投げなければ良いだけの事。なら、こっそり裏へ回り込んで、花の尻から刃を抜き取れそうで。その刃を重ねて鋏のように交わらせ、三つ叉に転がせば、何時でも飛び掛かって花を摘める形じゃないかな、なんて甘い見通しが災いして、蛇はその刃で、自ら首根っこに酷い深手を負ってしまいましょうね。刃を抜かれては萎れるしかなさそうな花が、その抜かれた穴を重ねて三つ叉の刃を招くかに、その奥に乳色の淡い陰をそっと覗かせ。首がぽろりと取れて転げ込めば、きっと額はぴたりとその陰に嵌まるだろうな、とそれを望みながらも、首は取れずに蛇は、水の色をした血が流れて溜まるばかりを眺めるしかなく、まだ陽は有る筈と自らに言い聞かせるように思い込んで、その水色の深みへ微睡み込むかに、尋ねられるのはあなたしか居ないなら、あなたでないもう一人が自らの左腕を磨くように花に咲かす刃を研いだ時の事を知

りたそうに、池の風の回る空へと傾く身で、そうして花を落としたようなら木は、池の水面に映るもう一人の左腕でもありそうな蛇の姿かと、（二〇一七年十月五日）

（何ですかそれ…）

何ですかそれ蛇ですよね。って、そう言わされちゃいますよね。だって長くて、淡い乳色に翳る先を反らせて脹らませたのは、鎌首を擡げる蛇を真似たかで。薄っすら滲んで滴るのは、花の色をしたまだ舐めれば生温かい蛇の血に違いなくて。それともその己の血を舐めてるのが蛇でしょうか、息も絶え絶えに。でも破れた卵の形の裂け目からは何の匂いも、の、そんな裂け目なんてさて何処に。」「軽い羽根の舞うかに振り回せば、淡い乳色は翳ったり光ったり目紛しく入れ替わり、その光るほんの狭間の翳りの一筋へ躍り込むように映るのは、その裂け目のずっと深い奥から立ち昇って已まない、か細い唸り。岩の割れ目の土の底の水の流れに震える音か、それとも、声。きっと声。蛇ですって？それ、な訳ない。だって声なら蛇の声なんですよ。は、それとして、振り回せるなら、根元を強く握り締めた刃に違いなくて、弓形にこれでもかと反り返って

長くて幅の広い。その乳色の翳りが蛇を呼んで、応えようかと蛇の声が、何処か深い土の底から。って聞こえて来そうでも、蛇の居処はまるで知れず、成る程、その広い刃に映る色のように平べったく身を隠し、その刃の吸った蛇の血の匂いに悶えている蛇かも知れませんね。なんて訳もなさそうなら、蛇なんて忘れて。いや、忘れようとしなくても、もう何を忘れるもなく、その刃にしても何処へか仕舞われて探されもせず。で、声なんですけどね、蛇の。何処へ映れもしなければ、白っぽい春の陽を受けて眠そうな、ゆるゆる下る広い草原の、土はまだ冷たそうなその辺りに染み渡ってそうです。そんな草原じゃ幾らでも小さな蛇は身を隠してそうですが、どれも草の根の匂いを嗅ぐばかりに黙り込む儘で、その遣って来る声が草の葉や根を微かに震わすのをどうにも出来ず身も縮めて。でもその声がどっちからどっちへ向かってるかなら同じ蛇なのでかどうやら分かって、蛇共の額は、その声の行方を追うように、そちらを向く。そのそちらって、草原を登り切って草も疎らな、でも日当たりだけは良い、ところとろ湿った黒土の、土の底の水の流れと繋がるかに、上辺はゆっくり渦を巻き掛けようかと言う処。その真ん中を狙い澄ましたかに声の主が、さも懐かしげに、尖ってそうで角の取れた大きな頭をぬらりと押し出す。それともそんな声って、初めからその黒土の真ん中の奥辺りから響いて来てて、それが草原を下って行くのに、草原の蛇共は、それを聞き違えたか、それとも、ちゃんとそ

う聞こえててそれが癪で聞き違える振りか。で頭を出したのは白蛇ですよ、で、水を一口ばらりと吐いて、その赤く暗い水から身を退くように直ぐまた黒土へ潜ろうかと。吐かれた水は、その黒土の上を穏やかな陽に晒されて白白と濁るように輝けば、その身の丈に合った小さな渦を確と作り、そこに透けて根を下ろすかに留まって。霞む山から重く風も下りて来ましょう、渦はそれに圧されて黒土の端へ流れて沈み掛ける処へ、ずっと親しく見守ってたように、それを優しく支えようかと、そろりとそこに白蛇がまた傾げた頭を静かに出せば、と、またく水を一つ吐き。二つの混ざって渦を整えれば、それで少しは風に抗う重さを水は得て土へ刺さろうかに傾いて、ほんの幾らかは風を押し返したでしょうかね。」拾って帰ったのって石の卵だったって話しだよね。それともそんなの話しだけで、成る程、それって卵の形はしてたけど、石なんて筈ないし、いやそれとも、それは、まるでどうにもゴツゴツした石ころなんだけど、それを卵だって言ってみれば、それを陽に翳せば、中の何かが透かし見えそうとか、そっと静かに振れば、中の何かが、って水だろうけど、音を立てそうとか、そんな事に巻き込まれそうな、巻き込まれたくて捩れる心をどうにも出来ずに。で、それは孵ったんだよね、石だの卵だのに耽る心はさらりと消えて、赤い産毛を腹に生やした小さな蛇が、その蛇にしか見付けられない隠された小さな隅の穴へ逃げ込むのを確かに見たって。その蛇の産声を空耳に聞いたかに頼りない、夢だった

かもとするりと疑えもされそうな、幼さに透けるような後ろ姿を。で、卵の殻なんて、嘘だったかに影もない、ただその辺りに少し土は水に悔いるかに濡れて。の辺りまで目を落として、そこからまた低い暗がりへ目を滑らせるなら、蛇の穴も見付かろうさ、でもそうしてそれを塞いで、その先何が起こるか知れないなら、それらは夢の中の空耳と態と聞き違える振りを、穴の奥からこちらを凝っと見上げるかも知れない、どんな小さな水より澄んだ二つの目に、映そうかに。かに、ってんだから、ほんの軽弾みにって事なんだけど、それがその通り、夢かとも儚い幼い蛇の目に確と映るなら、で映ったんだよ間違いなく、もう取り返しは付かなくて、何処が蛇の穴もない。穴の形を探る目がもう蛇の穴に呑まれるようで、って事はだから、目の奥もその目に映る目の向く先も何処も彼処も蛇の穴なら、それで、何処が蛇の穴もないって訳で、何処にも見付からない蛇の穴では、それから逃れようもなくてね。な事は忘れて構わないんだけど、忘れたって何もどうにもならずに、蛇の姿を嫌なら目に映さずに居られた日日はもう戻らなくて、目の奥にずっと蛇を飼って置くしかないねって諦めて。のその目の奥は、甘い露でも絶えずに滲み出るか、きっとそんなものに養われて育ち盛りの蛇の身は、その己の血と肉の匂いに噎せ返るかに、砂原についさっき湧いた泉の水が新しい川になって重い砂ごと流れるように、見る見る長く太く伸び、奥も手前も目の中はすっかり蛇の身で占められたんなら、そ

れは目の奥の更に奥へ緊く突き刺さるか、それとも涙の筋の振りでもして、目尻から這い出すか。って、どっちでもないに決まってる、目も蛇の身と同じに脹れてるだけさ、だって何処も彼処も何処にも見付からない蛇の穴なんだもんね。ならもう蛇を見詰める目なんて無くして、蛇の身が、その儘にその蛇の身を見詰めるようにして蛇の身で。と、そんな蛇の蛇の目らしき身を見詰める目が何処かに有るかって、有ったってもう、蛇に呑まれてようね。ってのもやっぱり、蛇の身の、その儘その目かの見立てで。そんな蛇なら怖いものなし、何処にも見付からない蛇の穴の外から内から、身を拗らせ出して引き戻して、何処へ行き着くかなら、やっぱり穴で、でもまだその穴は影も無くて、なら先ずは己の影を丸めて、それを穴の影にして、その影に身を擦り付けては土を押し退け、穴の縁の形の影を落とせばそこは穴で、穴なら穴自らでもう穴で、蛇の身を外へ押し遣るかに頑なに暗さを望むのか、暗く。暗いなら、溜まるのは光りを嫌うきっと何か疚しい水しかなくて、にしても、でも水なんて何処に見付かるのかな、空はずっとカラリを突き抜けチカチカと晴れ渡る儘、その青すら褪せて砂色の、もうそれが何時からだったかも忘れられてるんではね。で穴から締め出された蛇は何処へ行ったやら、って水を探しに行ったに決まってる、ってそう思いたいのは誰？って尋ねられるなら、それ、あなただよね、いや私でも構わないけど、じゃあなたと私にしときましょうか、でもあなたと私って、

きっと打ち消し合って、その真ん中辺りの誰でもなさそうな独りぼっちの、それともまだ幾らかは二人ぼっちの、ならどっちがあなたも私もないような、など何を打ち消すも何も初めから独りで二人を互いを噛み合わせるかに、ならどうして誰が誰をあなただの私だのって…。「それって蛇ですよね、まさか幾らかは、頭は二つかも知れない、かの。水を見付けられず喉を嗄らして、でも喉はまだ流石に捩れても一つで、求めずには居られない水の姿に相応しい名を真っ直ぐ呼んでそうですかね。だって、ただ（ミズ、）ってんじゃ、呼べてないんですよ。蛇の身に相応しい、その姿の呼び名を分からなければ、水なんて水じゃない、って言うか、水なんて無いんですよ何処にも、何処もが空の砂色を映すかに。でしたよね。で喉も嗄れるばかりなら、その何も呼べてない声は声でもなかったとか、いやまさか、そんな声が他でもない蛇の声でなくて何でしょう。でもそれは乾いた土にしか届かずに、そうしてほんのゆっくりでもじりじり土に染みて、その土にだけ聞いて貰える蛇の声は、その土だけを頼りに、喉からその覚束なげな身を引き千切れば、その切れ目は尻尾で、それって蛇ですよね、って、いやまさか、それこそ探してた水の姿でしょ、きっと微かに蛇の匂いの、いや蛇の匂いは蛇には知れない事で。で、嗄れた声を土に染み渡らせては吐き捨てれば、切れるに任された声共は、端からその身をするすると水に変え、蛇の耳にその呼び名を伝えても来ましょうか。それを聞き取れたかは

知れません。だって水の姿はもう、その己の名を呼ばわり捲くってますもんね、違いない、ならその、そうとはどうやら聞き取れたかな、それでもうその水の声の沸き返る縁へかに身を擦り寄せれば、きっと思いの儘に水と戯れられもしそうです。でもそれを好きに飲めるかとなると、どうでしょうね。喉はすっかりその水に成る声の為に使われ、水の名を鳴らす水の姿を失う訳には行かないなら、喉もその声を鳴らし続けるしかなくては。」「それって蛇ですかね、いや蛇じゃないとは言いませんよ、にしろ、それって先ず初めってから水だったんじゃないですか。ひょっとして匂い位はしてましたか蛇の、でも蛇の匂いのしないものなんて、どんな色の空の果てにさえ見付けられそうにないようでは、どうにもね。でその水に呼ばれて、その水の姿が蛇なら、蛇で。でも、なら何とも怪しい危なっかしい、何時水に溶けて紛れるか知れない蛇の姿かな。それとも水って蛇なんでしょうか。そうですよ。それであれこれ色色蛇に成ってしまって、ならまるで危なくて怪しい程に活き活きと、それは目に蛇と映って、それは何処へも逃れようもなく。にしても、逃れようのないと言うなら何一つ逃れようなどはなくて、仮に有っても逃れようのあるものなんて、光りからも闇からもその逃れるに任せて疾っくに消え去って、それが何だったかも分かりようはないだけ。それとも、その分かりようのない向こうへ、その何かを追えるなら、その追われるのも追うのも、逃れようもなく蛇かも知れません、まるで

水の姿をして。なんてのは、まるで思い込みかも知れないなって、その何の姿もさらさら消された音の欠片の残る辺りを覗き込むしかないなら、そこは、水の有る無しに拘わらず、ただ、何のとも言い切れない穴で。で、そこを乾き果てた風だけが常に吹き荒んでいたにしても、その様を映す目の中にはくっきりと、水と蛇とが隙なく入れ替わり渦を巻いてその境境に丸を幾つも重ねて描くしかなくて、歪めようにも歪めようはなく。だって目に映って穴は目の穴の形を得て穴で、目には必ず水の姿の蛇が棲んでましょうから。その姿は、空が常に真上を向くように真っ直ぐ前を向くばかりな。水の姿の蛇である穴に、どうして風など吹き抜けられましょう。蛇の腹の底へまで吸い込まれて消える、それは何処までも鋭くてもほんの蛇の一息でしょうかね。穴の奥深くで水に溶けるしかないそんな風ならば、成る程、その乾き果てる程に、それは激しく吹き荒みそうです。でも、ああ、この儘語り続けるなら、きっとすっかり風の話しになってしまう、どうしよう。風の話しなら、風に呼ばれるのは、暗い水に乗った、その水の向こうから来る蛇の姿でしかないにしても。」「にしても、か、なので、か、ぐるり一回りして。と、拡がるのは、その風は已んだ、すっかり時の眺め。色も時、形も時。で、どんなにも遠く山からの湿った風なら来ても、暗い水の盛り上がるならそれは目の前の海で、そこからの乾いた荒れた風はもうすっかり、一回りした時に、遥かに隔てられてて、もう…」「…後戻りしよ

うもなくに。それって蛇ですよね。」「それって蛇ですよ。ええ、全く。その蛇の一回りの時が、時の儘にクネクネと蛇で。でしかありませんとも。何しろ蛇の時ですもの、少しもぐらついたり、さざめきさえしません。それは水とさえも似てません、何処へ流れ去るもないので。草原の小さな蛇共が草の根に頬擦り寄せて眠くなる程に、全く。その色と形と来たら、そのどれがどれとも一繋がりで、蛇の時を、その果てなく巡る姿に横たわらせて。」時って蛇だったんだ、一回り一回りを繰り返す、ってアハハ、そんなの誰でも知ってたさ、もうそのすっかり忘れられて、その時の中を皆でキラキラ光る蛇の尻尾を探しに行きたくなる浮かれた心を、春の陽に負けず賑わせて確かめ合わずには居られない程にも。いや待てよ、でもまだ何処へ探しに行けば良いか分からないじゃ、浮かれた心も、蛇とは忘れられた時の眺めに巻き取られるしかなく、で眺めばかりが賑わっても、それは陽の明るさのせいとしか。その陽を独り占めするかに、時から産まれたかの姿の、陽に透ける身を拗らせる蛇なら、ほらもうそこに、その身で柔らかく輪を描くように穴を囲んで、にっこりと、その目はどっちを向くでもなく、ならきっとその身内の嬉しさへ、波打つ眼差しを鏡のように静かに向けて、そっとじりじりと回ってようね。それとも穴に水の湛えられたなら、囲みを解くように穴を離れ、すっかり冷たい池になったそこを眺め渡そうと、側の山の背を少し登って、小さくも溢れ出るばかりな嬉しさを、身を

細かく波打たせて表してようかね。でもね、そんな蛇の姿なんて見付からない。だってその這って行った跡には蛇の匂いも消して、萌える若草がびっしりと敷かれ、花は咲き競い、すっかりそれへ目を奪われれば、その目に飛び込んで映るのは、やっぱり時の確かな一回りに違いなくて。蛇とは忘れられた時でも、それは蛇なら、時の巡りに沿うしかない目の中には、ずっと蛇は棲んでるよね。でも池を囲み山の背を這い上る花の色が、陽も高くから差して鮮やかな程に、蛇との別れの色に見えて来て、ならその促される儘に、別れても良いのかな、なら別れようかなって、悲しいのもまた逃れようのないだけの蛇ならば、どうなるものでもないのかなって。あのね、別れってのはね、これで別れるんだって決めたからには、自ずと喜びが溢れて来なくちゃね。だって、そうして別れられるまでに、何かを遺り果せたんだから。寂しいのは、別れじゃなく、ずっと寂しかったのを忘れられてただけで、胸を突き上げその思い出されるのは、それへ喜びを重ねるのに、なくてはならないからなんじゃないか。なんて事さえ、考えなくて済むなら考えるまでもなく、だって花に色を見るのもきっと、忘れようもなく寂しいからで、その忘れられようものなら色も褪せ花は散るしかないばかりに。なんて事も、考えなくて済むなら済んで、池を巡るのはすっかり春の賑わい。と、その、止まるも止まらない筈の、時を止めるように賑わいは窮まるなら、浮かれた心も浮かれた儘に息を止められ、忘れられて

なんて居なかったんだって、時の蛇の姿が、やっぱりずっと嬉しそうな儘に戻って来ようね。で、誰が死ぬんだっけ、死ななくちゃいけないんだっけ、それとも誰ともなしに常に死ななくちゃいけないばかりならその永らえる程に息苦しい息は、どう遣って消されるんだっけ、その見届けられない内は、回る時も回らずに、花はうっかり色褪せも出来なくて。池は誰の血を吸いたいんだっけ。その静けさは凝っと、どの息付く命に狙いを定めてるんだっけ。蛇がせっせと水を吐いて黒土に穴を拡げて拵えた池だよ、知らなかったも忘れてたなんてのも言わせない。そりゃ、若くて活きの良いさらさらした血だろうさ、たっぷりのと。花の上に一時身を伸ばすだけで花の匂いの直ぐにも移る真っ新な朗らかな肌の下の乳の味の柔らかな肉も貪りたかろう、決まってるよ池だもの。その朧な幻に、陽の運びにぴたり合わせて狂った事なんて嘗てない蛇の時も、ねっとり歪んで遅れるようなら、池はもう水を溜めるだけでは居られなくて、おっとり川になって流れ出そうね。側を流れる川も見る見る呼び込み手繰り寄せ、大きな流れに速い渦を突っ立てて躍らせて。で風だよ、のそのそ歩くようにでも来るじゃないか、海から、でも水は少しも暗くも荒れてもない、まるで鏡を張り渡したかに春の陽を飽きもせず映し重ねて輝かせて、蛇なんて影もない、それを耐え難いかに、その眺めに蛇の姿を注ぎ込みたいかに、蛇のように拗って川は。でも拗り過ぎたのか、川岸は盛り上がって反り返って輪を描いて山を向い

て戻ろうかに、なら海を見失って、何処かに深い裂け目を見付けるまでは、蜷局でも巻くように。「え？裂け目を見付けられないとでも。裂け目の奥の何処か知れない処から蛇の声が、って始まったんじゃなかったんでしたっけ。それとも、なので却って、そっちへだけは、蛇を真似るんじゃ水は向かないとか。」「なら、あなた、裂け目を指差せるんですか。」「まさか、あなたなんて呼び掛けようって言うならさぞ、あなたとやら。裂け目は指差される為に裂けてるんじゃありませんよ。」知ってたさ、だって時って蛇だもの。裂け目を裂いたのも裂け目を覆うのも裂け目に入り浸るのも、蛇の時の他になくて。その蛇の時にだけどっぷり浸かって、裂け目は土にも埋もれず裂けてられる。そんな時に弾かれては、指差しようも呼び掛けようも他にもどうにもならなくて。でも時が蛇で蛇が時じゃ時にも蛇にさえも、それはどうにもならないさ。それって何？だってそんな裂け目なら、何処も彼処も裂け目で、って事は、何が裂けてるもなくて、ただそれだけが…、のそれだよ。って、言い淀むのさえしくじってて、うっかり少しだけ黙ってしまったのを見逃さないのが、草原の草の根に縋り付いて身を縮めてた小さな蛇共で、それぞれに小さいな目の奥ばかり陽の明るさを恋う海の底の湧き水のように波打たせて、一つに纏まって草原を雪崩下れば、すっかり大きな水の流れの姿で、その、それって何、の僅かな…の隙間目掛けて、凄い重さで落ちて来そうで。でも違うんだ、蛇共の狙うのは、何処

も彼処も裂け目で何が裂けてるもないのに、なのにどうにもそれだけは裂けてる姿を晒す裂け目に違いないさ。違うかな、違ったって構わない。兎も角どっちかのそっちへ、その川そっくりの数知れない蛇共は、身を透き通らせ、その透き通る身にゴロゴロと重そうにうねり転がる水の音を、思う様はしゃぎ回るように貫かせて、それでどうするかって、そりゃ、先に池から流れ落ちた水を探そうね。見付かるかどうかは、蛇共の話しで。いやきっと見付けたさ、だってそれで、山を向いて輪を描きそうな川は、身を翻して、すっかり海へと向き直ったじゃないか。それも鏡なんて張ってない、どろどろと蛇の時の喜びそうな何処までも暗くうねる、ねっとり歪んだ海へ。蛇共がその川へ突き刺さるように傾れ込んだでなくて、どうしてそうなるもんか。そうして蛇共の狙った筈の、一つ切りの裂け目が、それって何、の隙間に残されてるのを見付けてしまうのが、きっと、何って尋ねられるしかない、それで。で、何の話しだっけ。先ずその、それでないのは確か、ならそんなそれを一呑みの蛇しか姿はない。で、それを呑んだ蛇なら、その腹の中のどうにもしっくり来ない重さを、一つ切り残された裂け目の奥へ、滑り込ませずには居られなかろうね。それを待ち焦がれてた裂け目かもな、だろ？なんて、にやつきながら。そうして蛇の身が時から剥がれ落ちれば、その裂け目って、蛇の腹の裂け目で、そこから零れ落ちたそれが、その奥の裂け目へと降り注がれると。

「それって蛇じゃないです

よね。いや蛇かも知れなくても、それは見掛けだけで、見掛けの他は、その姿だってすっかり蛇じゃない。」「蛇じゃない？誰にそんな事が言えるもんか、の誰もない。それが蛇じゃなくったって、その姿がすっかり蛇じゃなくったって、それは蛇なんだよ。」「の、それって何…。」「の、その隙間からが、蛇に違いないじゃないか、だろ？」だね、って言ってみるとしようか、いや言うなんてまどろっこしい。そこから覗ける眺めは、もうすっかり、乾いた風さえ蜷局を巻きそうに濡れるかに、蛇の身で溢れそうに。蛇の時なんて脱け殻みたいに萎れて果てて。の、その眺めはまた、誰が死んだっけ、ってさっきよりきっぱりと尋ねて来ようね、もうその匂いからして冷たく。でも蛇の姿はない。替わりに池にはたっぷり水が満ち、春の陽にぬるぬると温められ、うっかり傾いてさえ何処へも落ちて行きそうになく、ただその温さに相応しいかの命を一つ、急ぐでもなく、でもそればかりを待ち望んでそうで。なら池の周りはすっかり眠そうに花盛りも窮まって、それに誘われる底の見えない眠たさが、その命取り。きっとそんな事、助かる命なんて、この世の何処にも有りようもなく。そうと窮まれば、却って蛇に助けられない命も無いかな。いやそれはもう命じゃないかも知れないけど構わない、命の姿さえ目の奥に甦るならね、いや目の奥ってすっかり蛇だったんだよね忘れてたよ、なら目の奥からずっと遠い、目には映りようもない知らない処へ甦ろうかね。それってでも、直ぐそこに、手に触れ

られる処じゃないのかな。それでもまだ、か、それだからまだ、誰が死ぬんだっけ、って尋ねられ続けるしかなさそうだね、春の陽の照り続けるに合わせるかに、屍の手触りを欲しがるその春の陽でもありそうに。なら春の陽に殺されては甦るって訳だね、少なくともその光りに晒される姿な限りは。なら命なんてもう、その死ぬと定まるかも知らぬげに、そっちのけ。で構わないだろ？の、のけられるそっちってどっち？蛇の殺される処じゃないの、殺すのは蛇だろって言い掛かりでも付けられて。そうさ、そんな蛇なので、助けられない命だってうっかり、でもさらりと助けられる、水を潜るのも死ぬよりきっと嬉しくて。でも、そんな蛇の身ばかりしか見当たらない、のっぺりした眺めこそが、誰が死ぬんだっけ、って尋ねるのを已めないんだけど、愈愈その、他にない誰かに差し迫るかに、違うの？　そうか、そうして蛇はそこでぐるぐる蜷局を巻いて飽きないなら、その鎌首を、その眺めを覗いてるこっちへ向けて、そう向けるだけで、それって何の、それって何？って尋ねて、そこに答える誰も居る筈もなく、そのそれは、きっと粉粉に砕けて風に散って、隙間ばかりが残されて、蛇はそこを、覗かれた眺めを這い出るしかなく、こっちへ迫って来ようね。の、こっちって言ったって、その隙間から蛇だったんだから、こっちの何処を這い回るも、蛇が蛇の中から中へ身を滑らせて止まらないだけの事。そうしてぐるぐる回れてるなら、蛇の腹の中にまた、ぐるぐる回る蛇の時が、池に攫われた

命の助け上げられるように甦るに違いなくて、誰が死んだっけ、って問いにはケリが付けられ、つまり花の盛りは過ぎ、回るばかりで居られなくなった蛇の時が、どっちへ流れ出すか、知ってるのはきっと水ばかり。いや違う、水ばかりがそれを知らなくて、それでその知らない向こうへと流れて行ける。そうして花の盛りの過ぎれば池なんて、その見る間に黒土に歪んで開いた醜い穴で、その醜さを贖うかに、その底には小さな蛇の白い骨がびっしりで、そこをすっかり傾いた春の陽がじわりじわりと蛇の身を潜らせるように染み込んで、骨に埋まって隠された、僅かな裂け目を見付ければ、その奥に溜まった蛇の時が、花を何時までも終わらせる事なく、その盛りの窮まる儘に咲き満たして。いやまるで違う、探してるのは屍の他にない、愈愈その限りへと傾く程に春の陽が。なら死ななくちゃいけないのは、蛇じゃないか、時じゃないか、その屍を見付けたがってる陽の傾きであるかに。ふん、時の屍なんて有るもんか、屍が有るなら、時はそこにすっかり生きてようからな。なら蛇の時を断ち切るしかなく、その出来るのは、花の盛りを裂く為の、尖って奥深い、刃のように硬く反って、水の流れ去った果てより静かで切れ味鋭い裂け目に違いなさそうだけど、それって何処の？傾いてもう消える間近の春の陽なんかに探し出せる処なんかな筈もない。ならそれを、蛇の時が自ら探すしかないって事かな。ああ、ならもう見付けたようなもんじゃないか。その為に俺は蛇だったんだ。いや違う、蛇に

しか成れないのに成り損なってるんだ、態とであるみたいに、なんて粋がってか。構わないさ、だって、それでこそ、裂け目を探そうって心を、賑賑しい儘に、逃げ去るばかりかの蛇の姿に流し込んで行けてるみたいだから。どうせ探すなんて、そんな惚けた事さ。いやそんなじゃ少しも探せてない、時を断ち切る裂け目なんて見付けようもない。それならそれでって、陽の傾きへ身を傾き掛ける蛇ならば、そこはもう蛇の時を溜める裂け目の奥でしかなくて、春を限る時に溶け切れずに身を捩って、更にその奥へ躙り出たいかのその身の勢いに、却って空へ向けて擡げられる鎌首ならば、春の陽なんて頼らなくても、ずっと遠くまでも見晴るかされようね、陽の落ちた暗さもその眺めを鏡のように、目は滑るように。その眺め渡せる何処までもが、どうにも鏡のようなら、そこに映る更にその先の、春は終わってもうそれ切りに途絶える時がこっちを振り返って、その姿は、それを少しも思い描けもしなかった儘、きっとずっと探してた、光り輝く時の屍で。それともそれを覆うのは、きっと光りなんかじゃなく、どうにもならない暗さのようなら、その拡がる暗がりの輝く程に、それへ近寄れて、それに身を絡み付かせ巻き付いて、こっちへ引っ張って来られそう。の、こっちってどっち？何処までも先へ拡がる眺めから身を引き戻せて籠もれる穴でも有るかって、有る筈ない。なら空を向いてた首を、真っ逆様に俯けて、その弾みに、一息に、空からその明るさを剥ぎ取って、高みから引き摺り下ろす

かに、目を裂いて空に満ちる闇を切り込ませる刃を、どっちかのこっちから差し込ませるしかないのでは。そんな刃なら、盛りの花の窮まって、ただ花の色に沈む小さ過ぎて見付からない淡い陰の欠片のような浅い裂け目になら、辛うじてなりに、ずっと振り立てられていたかも知れなくて。でどうする積もり、遺るの遺らないの？も何も、浅い裂け目なんて裂け目じゃなく陰の染みか何かかな、それは暗くも明るくもない眺めを鏡の上のように滑って、空を向いた刃は、土に弾かれ水へ逃げ込むしかない空の影を、もう追い掛け回してるさ。くねくねと。だってそのくねくねが、まるで蛇の時だもの。それに水なら蛇の身その儘で、ならその流れの行方は何処までも、空を裂きたい刃で。でもそんな事なら、くねくねしながら水も激しく流れながら、その有る儘に、何も動いてないも同じかな。そう心付く刃では、動きを追えるのは、刃自らに映る、蛇の時にその姿を晒すしかない何処も彼処も裂け目な眺めと分かって、刃の反って震えるに添って、それへ映る色も揺れて滲んで混ざってくすめば、それを花の窮まる色と見るかはその心に任せるとしても、その身内のくすみを追い回すように、刃は、その力の尽きないかに振り翳されるんだけど、どっちへ？ひょとしてもう、刃の色を映せる輝きはすっかり失せて、どっちをどっちとも定めようもなく。「ああ、それはまた如何にも使えそうな言い訳ですね、殺すには持って来いの、いや殺せって唆すに持って来いの、かな。いや唆すのも要りませ

んかね。ただ黙って春の陽に殺されて行った蛇らの影こそ、そのくすみだったって、そのくすみに映し取らせれば。そうしてもう、死にに行くように殺しに行くでしょうよ、蛇ならば。その蛇を、すっぱりと一息に。刃のように。その刃を。でそれは、それでもう春の陽も失せれば、その失せた空の下の暗がりすら弾く贋の風の塊にでも弾かれて、クルクル独楽のように池の水面を転げ躍って、その姿を、切り取られた蛇の鎌首のように、蛇の歯に千切り取られた震える薄い刃の先のように、贋なりにくすもうとする風の色を嫌って、春の陽を映し真似るかの水の底の輝きへ突き刺さりたいかに俯かせて、一粒一粒に時の一回りした先の春の陽を孕むかに泡立つ渦に緊く包まれながら、もう賑わいの去って静かに柔らかい若草の香りに眠らされでもしたような素振りを苦苦しげに嬉しげに出来るのなら、死にも出来ずにきっと殺されたかに、それは、（二〇一七年十一月六日）

（何ですかそれ…）

何ですかそれ、のそれがそれでしかないのなら、それを何ですかって尋ねてしまうのは何なんでしょう。それともそれはきっと、それでさえなくて、何で

すかって尋ねられるしかなくてやっと、それでしょうか。そんなそれなら、それはそれであるも何も、ただ何ですか、なんですよね。で、何ですか、って何が？と来れば、それはそれでしかなくて、それとも、それですらないかも知れないにしても、そんなそれでしかないなら、何ですかも何も、無くて構わない訳です、無くても構わなくはなくてはならないなりに。違いますかね、いや違ってしまったら、それは何処にも無くなって、何ですかだけが有るにしても、その有る何かには、こっちはただ、何ですか、しかないでは、その何ですかを、どのようにか、その何かのそれへ近付けようとするしかないか、それとも疾っくにもうそう成ってて、そんなそれをどうしましょうかね、も何も、そんなのどうにでも出来て、出来過ぎて、で却って、ただ何となく偶偶目に付いたものに、それを委ねるような。敢えてそこで、ただ何となくでなしに、それにしか出来ない事にでも拘れば、直ぐ様それは、それに拘っているだけの、何に拘っているかも知れない何かに拘らされるだけで。そんな拘りなら、自らを消すように何に拘るもなくなって、で何となくに戻るしかないにしても、何とも後味の悪そうな何となくで。そりゃ後味悪いですよ、だってまだ何も始まってない内から後味悪いんですから、こんな後味悪いのなんて有るでしょうか。それともそんな後味の悪さだけで始まってて、何ですかそれ、なんて、その付け足しか、それともその後味の悪さに縋り付いて、その後味の悪さをずっとその儘に

して置こうって、そんな事ですかね。そんな事なら、何ですかそれ、で少しも構わない訳です、他の何でも構わないと同じに。で、「何ですかそれ何ともずっと分かりようもなさそうに。」なんて言っても言わなくても、そんなようにただそれだけが有って、それならそれを、その儘には出来る訳です、取り除こうとも出来る心をそっと抑えでもして、抑えられるのをささやかに試しに喜べもして。それともそんな心なんて有るようで無くて、それをその儘にして置くとさて何がどうなるやらと、そのどうなるを後の楽しみに取って置こうかななんて、浮き浮きした心ばかりで、それも何となしに、その儘に。でそんな心が追うのはその心ばかり、にしても、その追われる心は、追う心から離れて、足元を忙しく動き回ってないかな、なんて、どっかそっちの向こうを眺めるとしたら、どうでしょう。すると、ああ何ともあれやこれやが数知れず湧き起こるように形になって見えて仕舞って、なら心なんて要らない捨ててしまおう、の心が見付からないでは、見付からない儘消えない儘に、それは、自らを追って追われているに違いなく、持ち前の小回りを利かせて湧き起こるあれやこれらも浮かれて擦り抜けるなら、そっちへ拡がるのは、何も見付からない空の下に溜まって、見付かりそうな全てを覆い隠すような何処までも水。それともその水さえ擦り抜けて、それでも消えない心を転がしたいなら、水の底へか消えて見せるしかない。何から？と尋ねられるなら、それは水の暗さからなんでし

ょうけど、そう尋ねられそうなのが、水の暗さしかなさそうなら、曲がり拗ってるんだよって、何が？心が、水が、それともその暗さが？か、他にないですよね、でもまるでそのどれでもなさそうなら、それが、ただそれだけの思い付きでかに、湧き起こるあれやこれらにどのようにか軽軽と跳ね踊るように裂け目を作って。でもとても見え難い、その見え難さに目が凝らされれば却ってくっきりとそれは、ほんの小さな透き通った細い影で。細過ぎて、影なのに、細過ぎるのを見せびらかすかにキラキラ光るようで、それとも光るようにヌルヌルと翳りもしそうで。それを探してたんですよ拡がるばかりに怯える水は、なので暗かったんですね。で見付けてしまえば、水は戻るように流れ合わさってそこにたっぷり真下へ沈んで深い淵になって、遠くに湧く白雲の向こうまで続く山の連なりよりももっと重そうに、眠った切りずっと醒めないような色を湛えてうねらせて、他の何の色とも交わらず、なのでそれはふと短く、吃驚する程にじわり弾けるように輝いても見えたりして、すると淵の底の底の鋭く尖った形が、更にその下の硬い巌を責め苛んで苛み切れないのか、その尖って狭い水のほんの先は、水の色を捨てて、ならそれは水ではなくなって淵の深さに挑んで切り返し、先ずはその淵の色に映ろうと、その己の色を探す為に激しく身を捩るかな。でも空回りするばかりで、何の色も身に付く筈ないんですよ、だって、何ですかそれ、何ともずっと分かりようもなさそうに。って、少しもそ

んなものでもなさそうに確かにそんなものなら、その色のないのを逆手に取って、さぞ淵の色を、その底で切り裂いて回ってるでしょうね。まるで違いますかね、違うなら違うで、そんなの、前の夜に起こった切り夜の明ける前までに忘れられた事にして。でもそんな忘れられた隅っこに、やっと収まって居られる処を見付けたかに、頑なな心が静かに凝っと独楽のように回ってないでしょうか、初めからずっとそこに居て、そこで産まれたような顔さえして、閉じも開きもしない目は、眠った切りずっと醒めないような色を映して。そんなものでしょ、心って。なのでその目に映る色も眠った切りで、くるくる回ってるんですよ、あなたが何時殺されるか、もう何時殺されたとも、その心に知らせたいかにね。でもそれ、あなたの心じゃないですよね、違いましたっけ、あなたに心なんて有りませんものね、違いましたっけ。さあ、その答えを見付けに行きましょうよ、って誰が？いや誰でなくったって構いません。もうそれは、そんな事を始めてますから。だってほらそれは、そこに、暗くも明るくもない温い水から棘棘と丸い頭を出してるじゃありませんか。それともそれ、お尻でしょうか尾っぽでしょうか、まあどうせあなたには知れない事で、でも透き通った細い影には見えるでしょう、小さ過ぎて見えませんかね。でも小さ過ぎて見えないなって分かるなら、どんなにはっきりその形を目に捉えるよりずっと見えちゃってるんですよね、いや何か脅かすような口振りになってますかね。な

らきっと脅かすより出来そうな事もなさそうです。そんなもんです。で、その、水からしか浮かんで来られないのに水で出来てないのだけは確かなそれは、色も形もない儘に、そこにその姿を、それ自らの身に映して、だってそれがそれであるにはそれしかないでしょう、そんなそれが、あなたの殺されるか殺されたかの時を知らせたいだけの為に、うずうずして、でも何処へも知らせようがないでは、だってあなたの心は無いか見付からないかで、うずうずしっぱなしで、なら心が有るようにでも自ら振る舞って、その心にその知らせを刻み込むように。いや、そんな筈ないですよね、だって、そう、やっと分かりましたよ。そいつがあなたを殺しに来たんですよ。分かっちゃえば、まるでそうでしかありませんよね、淵の脇に切り立つ崖みたいに。にしても崖なんて何時も拵え事です、崖でも見えてないと淵ばかりでは、水はどれ程深そうでも、鏡のぽっかり浮かんでるようで、目を離した隙に、山並みを隠して垂れ込める厚い雲に促されでもする儘に、空へ舞い上がりそうで怖いんですよ。でそんなる崖をちらりと睨み上げてから、そいつは、くるりと一つ回るでしょう。その一つが、一つの時で、あなたの命がその一つを失うのをあなたに知らせるって訳です、それともそのくるり一つが、あなたの命を一つ、ぴたりと直に削ぐんでしょうかね。にしても、一つって何でしたっけ。とそんな事を、そのくるりくるりを数えながら、有らぬ事にかでも思い耽ってれば、却ってあなたは、その一つ一つを何

時の間にか手に取れてて、それをあなたの命から、そっと外す事も出来そうです、つまりそうしてあなたは、それから身を躱して生き延びられるって成り行きです。それともそんな成り行きを引き寄せられるなんて、それと知ってか知らずか眠ってたんじゃありませんか。きっとそうですよ、その浅い夢で、あなたがくるりくるりに成ってたんでしょう。そんな事にお誂え向きの時って、何処から取り寄せたんでしょうね。それ、蛇の時でしょ、決まってますよ濡れてますもん先ず何にしても。いや、そうとは限らない、淵が何処へも水を動かさずに鏡のように止まってるなら、蛇の付け入る隙は中中無くて、蛇は何か濡れる他に謀でも巡らさなければ、時にも成れずに、なら水の中に身を潜め息を殺してるとか。まさか、鏡のようでは、どう身を沈められましょう。なら蛇は、鏡の裏側を光りより速く這い回って、時と時でないの境目ですっかり身を磨り減らし、くるりが幾つ回ろうともう何も回らない光りの先まで先回りしてて、そこで時でもなしに回ってそうです、って言っても、身は磨り減って消えたならその影でしょうか、まさか、影なんて影も形も有りません。ならきっと、時でもなしの匂いが、その匂いの尾っぽでも追うように回ってて、回るのも飽きれば、産まれようとする命を探しに行くでしょうよ、その産まれて直ぐの匂いに乗り移ろうと。え?ならそこには時は、どうでも有るのかな、でなきゃ産まれられませんものね、それともそこに時のないのを引き破って、その時の傷口

の血の滲む端切れでも纏うかに時を装って、時のないのを良い事に、蛇の真似事でもして仕舞いそうです。でもそんな真似事の蛇では、その新しい命を永らえさせるのなんて全く覚束なくて、それならと鏡の真似でもと静かに躍り回って、その鏡に映ると見える命の匂いを、水の届かない処まで、だって水ですもんね、命を狙うのって、届けようと。水の届かないならずっと風か土でも燃えてれば分かり易いんでしょうけど、火を見付けるにはそこは余りにも明るくも暗くもなさ過ぎて、何を探すにも目は先へ先へ滑るばかり。なら止まれば良いんですよね。で、止まってみれば止まったのは、硬い何かの脱け殻、貝殻にでもしときましょうか、揺り籠の形をした。それが、死んだ儘産まれて水に流された小さな屍を包み込んで、淵の何処かに浮かんでなくちゃいけませんよね。でもそんなの見付かりません、いやそれで良いのかも。その見付からない事で、命の直ぐに奪われたのは、真っ直ぐ伝わるでしょ、あなたの心に。え？何も伝わらない、うっかりしてました、心なんて無かったんですよね。なら心のないのを引き破って、その裂け目にでも伝わりましたかね。って何が？子供を産み損なって母親に成り損なった、固まる血の味を誇るかの開いた肉の塊が、いやそんなものこそ見付かりそうにありません、だって見付かるならもう、その何ともに比べようのない重くねっとりした匂いで、疾っくに見付かってなくちゃいけませんものね。なら見付からない何処かで、きっとそれは恨んでるでしょう、

水が殺したと知るしかないなら水を。で、見付からない処って、何処をどう見渡しても、寒そうな汚れてそうな呼んでも頑なに振り向いては呉れなさそうな空しかなさそうなら、それは空に居て、それともそれは初めから空で、そう思えば、空って、ぽっかり開いた大きな穴には違いないですよね、雨なら滴る血の幻でかに水の色も褪せ果てて。そうか、空の奥からか空の裏道でも通って、命は水ばかりの蛇の時へと嫌嫌落ちて来るんですよ、回ってね。違いますかね、いやまるで違ってたって構いません。これで空の他に、命の果てるのを伝えられるものなんてないのは確かめられたんですから。そう言えば空の色って、赤く爛れても直に青ざめても乳の色に輝いてさえ、常に恨みの色ですもんね。でもそんな事ならもう、空なんて眺めてたって何にもならない訳で、やっぱり水の動くのへ頭を働かせなくちゃいけませんよ。確かに、キラキラ光るかヌルヌル翳るか細過ぎてどっちつかずを見せびらかすか透き通った小さな影なら、ヌ死んだ儘産まれて流された屍の溶け掛けの骨の欠片のようなその瞳にだけ、ずっと見詰められてそうですもんね。でその瞳に何が映るんでしょうか、いや映るなんて戯けた事は動く水の姿の止めようもない移り変わりでしかなくて、死んだ瞳に再びそんなの甦る筈もないなら、瞳はその奥へ据えられる色か形を拵えるしかなく。でも、ならその色形って何処にも映った事のない色形でしかなくて、それを拵えられたかどうかなんて、その瞳にさえ分かる筈もなく、そう

して細過ぎる影だけが、死んだ儘産まれたのではその直ぐ様腐り始めて歪む肉の襞の奥に僅かに残って仕舞うその魂を切り刻んで、その欠片までも屍から取り除けって、そう伝えに来たような振りでもするしかないかに、瞳の奥の裏まで刺し貫いて、それが離れ業のようならその業を忘れたくなくて、また切り刻めそうな魂でも探すかに、くるりくるりと回り出しそうですよね。アハハ言うに事欠いて、魂とはまた痛ましい、それって、痛ましい度に棘の有る脚を生やして肉の襞に絡まれ裏返ればその襞に絡んで、まるで巣作りにでも勤しむ硬い殻に閉じ籠もった蛇ですかね、己の脚の増え過ぎて身動き取れなくなった。って笑って済むにしても、そのくるりくるりですよ、何とも怪しい限りです、怪しくなければ回れそうもなさそうに。でも怪しい程にそんなくるりくるりを纏えるなら、それに促されて歌って踊るようにでも、その己の重さの見付かる向こうへまで自らを運んで行けそうです。その波打つような軽さが蛇そっくりなら、それは蛇で。って、やっとそんな姿の水の動きに出会せたかな、の、水こそが、くるりくるりよりももっと怪しいて違いなく、その怪しさだけで水。確かに水、でも確かって言えて仕舞うのってもっと怪しいよね、なんて言えて仕舞えるのは誰？の誰も居る筈もないなら、死んで冷たい肉襞に温かい隙間でも見付けてそこへ眠り込んでる潜り込むように、淵の底へと、暗がりの果てのない明るさに落ちて見開かれるかに、蛇の目は拡がって。まさか。そんなの、間違

いなく蛇の目でだけは有りませんよね、時ですものね蛇って、時に目なんて有ったら、どうにも時を抜けた先まで光りも闇も刺さって時を止めてしまう、なんて話しもまるで惚けた嘘でしかなく。ならあなたの目でしょ、「蛇そっくり、」って蛇の時に、うっかり押し付けられるように言われそうな。さあここですよ、あなたって、どんなあなただろうと逃れようもなく、然もあなたはあなたの姿を見付けようもなく。あーあ、死んだ儘産まれて流されてればな、なんて繰り言しか出て来ませんかね、でしょうとも、だって淵の底から聞こえて来るのはそんな声ばかりです。違いますかね、いや違えようもありません、だって声なんて、うっかり産まれてしまって、その産声の届く処までへしか、その屍を晒せない恨みの吐く息ですもんね。すぅはぁーとも微かにも響かずに、丸まって俯いた小石を並べるかに。だって、どんな声も掻き消されて仕舞いますよ、時でもなしの匂いの立てる、何処までも遠くへ逃げ去るかの音には抗いようもなく。で、その音だけを聞こうとする大きな耳を右と左にゆらゆら生やして蛇は、その己の姿を、時でもなしの匂いの姿と態とふてぶてしそうに見誤るかに浮き浮きと、孰れこの先、淵を溢れ出る水の背に乗るかに、殺されるあなたの時を探し回ってましょう、刺刺した脚も生やし生やしキビキビと。は、それとして、微かにも響かない声も、水に落ちて淵の底に小石の積まれるかに重なり合うなら、微かには水の上までその響くのを見て取れたからには、あなたの声もその

内に混じってましょうね。それは初めには生きて吐く息の繰り言だったにしても、水の底からました水の上まで透けて上ったなら、すっかり笑い声のような呼び声のような掛け声のような、でもやっぱり恨みだけは含んでそうな乾いて籠もった声で、でもあなたにはそんな声なんて知れないんですよ、だって疾っくに水に襲われて水に奪われる為の命を奪われてますもんね、何処か遠くにその屍を晒して。いや屍なら、あなたの産声の届いた処に留まって、ずっと待ってましょうか、蛇と水との成り行きのその行き着いた先からの棘棘浮き浮き脹らむせでも、逃れようもなく。ならそれで、そこから引き返すしかありません、淵の底さえ、時でもなしの匂いばかりなら。だって屍なんて、時に食い潰されてるだけですもんね。そんな時の重さとは隔てられて、あなたと呼ばれるだけのあなたは、水の底に沈んで流れるあなたの姿を、そのあなただけの死んだ目に見届けられて。時でもなしの匂いには見向きもされずに。違いますかね、まるで違ったって構いません。で、あなたに知れない処では、笑い声のような呼び声のような掛け声のような声が、ねばねばねばと連んで、水から上がって、淵の脇の大きく口を開けるような暗がりに蛇の尾のように絡もうとしてて、その口の暗い中に、丸っこい研ぎ澄まされた大きな刃が、円い鎌にも見えましょうか、くるりくるりと回っているように思えて仕舞えば、それに歯を立てるように、暗がりの縁にこれ見よがしに滴る血に見立てた赤い長い端切れを、どうに

も垂らさずには居られません、って誰が？そこでなら、あなたまだ殺されてないんでしょ、違いますかね、いやそれってもう、あなたじゃないのかな、水に圧されて死んだあなたの姿を、ぐるり一巡り、その水の奥から見たかに確かに自ら見て取って、それで戻って来たのなら。それともそれでもそんなあなたならあなたで、あなただってきっとそうで構わないんでしょうけど、やっぱりそれって、あなたの死んだのにもまだ知らない、あなたを良く知る筈なのに、でもまるで知らないような、誰にも知られない誰かでしかなさそうで。でもそれじゃ、あなたって呼べないんですよ、だってそれじゃ、それ見知らぬ私だ、ってさえ呼べちゃいますもんね、呼びませんけど、呼んでみたって、知らない誰かが、おォそれって俺か？って戯けて振り返るのが関の山って、その知れない誰かにも、だって他に居ませんものね、当たり前に分かってますし。ならそんな、誰が？な話しなんて、誰にもどうでも良くて、つまりあなたもあなたの死んだのもどうでも良くて、どうでも良い程にあなたはもう死んで、再び思い出されもせず、なので死ぬのが怖い独り切りな誰かさんが、暗く開いた口の中に回る白い鎌に魅入られるかに黙り込んで、誰にしろ死ぬのは、時でもなしの匂いに目眩まされるからだろうなって思い耽って、眠るように、はっきりとその匂いの姿に狙いを定め。そうして、その鎌の回るようなのが、時でもなしの匂いの立てる音だって分かれば、蛇そっくりなら蛇の時は、その片耳を、眠るような

上にまた眠るように差し出し、そろり。そうしてもう、片耳を切り落とされた、くるくる回ろうにも少しも回れていないかに歪にしか回れない姿を、己の時の前に晒して、なら何処か時でもなさそうに、それでも片耳の儘に蛇でもあるなら、その姿は、うっかりそれを前にして仕舞うもう一人の誰かさんの目には必ず晒され。しかも、時は？時は？って呟くのを已められないその誰かさんには、それが蛇の姿とは少しも知らされず。その何とも知れない姿の、切り落とされて無い片耳ばかりを、またうっかり追って仕舞うその目は、泳ぎに泳いで、溺れも出来ずに何処までも辛い儘に。回るんですよ、くるくる、もう目でも無く。それまでのくるくるなんて少しもくるくるじゃなかったって思い知るしかない程に、ただ何の姿もなく匂い立つように。だって、そうですよね、どんな形にしろ姿を晒してたら、その姿の歪さに歪められて、そうはくるくるなんて回れませんものね。いや、そうなら、くるくるの姿も無しに回ってるって訳ですかね、いや面白い。でも笑えるのは知らないまた他の誰かか何かで、僅かな歪さも撥ね除けて、だって風に吹かれでもすればそれだけでくるくるは歪みもしそうなのも受け付けず、そのくるくるだけで回る姿は、さて誰でしょう？の誰だって構わない、姿も無しのくるくるな儘、その少しも狂わないのを際立たせれば、却って、あれやこれやに埋もれ掛け、ただそれだけが際立って狂ってるようで。それともあれやこれやなんて疾っくに水に吹き流されて仕舞ってるなら、

そのあれやこれやこそ、少しも狂わないくるくるの呼び寄せたい、果てのないばかりで哀れな水の狂うしかない姿かも。くるくると水とが、互いを恐れ、触れるのも見交わすのさえ怯え合うかに。ならきっと、そのくるくるって、水の狂う姿だったんだって、そんな声もざわざわしてそうな淵の底へか、残った片耳を欹てれば、迷うばかりならうっかりくるくるをなぞるかにもその己の行き着く先を探してそうな蛇の姿に、蛇はその自らの心を見出したかに急いで水に刺さって下って、その底に、色形のない姿を溶かすかで。そうして溶かせたなら、蛇は蛇の姿をその溶ける様に見出せたろうに、でもまるでそうじゃないのは、硬い影を添わせて、その尖った身が、溶かされるのはきっと水の底の奥に埋もれた死んだ声か何かで、そこを深い泥を刺し貫くかに真上へ、一筋の鋭い光りのように水を撥ね除けずには居られないのは、何。蛇の姿か心か、まさか、でも何だって構わない、それより、それが何を狙ってるかですよね。と来れば、それはどうにも命の他にないんでしょうけど、ならそれは、淵の脇に口を大きく開ける暗がりに飛び込むしかないんでしょうけど、だって汚れた空の明るくも暗くもない下になんて何の命も見当たりませんものね、でも、暗がりの縁の滴る血かの赤く長い端切れに阻まれて。でも却って、白い腹を鱗を尖らせるように晒して暗がりの縁をくるりと巡れるなら、見ようによってはそれ、温かな血を吸おうと暗がりの奥へと身を縮ませて飛び込みたくて悶える円い刃なら鎌

でしょ。まるでそんなには見えませんかね。ですか、ならそれって、死んだあなたの心でしょうか。アハハ鎌掛けただけですよ、見ようによって見えるのなんて見ようによるだけのものですもんね。で、そんな見ようしか出来なくなって、ハタと、時でもなしの匂いは何処からも失せて、探そうにも真っ先にその匂いを頼るしかないのも分かって、悶えてなんて居られなくて身を弾くように、暗がりの裏を素速く回り込んだかに、力の限り暗がりごと、水へ引き込もうと。それってもう、命を確と搦め捕ったんですよ、でしょ？まるで違いますかね。いやその、命ってのが何ともね。怪しいって言うか怪しくさえなくて、まるで嫌嫌そうさせられてるかに、命を奪いたいばかりの時の一回りを誘き出そうと、血腥い甘い息を吐きながら科でも作ってるかで。そんなの、そんなものかも知れません、そうするしかなしに狙って仕舞ったなら。でももう後戻りも出来ず、狙いに狙って、そんな事ばかりを繰り返すしかないにしても、でもそんなの初めから分かり切ってたかに、疲れ知らずに勢い任せに楽しげに。で、その楽しさばかりが、先ずは水面をさざめかせて、直に水の底へまで放られて行きましょう、死んだ声を揺り起こすかに。ん？死んだ声って何でしたっけ、死んでも死んでなくても、声って声ですよね。尤も水の底じゃ、何だって、死んだも死んでないもなさそうですか。なら声なんてまやかしで、まやかしてるは何でしょう、そうか、時でもなしの匂いは、水の底のその奥へ逃げ込んでたんですね、

匂いは捨てて。その、まやかしてばかりの時でもなしが、そこでどうにも影を刻んでしまうなら、だって水は水の奥の果てまで蛇の時に添ってて、その蛇の時が時でもなしの姿を炙り出しに掛かって、それでもその姿を隠したいなら、影だけは蛇の時へ差し投げるしかなさそうで、薄っすらとでも、で、その影も時でもないなら、水に触れるなり直ぐ様、光りへと裏返って。いや裏返るんじゃなく、影は初めから光りだったとか。それともそれは、影でも光りでもないって事ですか、そうしときましょうか。だって、何ですか、それ何ともずっと分かりようもなさそうに、なんて言われてませんでしたっけ。でも影でも光りでもないのって、それで消えた儘で居られるかって、まるでそうじゃなく、影からも光りからも身を投げ出されたなら、その姿は丸ごとそこに晒されるしかないんですよ。違いますかね、さあこれが違うか違わないかですよ。逃げられませんよ、でも何処から、なら、ぐるり囲むものから、に違いないんですが、それって蛇に違いない、って言ってみましょうか。まるで違いますかね、いや違ったって構わないんです。だって蛇の姿なんて、誰も知りませんものね。知らない内に、棘に覆われた脚が数知れず生えて、それでも生え続けて脚と脚が食い合って、食い残った脚と脚が、思い思いに水を掻くように泳ぎ躍って、時でもなしの姿に絡みに絡めば。さあそれで、時と時でもなしの姿が、蛇が己の姿に絡むばかりの姿となって、そこに晒されるしかないとなったら、時も時でも

なしも、そこから撥ね除けられて、蛇は蛇の姿を失って、なら蛇ではなく。何でしょう？も何も、それが、何ですかそれ何ともずっと分かりようもなさそうに、って晒されたそれなんですよ。違いますかね、いや何が？何が違いますかね、なんて言えますかね。言ってますけど。いや何を言ったって、何も言えてないんですよ。何ですかそれ何ともずっと分かりようもなさそうに、の他には。で、それは、時からも時でもなしからも弾かれ拒まれる儘に、やっぱり水を掻くように躍るしかなくて、色も形も水そっくりに。水そっくりなら水で。まさか、水そっくりなら、まるでそれだけは水じゃないんですよ。他の何もが水に成り果てても。なら、そうしてそれは、自ら躍って、水を躍らせて、水と水の隙間に、くるくる回る細い影を面白いように次次に吐いて、そうして縒り合わさる影ならその勢いだけで水を切って、水底と水面を往っては還って。でもそうなら、それって時ですよね、それとも時に成ってしまいそうで、時でもなしなんでしょうか。きっと、どっちかです。どっちでもないなんてないですよ。なら、どっちでも構わないって事ですよね、違いますかね、違ったって構わないんです。だって何を言ったって、何も言えてないのはその儘なんでしょ、きっと。違うも違わないもなしに。だからくるくる回ってられる訳です、なんて軽口も叩きながら。でもね、それ、揺り起こされた死んだ声が放って置きませんよ。声って、死んで揺り起こされて声なんですよ、死んでもないような振り

をして。やっとそうと分かったなら、声は心置きなく、水の中の水じゃない何ともずっと分かりようもなさそうなくるくると連んで、幾らでも、ほら、湧き起こってるじゃないですか。何処を見てるんですか。そっちはくるくるの向こうですよ拡がるばかりの。こっちを見なきゃ。くるくるが水を拒んでくるくるだけで交わって、水の底を抜けて、もっとずっと落ちて行くでしょう、真下へ真下へ、水の底の底を見付けられずに。声が何て言ってるか、切り取られた片耳は、「上がれ、上がれ」って聞き取れてましょう。だって、それで声は上がるんですから。上がって上がって、なのでまた真下へ、って、そんな声の姿が幾筋も、そこら辺りに穴を掘り散らかすように。それが曲がり拗ってしか見えないのは、あなたの目が死んでるんで、死んでも見えるなら、何時までも死ねなくもありながら。アハハ、また鎌掛けちゃいましたかね、だって真下へ穿たれるばかりの声はどれも、鎌みたいに円い刃に成りたがって、それで益益研ぎ澄まされもするなら、穴はもう水の底を抜けた先も抜けてましょう。そうして円い回る刃は、水を上がった重く泥より濃い血を頼りの命などを、その血の味にたっぷり酔った一つ一つ窮まった時に添うかに求めて、くるくる回る蛇を追って、でも追われる蛇の姿なんて、水の途絶える縁の鋭さにぶつ切れて、だって時でも時でもなしには一つ一つに、

（二〇一七年十二月二日）

（取り替えたいんじゃなくて…）

　取り替えたいんじゃなくて、変わりたい。夜が窮まれば日は変わるしかないみたいに。その暗がりに紛れて籤でも引こうってな事かな、変わりたいって。でもそれ、知らない何かと取り替えてるだけだよね。知らない何かだなんてうんざりする程在り来たりなものに惑わされて、同じ朝に戻るかに日も変わらずに、その取り替えられた何かに縋るように身を振って、引かれただけの籤か、みたいに。じゃなくすなら、その籤を、暗がりに紛れて、その暗がりを切り分けて印を付けるでもして思い通りに拵えたんでなくちゃ。そうして引いた籤の印の向く先へ自らを投げ出せたなら、窮まる夜の暗がりも、知らない何かと取り替えられたりせずに、日の変わる処とは違う何処かへ身を変えて、とかね。それって何、あの色ともどの色とも違う、見た事ない色に身を染めるみたいな事かな。良いね、そんななら、日なんて変わろうと変わるまいと知らない。つまり夜の窮まる度に、新しい色が作り出されては、その色を纏って、変わり続けられる。そんな身なら、確かに何とも取り替えは利かないし、ずっとそんなで居られそう。でも光りが目障り、暗がりを切り分け、切り分けられた暗がりに付けた印の。でも身を照らす光りもなくては変わったのも確かめられないん

では、かと言うとそうでもなく、寧ろ印の先の暗がりにどれ程身を溶かし込めたか、じゃないかな。だってそうしてしか、見た事ない色に染まれそうにないし。ならやっぱり目障りな儘の光りをどうにか振り捨てなくちゃ。夜は明け初め、低い山の際に覗く陽も独り赤く浮き。「山際？山なんてそこから望めたっけ。」ああ、そんな事を行き成り言われるとは。その声に縛られ、身は真っ暗がりに浸され、溺れて、その色に染められそう。で、どんな色？と見ると、艶艶と輝いても、その奥には真っ暗がりばかりで何の色もない。真っ暗がりの艶なんて要らない、だってそんなものにうねうねと纏わり付かれ、もうどっちが山並みかも見分けられず、ずるずると何時までもうねうねと。で、夜は白んで、目障りだった籤の光りも、すっかり朝の青い明るみへ溶けて。でも夜って明けたのかな、山に陽の昇るのを望めないでは、ここだけは明けない夜の底ばかりが、その底も抜けたかに拡がるようで。明るむ青の嘘なんて直ぐに暴けたみたいに、その夜の儘変わらない拡がりへ平べったく身も拡げようとするなら、要らない筈の真っ暗がりの艶が頼り。でもそれで良いかは、どうかな。その艶がなければ、疾っくに夜の底から弾かれて、束の焼ける空に身を赤く染められていたかも知れないし。稲光り。そうか、稲光りなんだ、暗がりへ拡がる平べったい身は、って勇んで稲光りを追う身は小さな獣みたいで、夜の底の底を当て処なくひらひらと舞う、平べったい一筋の艶、捥げた翼の形を伸び縮みさせて已

まない。でも分からない。でももしそうなら必ず身は熱い色を纏って、秘め
られてても、で、その色の熱いせいで暗がりへ消えた身を、次の稲光りが追う
んじゃないか。って待ってもじりじりするだけ。遣って来ないんじゃ色に乗れ
なくて、その熱いのに繋げた望みも萎んで、身の持って行き処もない。せめて
小さな獣の姿だけは見失わず、夜の底の色に翼の形は溶けたにしても、光りを
追うように伸び縮みだけは繰り返して居たい。でも何遣ってんのかな。どうや
ら赤い花か実をびっしり付けて歪な房を、扱いて捻ってるんだよ、稲光りの替
わりには、とても成りそうにないって分かりながら。見下ろすとその同じごつご
つした赤が敷き詰められてて、その赤が恥ずかしいのか、夜の底は何処かへ逃
げ込んだらしいね。でその赤の上を、そのごつごつに呻き藻掻いて、転げるよ
うに伸び縮みを繰り返す艶は。それとも艶じゃなく、ごつごつをまるで慈しん
でて、それが悲しくて、却ってそれを恨んで責め苛んでる。そのどっち付かず
で揺れ動くばかりでそこに囚われた、稲光りに成り損なうかの熱い色。でもそ
うして熱い色なら、やっぱり艶でもなくちゃいけないような。でも熱い色と艶
で合わさるなら、疾っくに稲光りに成ってそうだけど。そんなどっち付かずじ
ゃ夜の底が戻って来るのをどうにも出来ないんだけど、それで何がどうなるか
って、敷かれた赤はその儘か、それとも、そのごつごつが濃い影を荒く揺らめ
かし、赤はどんどん夜の色に侵されて、その汚れた色の塊が、数知れず互いに

擦れ合って暗がりを転げ回ってるか。どうやらどっちでもあるみたいに、汚れた赤い色の塊が、ごろごろと響き合ってるかな。ああ、なら見覚えがある、だって元は皆、そんなもんだったんだよ。いや皆は言い過ぎかな、でも少なくともこの身は。で、そんなこの身なんて、数知れずその、もう赤く汚れ始めた暗がりに蠢いてて。そんなこの身が数知れないなら、その果てもなさそうな一繫がりの群れは、ずっとその暗がりに身を寄せ合って棲み着いてたに違いない、何も変わらない時に埋もれる眺めに埋もれて。この身は、その内の一人で。って分かれば、赤い花か実をびっしり集めた房を扱かなくちゃならないのも、分かったみたいなもんかな。分かり過ぎて、何を分かったかなんて振り捨てて、その房に独り取っ付いてるよ、もう。「お前じゃない、って事は、見窄らしいお前らの内のどいつでもない。」ああ、また行き成りそんな言われようとは。じゃまた夜の窮まりでせっせと籔作りかよ。でも眠ってた訳じゃないから、そこへも戻れないなら、ごろごろと果て知れないこの身ばかりに打ち沈んで。見上げると、その身をも照らす、広広とした稲光り、きっとそうだ、そう見える限りは。でもその限りを越えた向こうに風の遠く真横へ吹き過ぎたのも見えて仕舞えば、何も見上げてもなくて、歪な赤い房ばかりが、汚れた赤の擦れ合う響きに洗われるかに、艶艶と尖った姿を、これ見よがしに翳すようで。その赤の輝きに圧し潰されそうになりながら、房には房だ！って誰かが叫んだん

だ、きっと、で、数知れないこの身が競うように房に成ろうとして成り損なって、夜の底からさえ、ぼろぼろと落ちて消えて。で何が残ったの？ってそう尋ねられる奴が残ったんだけど、そいつは何。何だって構わないんだけど、なんて嘯いてみたって、まあ暗がりしかないよね、その暗がりって何って尋ねる暗がり、とか。きっとそんな事してる姿が見下ろされてるんだ、あの房に。の房が見当たらないんだけど驚くでもないね、だつて、夜の底さえ見上げなくちゃいけなくて、でそれも何処にも見付からないんじゃね。いや夜なんて知らないよ、そんな怪しいもの。ただ暗いだけなんだ、って何が。って何でも構わないけど、稲光りだけは、ずっと待ってる。だから暗いんだって事にしとけば、それだけの事。でもそうでもない、だって、遠い真横に吹く風の中に、小さな火の色が流れてるよ。あれって、稲光りが着けた火なんじゃないの、あれを見付けて仕舞っては、拡がるのは、その火の燃え広がれそうな常にじわじわと臭いのを誇るかの粘っこい黒土ばかりで、稲光りの走る狭い空なんて怪しい夜ごと潰されて、きっと黒土の向こうへでも捨てられて。その埋められた辺りから、もっと色色と埋められたものらが何やら叫んでるみたいだけど、どれももう木霊だね、だって叫んだ口は顎ごと切り取られ、集められて燃やされてるじゃないか。その火の色さ。って分かったところで、夜も暗い空さえ失つて、それでもただ暗いだけで居られるのかもあやふやじゃ、じゃ火を見付けたのは誰かっ

て探して見付かるのは、赤児に戻りたいかに手足を短く縮めて這い回る奴らで、首も縮めてるのはきっと切り取られた口と顎を晒したくないからで、そんな己の腹の中の暗がりだけを見詰めていたいようで何故火を見付けられるか、とても分かりそうにない、その分かりそうになさを競うかに、互いの平べったい尻へ尻へと身を捻って隠れるように数知れず蠢くらしいにしても、その数知れなさも少しずつあやふやになって、数が知れるも知れないも、元元数えらない奴らなんじゃないかって。でもきっとその数えられなさが力に成って、夜も暗い空も無い処を、思いの儘、動き回れてる。その力になら、房には房だ！って叫び直されて、房は嫌でもその力を真似るかに、朝焼けを黒く透かすかの赤に染まり重なって、その姿を、空でもない何処かに高く晒し掲げようかね。まあ、確かめようもないけど構わない。それより、その力の形が房そっくりで、ならそれは幾度も研ぎ直されたような牙にもそっくりで、ならもう、それは突き立てられて、そうして突き立てられる姿の晒される儘な程、力は増してるんだけど、それは何処へも持ち出されようもなく、その突き立てられてるものの中に、溜まりに溜まって。でも幾らでも溜められる、溜められる向こうにまた溜められて尽きそうにないよ。そうして向こうへ向こうへ行き果てれば、そこに陽の昇る山も聳えてそうに。でも、そうに、なだけで、何も叶わない。だから力も増して尽きないんだね。って事にして、そこで、数えられない奴らは喰い繋いでんだ、

何を喰ってか、なんて知れなくても、そうしてどうでもそこに棲み着いてられる、だよね、喰う他にはただ澄んだ泥水を啜るでもして、どうかな。で、房には房だ！　でもそれって叫びなのかな。叫びなら何処かの耳へ突き刺さらなくちゃいけないんだけど、数えられない奴らに耳が生えてたにしても、数えられない耳じゃ、聞こえるかも知れない声だって数えられなくて、つまり突き刺さりようもなく聞き止めようもなく、それが叫びか呟きか、ただ黙り込んでるだけかさえ分かりようもなさそうで。奴らには、それでどうだって事もなかろうけど、房には房だ！にしてみれば、何ともあやふやな儘で居るしかなさそうで、でも却ってそのあやふやさで、届く処には、きっともうそれが何かさえ分からない儘に届いて、遠い風に乗って来てその風の向こうで湧いて出たかのきびきびした身振りを誇って嬉しそうな、数えられる耳を持った奴らに、確かにそれは聞き取られてて。で、奴らは何をするだろう、房には房だ、の房も分からず、それを叫びとも声とさえ分からずに。でも何か耳の事なのは間違いないなら、その耳を、房には房だ！の向こうへまで欹てて。稲光り。そうか、稲光りなんだ、房には房だ！は。そう聞き取れてこそ、何と取り替えられたでもない耳で。何だったかは知れない何かが、稲光りのせいで、それまで何処にも無かった耳に変わったとかね。そんな耳なら、それまで聞き取れなかった事を何でも聞き取れようか、きびきびと、って聞こえて来るのは、他の何も聞こえなくさせる

ような、たった一つの声で、それは、空程に大きな貝殻の底で叫ばれてるようだけど、でもう空は無いんだから空とも比べようはなく、ならとても小さな貝殻の中に凝っとしてるかもなって、耳は狭く狭く尖って、でも狭い程に、空より大きな向こうのどんな小さな声も聞き取れるんだけど、どれも、初めのたった一つの声とそっくりで、その声は何処の一つとも数えられなくなってて、その数えられない声ばかりを、数えられる耳で聞こうとし続けて、で何がどうなるでもないなら、そこで声と耳とが数を挟んで数でない距たりを睨み合って血みどろの争いでもしてるかに、辺りはすっかりどろどろ濁って波立つようでもある赤に埋まってて。ずっと赤い房を扱いてたんだからそうなったんでもありそうに。ならもうそれで、房には房だ！の稲光りも、勤めを果たせたかに要らなくなっても良さそうだけどでひょっとして稲光りだらけなんじゃないの、熱い色は秘められた儘に。それ、きっと空は要らなくなって、めらめらと散るように無くなったんだよ。でその稲光りの届く限りが稲光りばかりに照らされれば、数えられるられないの争いも収まったらしく、たった一つと数えられたか数えられなかったか知れない声が、ぶつぶつと濁った赤を裂くように、湧いては溶け溶けては千切れて、それを、房には房だ！って聞いて仕舞って良いかが、どうもはっきりしないのは、稲光りに照らされる稲光りばかりでは、その姿をその一つかの声に映せないからに違いなく、なら、稲光りが、照らすばか

りじゃなく、稲光りを映す鏡にでも成るしかなさそうだけど、でもそうなら、互いを自らの姿と映し映して、それらはきっと数えられなくなるまで尽きずに、たった一つと貫かれる稲光りの姿を現しそうで、にしても尽きないなら一つとも現れ切れず、そんなでは、房房房房…には房房房房…で、房房した一つかの声が、何処までも光り輝いて已まないようでも、それはそれが照らす処から向こうへは抜けられず、房房した姿の中に閉ざされて。で声は、房房と閉ざされたその房房の房って何？に変わってて、それは間違いなく一つなんかじゃなく、数えても数え切れない「って何？」は、どっちの房の向こうへも向きて果てず、房に房が群がり集まるように数えられなくなって、それでもそれを声として聞き取れる耳が有るなら、耳の底は、どろどろと汚い限りの真っ赤が、渦でも巻いてようかね、稲光りを集めて溶かして、その熱さで何処へも逃げられない儘の稲光りの呻き重なって、重いばかりのような。それって、その熱い赤なんだよ、だろ？見付けたぞ熱い赤っ！って叫んだんでないなら何。って言うか、そう叫ばれたのならそれで、稲光りなんてのは、その叫びの響いた遠い果ての木霊かもね。で何が見付かったんだっけ、耳に底なんて有るもんか、耳の底なんて初めから抜けてて、その抜けた下か先の明るくも暗くもない何の色も無い狭い空の下に、数えられない内の一人の丸裸の赤裸な姿がウロウロして るなら、そいつが独りで、取り替えたいんじゃなくて変わりたい、って思って

て、そう思えてだけ、薄っすら小さく赤を滲ませる捥げた翼が、それだけでうずうずとその痛みに息付いて、暗い色を呼び寄せたそうにしてるのを、見付けられるんじゃないか。それともそれを他に、見付けられる奴が居るだろうかと、辺りをぐるり独りで見回す姿。って、こいつかな。このこいつ、が嫌なら、あのあいつ、でも構わないような。で、そのこいつかあいつかのそいつは、それを見付けたばかりに、取り替えたいんじゃなくて変わりたい、って思ってたのを忘れて仕舞ったんだ、何を忘れたかも忘れてね。でもそう分かるって事は、何も忘れてないよね。じゃ忘れるって何だっけ？それが、忘れられて、分からなくなったんだね、そうとは分かってても、どうともならない程に。なら、ただ丸裸。まるで稲光りみたいにつるりと独り切りの、って言ってみたくなる。言ったんだっけ、言う筈ないよ、だって独り切りなら、己の姿をどうとかって言える奴なんて居ないからね。でも裸とだけは知ってる、だって独り切りで、どうにもそこに赤く滲む翼ばかりを見付けた儘で居るしかないから。その赤を身に映したんでは、どんな何だかって赤裸に違いない、って勢い込んで、つんのめって、出来ればその赤の中へ丸裸ごと消えて仕舞おうと。稲光り。でもそれ裏返ってる、きっと。だってそれ、暗がりの小さな塊ばかりが集まって、下を向いた尖った房を作って、下を向くなら下へ突き刺さる筈が、下からの薄っすら滲む赤に突き上げられて、低い空へ汚く砕けたねばねばした光りが、ごろごろ

と撒き散らかされて行くからね。そうして低い空なんてやっぱり空でもなく、身動き取れずその己の光りにじわじわ沈み込むしかない暈みたいな。房の形はそれにすっかり暈かされ消されて、再び稲光りを目の当たりにする事もないかなって分かる程に丸裸に独り切りな姿が、何処かの暗がりからうっかり切り取られたかに、暈の下を、その暗さに圧されるかに重そうに舞って、ひらひらと裏返り続けるなら、その儘それは滲む赤かな、薄っすらと。それって何を取り替えたんだっけ、それとも取り替えたんじゃなくてそう変わったのかな。でもそんなの、どうだって構わないんだ、忘れるまでもない程に。赤なのさえ忘れる程に。だってもう、丸裸でも独り切りでもないからね、どうにも元へは戻れずに、の元なんてきっと無い程に。裏返られたからには、裏か表かのどっちかには何か纏ってる訳だし、その姿が色となって滲むなら、色を独り占めなんて出来ないもんね、ほらもうそこに、色のない奴が色を盗みに来てるし。色を隠そうにもひらひら舞う身は止められなくて、色のない姿の中に獲物を狙うような二つの瞳は赤くぼやけて眩しく揺れて、火でも点ったみたいに、こっちを照らして来る。でもそれが徒で、そうして照らされるこっちの身が、どうにも鮮やかに赤く染まれば、それと照らし合わされるそいつの身は、真っ暗がりを切り取ったに違いない、その暗い艶に包まれれば、どんな色も撥ね返して暗い儘の姿に凝り固まって、それでも赤を奪おうとこっちを睨み付ける程に、愈愈瞳

ばかりが燃え、瞳の端にその我が身も映るなら、夜の底を掠め覗いたかに何処までも暗い色の濃さを増すばかりでは。でも待てよ、その濃さを増す暗さの突き当たりかにでも、初めの色を剥がした痕が見付かって、その暗さが、その痕から湧いて来てるのも分かって、で却ってまた、剥がされた色は遠ざけられるんだろうけど、その色って間違いなく、この身に滲む赤で。なら、盗みに来たんじゃなく奴は取り返しに来てて、盗んだかも知れないのは、こっちで。の、こっちってどっち？数えられないこっちか、数えられるこっちか。どっちかには違いない、でもそんなの直ぐに分かるよね。分かれば、分かって仕舞うのは拙いとも分かって、分からなくなるまで有耶無耶になるんだけど、それってもう分かる分からないを数えてる訳で、こっちは何処も彼処も数えられるばかりで、その分厚く囲われた真ん中に守られて滲む赤に身は深くじっとりと染まって。でもそれで数えられないこっちも消えてなくなる筈もなく、そっちかどっちかに、やっぱりどのようにか、きっと荒れ狂うようにか静かに赤に塗れてて、こっちのこっちの分厚く囲われるのを外から囲ってて、で、その外のこっちから見れば、中には何の色も見付からない替わりに、そのそっちのこっちの色を窮まり深めて行こうね。さも赤く、どんな赤も、さも赤くしかないかに。どんな色も、さもその色のようでしかないかに。なら、そっちはどんな色だって有りそうだ、有りそうなら、どんな色も有りそうに。稲光り、いや違う。それは光

りのあやふやな瞬きより短い一声で、それに促されて真ん中の赤に染まった筈の身は、そっちへ這い出るかに色を失う姿を転がしてて、膚へ纏わり付いて来るどんな色も染み込ませたくて痩せ細って行くね。だって痩せる程に色は濃さを増すようで。いや、痩せ細ってるのは、膚へ挑み掛かって来る色の色で、それは尖ってるばかりで色とも見えなくて、そう見えないんだから色じゃなく、なら何って、身の細るのも窮まれば何でもなく、消え失せた一声の後を追い遅れたかの暗がりが拡がって、身はその拡がる向こうへまで転げ出たか、光りでも浴びたそうに翼の形を己の内に探して見付からず、替わりに、翼を失った小さな獣の姿が、それを照らす夜の光りと四つに組み合ってるなら、身はどんな色より濃い、その夜の色一色に染め抜かれ。なら赤は、と目の向く先は、初めの色を剥がした痕しかなさそうだけど、そんな痕なんて有る筈ない替わりに、濃い色をたっぷり溜め込む、底の深そうに震える傾いた穴が、夜の光りを分ける裂け目のように口をぱっくり開けてて、その色は、そうして夜の光りさえ退けるようなら、きっと夜の光りより更に濃い色に光るらしいかな。と、それで直ぐにその穴へ飛び込んだのは小さな獣に違いなく、然も間違いなくその姿の翼の形を拡げてたよ。裏表で、どっちかが真っ赤で、どっちかが夜の色の。で行き成り大粒の雨音に辺りを塞がれるなら、その拗けた水に流されないよう穴から頭を出して獣は、取り敢えずは鳴くしかないにしても、その声にも同じ裏

表が有って、でも声じゃ裏と表の境目なんて知れてるから、真っ赤と夜の色は、また何時もの血みどろの争いにのめり込むばかりかで、でもそれで良いんだよ、激しく争う程、雨を弾けるからね。もう雨音の隙間も見付からず何処もびっしり野太い雨の筋が差し込まれ、その水の重さが、夜の果てまで轟き渡るような稲妻を呼んでても、それらはずっと遠くな儘で、ならそれを間近へ引き寄せて遣ろうって、獣は翼の形を黒雲へか尖らせた身を穴から剥き出し、真っ赤と夜の色の争い窮まったかの声を重ねて張り上げるにしても、透かさずどれも雨音の響きに溶けるばかり。その溶けて流れて低く窪んだ溝にでも溜まった声を啜って、その真っ赤と夜の色を舌に絡ませてる奴の喜び勇む身の熱さのせいでか、一頻りの大雨はふわりと断たれるように已み、暗いばかりの静けさを破って何処かから、びらびらと捩れて延びる舌を振るわせてるに違いない、鋭く重なる血のように濡れた声は、色を取り返したぞ、とは聞こえても、色は。争いは絶えたんだ、きっと。なら色は何処？ああ、あの遠い火だよ稲光りの熱さと艶の輝きを移した、見付けた訳じゃないよ、思い浮かんだだけ。それを探すべきかどうかを考えるのも惑いながら。でも何をしたい火だったんだろう、とは考えたい。って考えるまでもないさ、真っ赤と夜の色を取り替えたいんだ、それとも、赤を夜の色へ変え、夜の色を赤く変えたい、って言えるのかな。でも、それってまるで火の事なら、こっちがどうこう言うでもなかろうかね。それがど

うかは、その火を使わなくちゃいけない奴だけの悩みにしても、火にまさか耳の生える筈はなく何の声も届かないなら、火に近寄って姿を晒せる奴なんて居なかろうね。でも、火に向かって、己の身を千切って、曲げた骨を繋いで組んで肉を縛ってぎしぎし束ね纏めるかして、黙ってそれを次次投げ付けるなら出来そうで、でも火がそれを喜ぶかどうかは、どうかな。火はきっと、色の事だけで燃えてたくて火なんだよ。なら何を燃やすかなんて知った事じゃないかも知れないけど、その投げ付けられた肉と骨が、火の知らない色に熱く輝いたりしたら、そんな色は避けて身を拗らすかな、数えられない身ばかりびっしり押し込められてやっと息をしてる狭い中へ。だって奴らにしか守れない火だもんね、奴らの数えられない生身と腐った屍とが混じって絶やさず燃やされてるんで。なら骨と肉を投げ付けてるのは数えられる奴らと極まって、数えられるんなら、その骨と肉の数も限られてて、全て投げ切ったなら、奴らはもう骨も肉もない、身でもない身を、何処かに隠すしかないんだけど、何処へ隠れようにも身でもない身じゃ、身を隠しようもなく。それが、赤い花か実をびっしり付けた房の扱かれてるような姿なら、取り替えられるか変わるかする色の姿を、ぐるり一巡りしたようでもありそうだけど、そんなの吹き千切るかに間近に轟く稲妻の音が、びっしり固まって歪に捩れた牙みたいに、隠しようもない身の隠れてる辺りへ、震えて突き刺さる儘に動けずに、火の色に突き通されて悩ま

しく。「ああ、その形が房みたいじゃないか、色だって房房と赤くしかなく。」って声を上げて、戯れ掛かるように身を投げるのが誰にしろ、そこに独りだけのその身は己を稲光りにでも準えたかったか、でも準え損なって、開けっ放しに固まった口へ、どろどろと夜の色を流し込まれてないかな。まさか、夜の色がどろどろしてる筈ないよね、ならそれって、そいつの変わりたかった色とか、それとも、その色にだけは変わりたくなかった色とか。身は、澄んだ泥水に放たれたかに直ぐに、その色に染まって。それがもし、その色にだけは変わりたくなかった色だとしたら、それって、何と取り替えられるでもない、全くそれに変わって再び変わりようもない色な。じゃないかも知れないよ。でも、じゃないかも知れないなら何。その何?にも、見えなかろうが色が有るに違いなく、そんなで他の色とどう取り替えられようかね。なら逃げられないって事さ、望んでた通りに。なら、て事で、変わる色もケリが付きそうかって言うと、な筈ない、だって変わりようのない色から逃れられないんじゃね。なら取り敢えず、盗んででも取り替えられる色を探そうか、それが何の為か考えたくもない儘に。アハハこれ、まるで元に戻ってないか、全くぐるり一巡り、って開けっ放しに固まった口から漏れて止まらない朗らかな笑いは、虹を架けるかに火を跨いだ、真っ赤と夜の色の流れる弓形の溝へ流れ込んでて、でも弓形じゃそこに声は溜まるばかりで溢れて、肉の脂のように火へ滴り掛かるしかないなら、火に炙ら

れる色は真っ赤と夜の色しかなく、なら、変わりようのない色は、って笑い声が止まれば、火を跨ぐ溝なんて嘘だったって直ぐにバレたみたいに、変わりようのない色に染め抜かれた身が火に包まれてのたうち回りそうだけど、火の熱さで透き通ってるのか、そんな身は火の内に見当たらない。って探してるのは、火を跨いで、己の股を火で炙ってる奴で丸裸で、その熱さを紛らしたくてかに、身の丈程も有る赤い房を抱くか抱く振りかで、腕と胸でそれをそれらしく忙しく扱いてる。でその身が見る見る透けて赤に溶け、房ごと弓形に反れば、夜の色は、その赤の中に、変わりようもなく身を貫いて、これも嘘かなって、夜の虹とか。「なら、嘘かどうか教えて遣ろうか、何処の元へも戻れなくして。」アハハ、って誰に？そんなの教われるもんか。「そう、確かにな、お前らは、数えられないんじゃな。でも、教われないって分かっちまえば、数えらないのさえ夜みたいに怪しくなって、何の色にも染まれないさ。それって、変わりようのない色でしかないって事でもあるけどな。」なら何が嘘かって、お前の言い草がすっかり嘘に決まってて。いやこんな口を利いてるのが間違いで、変わりようのない色の儘、食い繋ごうってんなら、黙ってそっと後ろから、こいつの肉に牙を剥くしかない。姿を隠すまでもなく、だって変わりようのない色なら、己の姿は、そこへ消えてられるからね。そうして、ああ、どくどくと血の色が夜の底へ溢れ、暗い儘に夜の底が真っ赤だって嘘みたいに嫌でも分かれば、夜

の窮まるのも直ぐそこで。いや、そんなじゃ、態態こっちの取り替えの利かない居処を損ねてばかりじゃないか、悪い手だよ。真っ赤だの夜の色だの何の色も距てられないまでに、色から隔たるんでなきゃ、奴らから身を隠すなんて怪しいもんで、きっと。その為の変わりようのない色なんだって、嘘でも腹括って。でも嘘だもの、そんなの出来っこなくて、丸裸でうろうろ出歩いて、いや、それでも偶には血も夜も係わりなしな処で、数えられない色に火を通して、何の色でもない変わりようのない色を膚に映せて、数えられないあの力に縋りも出来ようけど、何しろ丸裸じゃ危うい限り。それに、火が、抑も怪しい限りだしな。手に入る火は酷く見窄らしくて、明けない夜みたいに暗くて、稲光りの煌めきなんて影もない。でもまあ生きてられるなら良しとして、なんて飽き飽きと負け惜しむかに嘯いて。そんな火に見合う痩せて見窄らしい獣なら尽きそうで尽きずに、泥水の底を夜の虹の切れ端みたいに這い回ってて、でも目隠しされたみたいにぎゅうぎゅう詰めに囲われてて、なら惨めに背を丸めて足元に踏み拉いた泥でも喰らってぶくぶく太らされるしかないねって、群れ集う獣の形をもうすっかり脂ぎったその煌めく肉をぶつぶつ突き通すかに繋いで溶かして火を真似るかに揺らして、その辛い程に夜の虹だけは嘘じゃなかったろうなって、（二〇一七年十二月二十二日）

断片　二〇一七

著者　u_

© 2017 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published